Ⅲ　阿仁根子地区（佐藤富久栄さんの記憶）

佐藤家は現在富久栄（昭和２年７月17日生）・千代（昭和８年５月25日生）夫妻で11代目であるが、生年月日の判明した先祖は６代目八助（文化８年５月７日生）、７代目仁助（文政９年９月７日生）・サン夫妻、８代目八五郎（嘉永２年５月１日生）・シュン夫妻、９代目福蔵（明治９年10月21日生）・サト夫妻、10代目富松（明治33年３月27日生）・カメヨ夫妻である。何代目にあたるのか不詳だが戊申戦争で活躍した松五郎の事が若干言い伝えとして残っている。富久栄さんが確かな記憶として遡る事ができるのは、９代目の祖父母福蔵・サトの時代までとの事である。

写真番号１　佐藤富松（64～68歳頃）さん。「またぎ（狩猟）」用衣装の写真。背景の家々はすべて茅葺き屋根である。今から20年（昭和60年代）前までの景色。身に着けている物は［あまぶた］［さんかく］［皮けら（アオシシ＝カモシカ製）］［てっきぇぁす］［はらかけ］「やまいしょ（山衣装）］［もんぺ］［ばんど（弾帯）］［元折れ銃（16番）］［こなぎぇ（またぎべら）］。足元が写っていないが、［はばき（アオシシ＝カモシカ製）］［毛たび］を履いているはずである。

１　生活の背景

根子地区は落人伝説のある村で、かつては余所の地域へ嫁に出せば、ここに「おちびと」がいると分かってしまうという事で、根子地区の中だけで婚姻が行われていたそうだ。しかし限られた地域の中では限られた人数しか生きていけない現実もある。富久栄さんによれば、農地は60町歩あったが60町歩で自給自足するには100戸が限度だという事である。100戸を越せば自給自足出来なくなるため、明治の中頃には山を開墾して何箇所かに分村を出した。分村した場所が後にダムとなり、移動をよぎなくされて余所へ移った人達もいたそうだ。昭和22、３年頃にも根子から20戸位余所の土地を開拓して移り住んでいる。現在の戸数は75、６戸くらいだそうだ。こうした話は限られた空間の中で人間がどの位の数で生きていけるのか、といった問題に示唆を与えてくれる。たまたま特殊な歴史を背負わざるを得なかった根子の人達の足跡は、日本の昔の集落のあり方を垣間見せてくれる貴重なものである。

昭和23年に佐藤家では大きな変化が起こっており、この変化は地域の経済活動にも影響を与えていると思われる。昔は「またぎ（狩猟）」だけでも食べていけたが、だんだんに世の中が変わりそれだけでは食べていけなくなったという背景の中で、その年佐藤家では製薬並びに営業の許可証をとり、商標「弘生堂」として正式に配置売薬（置き薬）の仕事を始めている。それまでは内向きに閉ざされがちだった地域が、才覚を発揮して外に向けて活動を始めた訳である。根子の歴史の中でも画期的な年の一つに数えられるのではないだろうか。製薬の事については後の項目で触れる。

かの（やきぱた＝焼き畑）

根子地域は山に囲まれ沢水も豊富な所で、富久栄さんが子供の頃から稲作をしていた。一方で20年くらい前（昭和60年頃）まで、根子地区の奥山の木を伐って「かの（やきぱた＝焼き畑）」もしていた。最初はソバ、次の年からはアズキ・マメ・アワ・ヒエなどを次々と作っていった。種を蒔く時は傾斜がき

つい土地なので、畝は作らず［鍬］で土をこなして「ばらまき」した。3、4年くらい山を借りた後、「土がやけてきて」作物ができなくなるので営林署に返し、また別の雑木が生えている土地を借りて「かの（やきぱた＝焼き畑）」にした。「かの（やきぱた＝焼き畑）」にした土地は「地ごしらえ」をしなくてもいいし、植林後草も生えにくいため、営林署の方では喜んだものだった。富久栄さんも12、3人の仲間と共同で営林署から山を借りて「かの（やきぱた＝焼き畑）」をやった。「かの（やきぱた＝焼き畑）」には肥料を施さなかった。

ウシ・ウマの「子取り」と「肥え（堆肥）」

また短角牛やウマを飼っていた。短角牛は山ウシといって山で飼うのには適していた。子取りをするために営林署の山に放牧していた。放牧の目安は田植え（5月の末から6月の始め）が終わった頃。放牧した後は、仲間で「山監視（山を見回る人）」を頼んで月に何回かウシやウマを見回ってもらった。ウマも子取りをしていた。「たてる」と言って、生まれた子を売った時には「四六とか七三」と言ってお金を分配した。放牧が終わるのは10月の中頃、作物の収穫が終わってからである。収穫が終わらなくても雪が早く降り始めると下ろした。ウシやウマは農作物を育てるための肥料をとることもできた。何頭か飼っている場合は、「肥え」をとるためのウシを1頭、放牧せずに家に置いていた。「肥え」をとるために家で飼っているウシやウマには、朝昼晩草を刈って食わせる。「まや」に敷き草を敷いてやると、そこに糞をして踏みつけて歩くので、一週間に一度くらい「まや」に溜まったものを「堆肥場」に出してやる。そうしないと「まや」に水が溜まってウシやウマの体に良くない。「お盆までになんぼまやとるか」という言い方があったが、「まや」から1回出す事を「ひとまや」と言い、お盆までに「やまや（8回）」出す事を目安にした。「肥え」は「堆肥場」に積んで置き、春先に田圃に運んで肥料にした。

野場（草刈り場）

お盆はお盆休みのため、野場（草刈り場）へ草刈りに行かないので、前もってお盆用の餌となる草を刈っておいた。それを「盆草刈り」と言う。野場（草刈り場）とは村の共有地で、ウシやウマの餌になるハギやワラビのほだ、クズなどを刈る採草地であり、その場所を野焼きすることを「地焼き」と言った。草の場合は必要な人が自分で草刈りに行って、必要な分を刈り取る。野場で刈り取った草は生のまま背負って下ろしてくる。生なので大変重い。また急斜面の所では縄で束ねた草を転げ落とす事もした。乾燥させてから下ろす事もあるが、乾燥させないで生のまま下ろすのは、生のままウシやウマに食べさせるからである。冬は収穫後の稲藁を敷き藁にしたり食べさせたりするので、草を乾燥して保存しておく必要がない。

野場にはカヤも生えている。カヤは屋根を葺く材料になるが、毎年冬囲いにも必要なため、カヤを刈り取る場合には決まりがあった。ここからここまではどこそこの家の分、ここからここまではどこそこの家の分、というように「分け前（各家で刈り取ってよい場所）」が決まっている。冬囲いに使ったカヤは用が済むと梁の上に上げて貯めておき、屋根の葺き替えの足しにした。

くず屋（茅葺き屋根の家）の事

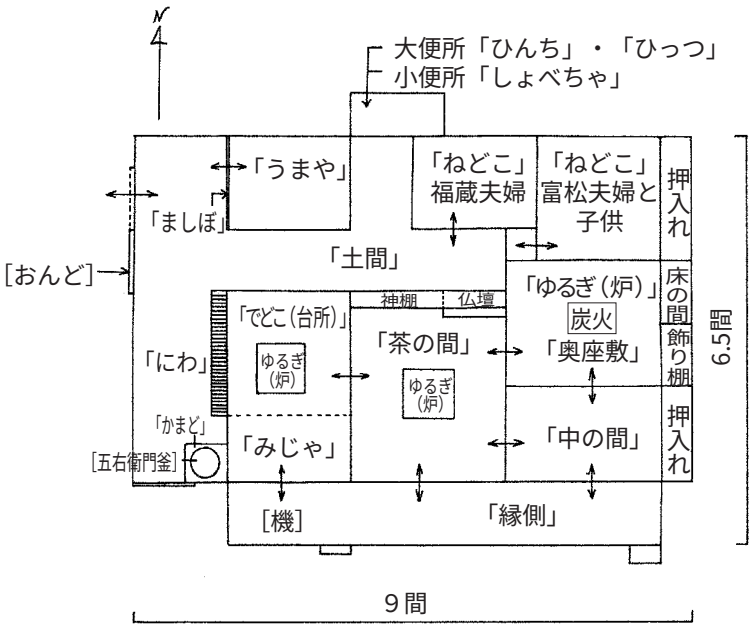
屋根の「葺き替え」は50年以上たった場合に行った。「差し茅」の場合は25年から30年で行う。カヤ刈りは自分の分け前の所で行い自分で刈って始末する。「葺き替え」の時にカヤが足りない場合は、縄で量って借りてくる。目安となる寸法の所に結び目が付いている「10尺締め」「5尺締め」の縄があり、借りる場合はその縄で縛ったものを「5尺締めなんぼ、10尺締めなんぼ借りた」と言う言い方をして借りる。また「茅むんじん（茅無尽）」というのがあり、カヤの貸し借りができた。カヤの貸し借りは帳面につけており、借りた場合は必ずカヤで返さなければならないので、カヤを貯めておく必要があった。

カヤ屋根の家は「くず屋」と言い、「すご屋」だった。根子には「曲がり屋」もあった。「でどこ（台所）」の「ゆるぎ（炉）」の上の火棚の脇に、12尺くらいの［ながら（長い木）］2本を梁から縄（藁にマダ皮を混ぜて綯ったもの）で吊り下げて［穀もの棚］を作っていた。その上にソバ、アワ、ヒエなどを［かます］に入れ、6つか7つ載せた。［かます］の中に入れる穀物は穂から外した籾の付いているもの

である。佐藤家ではしなかったが、トチやシダミをそのように保存した話は聞いた事があるそうだ。

祖母のサトさんが夜に針仕事をする時など、「ゆるぎ（炉）」の灰に、ホオの木の皮を剥いで乾燥させ、幅１、２㎝ほどに裂いたものを差し立てて火を点け、明かりにしていたのを覚えている。本数を増やして火をともすと結構明るかった。幅１、２㎝ほどに裂いたホオの木の皮はくるっとまるまって蝋燭のようだった。電気は子供の頃にはきていたが、「でどこ（台所）」と座敷とに10燭光とか５燭光の電気だった。根子にはマツが少ないので、マツの根は燃やさなかった。

間取りの図－１　かつて高台の上に建っていた佐藤家。「くず屋根」の「すご屋」。聞き取り調査による概略図。作図者　名久井芳枝



写真番号２　かつて高台の上に建っていた家の［おんど］を、現在の「小屋」の戸に再利用。

川や田圃の生き物

入梅の時期になると田植えをした。田植えが終わると「田植えじまい」といって、ご馳走を作って楽しんだものである。また田植えの後に一度だけ、川にトコロの根を潰したものを流して「網うち」をし、カジカやイワナを捕ったものだった。トコロは苦みを抜くと食用にもなるが、魚には動きを阻害する作用があるらしい。しかし新しい新鮮な水が流れてくると効力が落ち、魚も元に戻るそうである。昭和35、６年頃までは５月から６月にかけて川を遡上するマスを［やす］で捕る事もできた。また田圃ではコイも育てた。池で飼っていたコイが産卵時期になると暴れ出すので、それを目安に池にスギの葉を入れる。するとそれに産卵するので、卵のついたスギの葉を棚田になっている田の上の方に入れて置く。卵は田圃の中で孵化し、稚魚がだんだん下の田へ下がって行くようになる。秋、稲刈りが終わる頃には20㎝くらいに成長し、結構食べられる大きさになった。小さいコイはまた池に放してやり、大きくなるのを待った。大きいコイは焼いてすぐに食べる事もあったが、［べんけい］に刺して保存食にもした。コイの卵を池にそのまま置いておくと成魚が稚魚を食べてしまうので、田圃で稚魚を育てた。田圃ではドジョウやツブ（タニシ）も捕った。ツブは煮て食べた。ドジョウを捕るには［どう］の中へ「こぬか（米糠）」を練って入れ、半分ほど［どう］を田圃に埋めておいた。すると翌朝は多い時で20匹くらいのドジョウが［どう］の中に入っていた。イネが伸びている最中の頃である。ドジョウは煮て食べたが、大きいドジョウは乾燥して「ゆるぎ（炉）」の上に掛けてある［べんけい］に刺して保存した。お客さんが来た時など

のおつゆの「だし」として使った。

戦時中の事・炭坑の事

富久栄さんの家の田圃（４反７畝）には炭坑があった。昭和14、５年頃、国の政策で石炭を掘っていた。「もう一週間も経てばイネを刈るにいいから掘るのを待ってくれ」と父が頼んだ事があったが、「国のためだから待たれねぇ」と言って、実っているイネを無駄にして無理矢理斜坑を下ろして掘ったこともあった。その頃、炭坑で働く人達が食べる米は根子部落のものだけでは足りず、根子の人間が米を背負って笑内（おかしない）から山越えして運んできたものだった。笑内まで牛馬が通れる道もなかった。炭坑があった田圃の一帯は、当時は平だったが、炭坑の坑道を掘った時の「ずり（坑内の土）」で現在は高くなった場所がある。石炭運搬のため、自動車が通れるようにと炭坑の会社が林道を通したが、戦争が激しくなって油が足りなくなり木炭車になった。すると山の勾配がきついため木炭車では山を登れず、索道を架けて石炭を運んだ事もあった。「かの（やきぱた＝焼き畑）」の時には、太い木はなかなか焼けないので伐って山に置いておき、冬になると出してきて薪にしたり、炭坑に出して坑木（坑道の崩れを防ぐための支え木）にしたりした。また戦時中の食料不足の時はトチの実やシダミ（どんぐり）を拾って食べた。トチの実のあく抜きの方法は人によって違う。実を割って「水さらし」をして「あく抜き」をする人もあれば、重曹を使って「あく抜き」をする人もいた。富久栄さんもやったことがあるそうだが、なかなかうまく「あく抜き」できないものだったそうだ。そういう事は主に女の人がやった。

２　またぎ（狩猟）

父富松さんの時代は衣類に始まりマタギに関する用具が変化していく時代で、古い道具や用具と現代風のそれらと両方を経験している。富久栄さんに至るとより現代風になっていく。今回の調査対象となった「もの」は古い時代のものが多く、使用者は主に父富松さんの代までのものと言える。聞き取り調査の内容は主に祖父福蔵、父富松の代に焦点が当てられたが、60歳（昭和62年）まで「またぎ（狩猟）」をし「しかり」を務めた富久栄さんの精神や技術はそっくり先祖のものを引き継いだものである。

願掛けと「またぎ（狩猟）」の時の食糧

マタギとしての一年は旧暦の正月と小正月の間の一週間、山神様（さんじんさま）に「願掛け」のために籠もることから始まる（写真番号３・４・５・６）。「願掛け」とはマタギは山での荒仕事をするため、女の神様と言われている山の神様に山に入るための許しを乞い、新しく始まる年の安全を祈願するものである。毎年「願掛け」をした後に「初またぎ（狩猟）」に出掛ける。「願掛け」の時は［たて］の訓練や「的撃ち」の訓練、さらにマタギの世界には掟があるので、「しかり」の指導を受けたりする。「的撃ち」の訓練をするためには的があり、その方法を記した巻物もある。的を立てて実弾を撃って練習した（写真番号７）。「願掛け」には毎年仲間同士で行く。根子にはマタギの組が３、４組あり、この時期に一箇所に30人くらい集まる。一組は７～10人で構成されている。組は親戚ではないが心のあった仲間で構成した。夜通し訓練する。［布団］などは持っていかない。［火鉢］に炭を熾して暖をとる程度。山神様（さんじんさま）に願かけする時は、各自が、山神様（さんじんさま）にお供えするために「しとぎもち」二つを持っていく決まりがあった。お供えしたあとはみんなで食べた。山に籠もるため「おやき」「しとぎもち」「まめかたまり」「煮付け」などの食糧を持参した。差し入れもあった。また「しかり」の許可があれば酒を飲むことも出来た。「おやき」とは、うる米の粉をお湯でねったものにあんこを入れて焼いたもので、砂糖味も塩味もあった。「しとぎもち」とは、うる米をうるかして木の［臼］で３割粉にしたものを生のまま丸めて焼いたもの。「まめかたまり」とは、［鍋］でもち米のお粥を煮て、熱いうちにダイズの煎ったものを入れて作る。ダイズの入ったお粥をかき回し、上の方を平にしてそのまま置いて冷まし、固まったものを押すようにして５㎝四方に切ったものである。「またぎ（狩猟）」に出掛ける時の食糧も「おやき」「しとぎもち」「まめかたまり」などを持っていった。「まめかたまり」は５㎝四方に切ったものをそのまま袋の中に入れて［はらかけ］の胸のポケット辺りに入れておくと、体のぬくもりであまり固くならなかった。また［またぎ袋］に入れて

写真番号３　山神社

写真番号４　山神社

写真番号５　山神社内部　［願掛け］が行われた。

写真番号６　山神社内部　［願掛け］が行われた。

写真番号７　［的］撃ちの訓練の折、［的］が立てられた場所。写真 64-4 は的の大きさを示した巻物

背負った事もある。凍みないものだった。［またぎ袋］とは他地区で［くらげ］と呼んでいるものである。食べる頃には煎ったダイズも丁度良い柔らかさになっており、「まめかたまり」は栄養面からも優れた食品であった。また「干し餅（凍り餅）」も持って行った。これは餅を薄く切って寒中に凍らせて乾燥させたものである。「またぎ（狩猟）」に行く時は一週間くらい出掛ける事もあり［つる鍋］を持って行き米を炊いた。ちなみに粉を搗く臼を［ひら臼］と言いカシ材やナラ材で作った。［ひら臼］の粉を搗くのはイタヤ材で作った［てっきぎ（竪杵）］である。餅を搗く臼は［餅臼］と言い［きね（横杵）］で搗いた。いずれ食糧の大部分は家を守っている女性によって作られた。「またぎ（狩猟）」の時の食糧ではないが、根子では不幸があるとその晩に「じんとりもち（しとぎもち）」といって、団子を平たくつぶしたようなものを串に刺し、亡くなった仏様のいる座敷の四隅に刺し立てた。葬式の時には、その「じんとりもち」を墓の四隅に刺し立てるとの事である。

「願掛け」の話の折、富久栄さんは孫じいさんの福蔵さんが「なかうど」をした時のお嫁さんの話を可笑しそうに話してくれた。結婚して一週間目で、相手が「またぎにいかねばね（行かなくてはならない）」という事で山神様に願掛けに入った。そしたらよめっこの方が「よめになって一週間したところで、おやじが願掛けに入ってしまった。そしてまたぎ（狩猟）に行ってしまった。あれくらい辛い事はなかった」と言って、富久栄さんの所に来て、何度も何度も同じ事を繰り返し言って嘆いたそうだ。つまり「な

かうど」の所を頼りにして愚痴をこぼしにきた訳だが、お婆さんになってからも言っていたということで、富久栄さんにとっては困ったやら可笑しいやらの思い出話である。この話はなかなか女の気持ちが見えてこない男くさいマタギの世界の中で、男や女が抱いている柔らかな感情が垣間見られるものであった。

森吉山詣り

昔は旧暦６月16日に森吉山詣りをした。その折モロビ（アオモリトドマツ）の枝を切ってきてそれを山神様（さんじんさま）に供えた。森吉山のモロビは燻すと非常にいい匂いがするという事で、「またぎ（狩猟）」に出掛ける時には、そのモロビの葉を燻した煙で体を清めてから出掛けた。モロビの葉は燻すと、悪よけ、魔よけになると言われていたそうだ。現在ではモロビ（アオモリトドマツ）の枝を切る事はできない（写真番号８）。

写真番号８　モロビの枝
（マタギ資料館収蔵）

山しらべの日

旧暦の12月12日は、山がどれくらい荒れているかを山の神様が調べる日、つまり「山しらべの日」と言われており、この日はマタギに限らず山師、炭焼き、営林署の職員に至るまで山仕事に関わっている人は全て、山に入って仕事をしてはいけない日である。やむを得ず山に入らなければならない時は、午後からなら良いとされた。この頃は雪が降り始めており、富久栄さんが子供の頃は吹雪で山が荒れる事が多かったそうだ。この日マタギ達は山神様（さんじんさま）に野宿（一泊）して「願掛け」をし、翌朝に［的撃ち］や［たて］の練習をした。「願掛け」の時のように２、30人集まった。「山しらべ」の日は「願掛け」の時と同様に、「しとぎ餅」を二つ重ねたものをお供えする。この日あげたお供え物はすべて若い女の人（子供を産まなければならないような人）は食べてはいけないとされていた。これは旧暦８月15日の十五夜のお供え物にも言われている。年をとった女の人の場合は両日共に食べる事ができたそうである。

またぎ（狩猟）のための身支度

身支度にかかわる「もの」は時代によって材質や形態が変化しているが、総じて変化しない点は薄着だという事である。衣類は袷仕立てではあるが薄く軽く仕上がっている。重ね着の枚数も２枚から３枚程度で、真冬の雪の中では私達一般人であれば凍えてしまいそうな薄着である。しかし山野を経巡り歩くマタギにとって、厚着で汗をかくような服装は、体力の消耗を招くと共に、濡れた衣類が体温を奪う結果となり、風邪を引きかねないと言うことである。

写真番号９　昔の「またぎ（狩猟）」の身支度。富久栄（47～48歳頃）さんにより再現。富久栄さんが前に住んでいた高台の家の脇で撮影された。身につけている物は［あまぶた］［さんかく］［皮けら（かわ）］［背負い網（獲物袋）］［てっきぇぁす］［はらかけ］［やまいしょ（山衣装）］［シャツ］［もんぺ］［はばき］［地下足袋］［ばんど（弾帯）］［元折れ銃（16番）］「［こなぎゃぇ（またぎべら）］［たて］。

写真番号 10　山神社前の集団写真。父の富松さんがクマを撃ち捕った時に撮影したもの。ある開拓地でマメ、アズキを作っていたが、このクマが来ていたずらをしたため、被害を受けた。クマの両側の銃が［元折れ銃］その他が［村田銃］である。昭和31、2年あたりのことで、［皮けら（かわ）］と［やまいしょ（山衣装）］を着た富松さんの他に、［乗馬ズボン］［脚絆］［戦闘帽］、また現代着ているものと同類の［上着］や［シャツ］など、様々ないでたちの人が写っており、「またぎ（狩猟）」の時に着る衣装が、変化していく過渡期を伺わせる興味深い写真である。なお最後列の左から二人目が富久栄さんである。

さて父の富松さんが「またぎ（狩猟）」に出掛けるとなれば「でどこ（台所）」で身支度をしていた。［ながもち］に入れてあった衣類を取り出し、先ず［三尺ふんどし］や［六尺ふんどし］をし、丸襟の木綿のシャツを着てから、［もんぺ（尻の割れている形態）］を穿き、その上に［はかま］を重ねて穿いた。次に［やまいしょ（山衣装）］を着て紐で縛った。その上に［はらかけ］を着ける。雪が多い時は、［麻ばかま］を重ねて穿く。雪が深い所を漕いで歩く様な場合は、木綿製の衣類では凍り付いて硬くなるが、この［麻ばかま］は雪が付きにくく凍らないので、父富松は必ず穿いた。膝の下あたりまでくる裾を紐で絞る。紐は結んでしまうと雪が凍り付いてほどけなくなるので、とめ方を工夫した。紐は片方ずつ２、３回脛にまわしてから一緒にして２、３回捻り、先に２、３回脛にまわした部分の紐に上から下に差し込んでとめる。解く時には上にある先端部の紐を引っ張れば簡単にほどく事ができる。この先端部の紐は長いと凍り付くので、あまり長くしなかった。次に［てうえ］を着ける。［鉄砲］を撃つ時は［てっきゃぁす（手袋）］を外すが、［てうえ］は指先が自由に動きなおかつ多少暖かい。また「そらで」の予防にもなった。「そらで」とは重いものを持ったり力仕事をしたり田植えをした時などに関節が腫れる症状のことであるが、そうした症状を予防する役割もある。「そらで」の予防には［てうえ］をつけなくても、手首に紐を巻くことでも予防になると言われている。つぎに履き物を履く前に布製の［はばき］を脛に穿く。その［はばき］の裾をめくるようにして［こはんばき］を「あくど（踵）」から足首に掛けて巻くように着けてから［毛たび］や［つまご］や［生ぼっこ］を履く。そしてめくってあった［はばき］の裾を［毛たび］や［つまご］や［生ぼっこ］の上に下ろして紐でとめる。そのとめ方は［麻ばかま］の裾紐と同じである。次に［さんかく］で頭を覆う。ほぼ正方形の風呂敷状の布を三角になるよう半分に折り、耳が隠れるように後頭部を覆い、布の両端を顎の下で交叉させて後ろで結ぶ。その上に［あまぶた］を被る。［さんかく］は耳をふさいで顔だけを出すように被るが、［あまぶた］と共に「またぎ（狩猟）」に出掛ける時は必ず被った。根子地区の［あまぶた］は他地区の山笠型の［あまぶた］と形が違う。根子の［あまぶた］は携帯に便利であると共に、被っていても邪魔にならない形である。こうして直接肌身に着ける身支度が整った上でアオシシ（カモシカ）製の［皮けら］を着ける。「またぎ（狩猟）」の時は必ず着用したもので、［やまいしょ（山衣装）］の上に毛のある方を外にして着用する。アオシシ（カモシカ）の皮は他の皮より雨や寒さを通さないので、山仕事をする人達に愛用された。敷き皮にして大地にべたっと腰を下ろしても、絶対寒さが通ってこない貴重な毛皮であった。敷き皮として使用する時は毛のある方を上にした。内皮の側が雪に接するが、皮は硬くならなかった。［はらかけ］の上に［ばんど（弾帯）］を締める。［皮けら］の上から弁当や獲物を入れる［背負い網（獲物袋）］を背負い、［村田銃］や［元折れ銃］を担ぐ。［てっきゃぁす（手袋）］を腰に付けるか手にはめて［またぎべら］を持つ。［またぎべら］とは［おおなぎぇ］［こなぎぇ］の総称である。そして［たて］を持つと全ての身支度が完了する。その他に［はらかけ］に付いている大小様々のポケットの中には、銃に必要な小物類が整然と仕分けされて納まっている。また袋物の中には［ながさ］や［まきり］といった刃物も納まっている。

またぎ（狩猟）に出掛ける前に

「またぎ（狩猟）」に出る時は、生のオコゼを魚屋に取り寄せてもらって用意する。これは「しかり」が用意するもので、山神様（さんじんさま）に一尾供える。儀式が終わったら「しかり」の家に持ち帰り、煙で燻して薫製の形にして家の神棚や床の間に置く。オコゼは女の神様である山の神様が好んでいたという事で供えられた。生のオコゼが手に入らない場合は、薫製にして虫が付かないように処理した［おこぜ］を供えた。家にも山神様（さんじんさま）が祀ってあり、そこには6月16日に森吉山詣りをした時に切り取ったモロビ（アオモリトドマツ）の枝を供えていた。「またぎ（狩猟）」に出る時はモロビの葉を燻して体を清めてから出掛けた。

動物によって異なる「またぎ（狩猟）」の時期

かつて「またぎ（狩猟）」の対象となつた動物は、大型獣のクマやアオシシ（カモシカ）、小動物ではマミ（アナグマ）、ムジナ（タヌキ）、ヤエン（サル）、バンドリ（ムササビ）、キツネ、ウサギ、テン、イタチ、ヤマドリ等である。クマの場合、真冬はクマが冬眠しているためなかなかみつけにくいため穴から出てくるのを待った。「春またぎ」というのは、そういう時期の狩猟の事である。彼岸になるとクマが穴から出てくる。彼岸というのは目安であってその時の気候によって多少変わる。山菜などが出るようになるとクマも出てくる。アオシシ（カモシカ）を捕る事ができた時代はアオシシ（カモシカ）も「春またぎ」で捕った。アオシシ（カモシカ）は人に追われるとあちらこちら走り回るため、やがて疲れてしまう。雪山でも疲れると角を山に刺して「はぁはぁ」していて隠れた積もりになっているものだ。そのため簡単に堅木のナラの枝などで殴ると捕まえる事が出来た。傍まで行っても疲れているため、なかなか逃げないものだった。アオシシ（カモシカ）は時期や天気を選ばない動物でいつでも出歩いているが、冬の方が毛皮の質が良い。アオシシ（カモシカ）以外は村田銃で撃ち捕る。小動物は雪が降る前の10月末～12月頃が猟期である。バンドリの場合は夜行性で10月末から11月の頃、月夜の晩に木の実を取っているので、その場所へイヌを連れて行く。イヌが鳴くとバンドリが丸くなるのでそこをねらって［村田銃］で撃つ。マミ（アナグマ）は冬眠するのでその前に捕る。他のものは冬眠しない。昔の話だが、サルは12月の頃、雪が降ってからも捕ったようだ。バンドリ以外は昼の猟である。ウサギは［ふくぐし（針金の罠）］を使って捕る事が多く、［なげわ］はあまり使わなかった。［ふくぐし（針金の罠）］は2個掛ける。主にウサギ、ヤマドリ、キツネ、タヌキ、テンなんかも捕った。「イタチのいない山はテンの楽」という言い方があった。イタチの方がテンより意地が強い。イタチはニワトリの血を吸うために現れるのでニワトリ小屋にも［竹筒］を仕掛けた。テンは［がばさみ］で捕った。

秋、山を歩いていると「クマ棚」をみつける事がある。「クマ棚」とはクマが実を取って食べた痕である。クマが木に登って木の実を食べる場合、枝を捻って折る。すると枝がポキッと折れる訳ではないので、木の枝が棚のようになる。枝を引っ張ってきて木の実を食べ、また別の枝を捻って折って、引っ張ってきて木の実を食べる。するとその場所が棚のようになるのである。

野宿の事

昔は「またぎ（狩猟）」に行く時は一週間くらいかけて出掛けた。クマの様子を見に行く場合はひとりで行く事もあったが、「またぎ（狩猟）」はひとりで行かない。最小で6人から13人くらいが一単位の集団である。全体の統率者は「しかり」である。「たちめぇ（たちまえ）」が3、4人、「勢子頭」が1人「勢子」が7、8人～10人、そして猟犬が加わりひとつの集団ができる。クマを捕ると決めた場合は、山に入ったら他の獣を捕る事はしない。それは他の獣をとるために鉄砲を撃つと、クマがいても逃げてしまうからである。

「くらめぇ（くらまえ）」はクマの住みか（隠れ場所）の事であるが、人が簡単に近寄れない場所である。マタギはそこを目指す。ねぐらであり、穴を作っている場合もある。目指した「くらめぇ」でクマを取り逃がした時に、クマの足跡の様子を見て、クマが向かった次の「くらめぇ」の見当をつける。早く歩いた足跡は遠くまで行っている可能性があるし、ゆっくり歩いている足跡は近くにいる可能性がある。歩幅も違う。また下りに向かう時は尻をついてざぁっと滑り下りた痕が付いている。この「くらめぇ」

から次の「くらめぇ」に行ったという推測ができれば、すぐには追い掛けずに近道を探る。その事によってクマもすぐ後を追われる訳ではないので、ある程度ストレスを解消して気持ちにゆとりを作ることになる。そういう所へマタギが向かう。そんな場合は時間が必要だし、遠くに「くらめぇ」がある場合もあるので野宿をする事がある。食糧は［またぎ袋］に入れて背負って行った。また［つる鍋］を持って行って米も炊いた。［つる鍋］は普段家で使っているようなもので小型である。飲料水は家からは持っていかない。野宿をするような時も沢水のある所を選び、［おなぎぇ］で掘って水を確保した。持つ物の分担があり、［鍋］は勢子の中の若い者が運んだ。野宿の時は雪穴を掘る。うんと寒くなる時は頭が出ない位に深く掘る。そして暖をとらなければいけないので、穴を掘った底を踏み固めて、普段は枝打ち用として使っている［手のこ］で、１m位の長さに切った直径15㎝位の太い生木（できればイタヤやナラの木であれば、油もあって火がつけば燃えやすい）を雪の上に敷き並べてその上で火を焚いた。燻るけれど敷いた木は生木なので長持ちした。その木の上に座って一晩を過ごした。寝る訳ではない。生木にも火がつくので足が火照るし体も火照って暖かかった。穴は掘るが屋根がある訳ではなく、屋外で焚き火を囲んで座っているという形である。焚き火をする時は枯れ枝をみつけてそれに火をつける。枯れ枝に火がつけば、生木でも燃える。イタヤの枝や「がんび（シラカバの皮）」を燃やす。「がんび（シラカバの皮）」は火が点きやすい。その焚き火に［つる鍋］を掛ける時は、「まっか（枝別れしている木）」２本を両側に立てて［つる鍋］を通した棒を掛けた。道路があり途中まで車で行けるようになってからは、野宿をしなくなった。

まきがり

「まきがり」と言うのはクマなどの大型獣を大人数で狩りをする場合に言う。小動物の場合に４、５人で行う狩りには言わない。クマがいたという事になると、全体の統率者である「しかり」はクマを撃ち捕る役目の「たちめぇ（たちまえ）」３、４人の指揮をとり、クマが追われてくる方向へ先回りして待ち伏せる。クマの背後から「勢子頭」の指示に従って７、８人～10人の「勢子」がクマを追い立てる。勢子に追われたクマの方が、待ち伏せしている「たちめぇ（たちまえ）」がいるなと気が付くと、先に立ち上がる。そういう時［たて］を使ってしとめる場合は、クマが立ち上がった時に［たて］で突く。その時クマは必ずその［たて］の柄を掴んで自分の方に引っ張る癖があるため、その力を利用してクマを押し倒す。［たて］が突き刺さっているのでクマはだんだんに弱っていく。それを待つ。［たて］は［火縄銃］以前から使われていたと思われるが［村田銃］になってからも使った。銃の性能が良くなるにつれて銃だけで撃ち捕るようになっていった。猟犬を連れて行くのはクマの足跡を探させるためである。「またぎ（狩猟）」に行く時は、現場まで喜んで後をついてくるので、猟犬を縛り付けておくことはない。猟犬はクマを追い立てる役目の勢子の所にいるので、「このくらめぇさはクマがいるな」という事になると、猟犬を放さないで［鎖］で縛り付けておく。クマが出てきそうな気配になると、猟犬も足が早くなって興奮するからである。その後は勢子だけがクマを追い立てる。猟犬がいると雪崩が起きるような所は入りたがらないので危険防止になった。

猟犬の事

猟犬はマタギ自身が訓練する。山で獣の臭いをかがせて食いつくように教える。父の富松さんは気が長くて懇ろにイヌに対処して指導するため、イヌも最後には良く覚えた。佐藤家の猟犬は秋田犬と柴犬を掛け合わせたものだが、「またぎ犬」としては名犬だった。猟犬には雌がいい。猟犬が死んだ場合は、家族のようなものなので山に２、３尺の穴を掘って埋葬し、角材の木で標を立てた。秋田犬と柴犬を掛け合わせたイヌは山にも丈夫で馴らしやすい。貰う事もあったり飼う事もあった。昭和12、３年頃の事、富松さんが出先で個人からイヌを買い、箱に入れて鉄道のチッキで送ってきたことがあった。当時鉄道は阿仁合までしか来ておらず、駅の人から電話を持っていた炭坑の方に連絡が入り、引き取りに行った。一週間くらい駅の人が預かってくれたが、その間にイヌがその家になついてしまい、富久栄さんが迎えにいっても、イヌの方はなかなか富久栄さんについて来る気にならなかった。その後富松さんが帰って

きてからは慣れたが、離すとまたその家まで行ってしまった。このイヌは馴らしも良かったのかもしれないが、とても「またぎ（狩猟）」が上手な猟犬で、ウサギやムジナをびちびちと追いつめた。そのイヌの名は「ちん」と言って14、５歳頃まで生きていた。死ぬ時は寒がって他の家のウシの寝ている傍にうずくまっていたが、ウシが「とこがえり」した時にその下になって死んだ。当時サトばあさんが探したがみつからなかった。ウシを飼っている家で堆肥を出す時になって、そうして死んだ事が分かった。富久栄さんが25歳の頃だった。その「ちん」の子供をあちこちに分けていたが、その子達もなかなか良い猟犬に育った。

クマの解体と毛皮のなめし方

クマの場合は撃ち取った人がクマの頭をもらえる。クマの胆と毛皮は売る。そして得たお金をみんなで分配する。肉やその他は各自に分配する。脚その他を普通の人が細工ものにする場合があるので、そういう時は売る。クマは腹から裂いていく。皮を剥ぎ取ったあとは［木枠］があればそれに張って半月ほど乾かす。その後、［木枠］からはずして［脂とり包丁］で脂を取り除く。次に「こぬか（米ぬか）」を撒いて、［藁たわし（砂ごいた藁を束ねたもの）］や［縄たわし（藁縄を折り曲げたもの）］でこすり取ってきれいにする。富久栄さんの時代には、その後この上にミョウバンをかけた。ミョウバンをかけると脂がすっかりとれる。それから乾燥させる。その場合は［木枠］には張りつけずに、そのまま風通しの良い日陰に掛けて乾燥させる。昭和30年頃になってからは、弘前の「塩屋」にクマを塩浸けにして持って行ったり、［かます］に入れてチッキで送ったりした。塩浸けにするのは腐らないようにするためで、１頭につき40㎏くらいの塩を内側に使った。そうしないと「脂やけ」するからである。毛皮の方には塩がつかないようにした。40㎏くらいの塩に浸けると３箇月くらいもった。自分の家でなめさないで商売にしている人にやってもらうと防虫加工もしてくれた。１頭ずつ送る場合もあるが、近日中に何頭か捕れた様な場合には、送るまでは塩漬けにして置いた。クマの皮の内側を広げて塩をかけて置くと、そのうちに塩が溶けてくるので、こぼさないように皮を折り畳むようにして、風呂場などに置いた。獲物の解体は父富松さんの代までは殆ど山で行った。現在は林道が通っていて運びやすいため、富久栄さんの代になると家に持ってきて解体した。

アオシシ（カモシカ）の毛皮

アオシシ（カモシカ）は昭和９年に天然記念物となり規制されたが、アオシシ（カモシカ）を捕る事ができた時代は、他の皮より雨や寒さを通さないため、マタギはもとより山仕事をする人達にも愛用された。敷き皮にして大地にべたっと腰を下ろしても、寒さが通ってこない貴重な毛皮であった。敷き皮として使用する時は毛のある方を上にした。内皮の側が雪に接するが、すっかり脂をとってなめされているので硬くならなかった。なめし方はクマの場合とほぼ同様である。剥ぎ取った毛皮は生の状態の時は［木枠］があればそれに張りつけて乾かす。ある程度乾いたら木枠からはずす。［脂とり包丁］で脂を大体とり除く。次に「こぬか（米ぬか）」を撒いて、［藁たわし（砂ごいた藁を束ねたもの）］や［縄たわし（藁縄を折り曲げたもの）］でこすり取ってきれいにする。その後乾燥させる。その場合は木枠に張りつけずにそのまま物干し竿のようなものに掛けて乾燥させる。アオシシ（カモシカ）の毛皮は形が小さい事と自分たちが使うものなので、家でなめした。［皮けら］とは逆に［てっきぇぁす］や［毛たび］を作る場合は、脂を完全に取り除く事はしなかった。皮を剥いで適当な大きさに切り取った皮は、沢山脂が付いている所は［脂包丁］でそぎ落としたが、多少脂が付いていた方が、その脂で手足の指がしもやけにならなかった。しかしなめすと皮は軟らかくなるが、なめしていないので古くなると硬くなる。硬くなった［毛たび］は、ぬるま湯につけると元に戻って軟らかくなると共に、雪の中を歩いていると、その湿り気と体温で次第に軟らかくなり、履き心地が良い物だった。［皮けら］や［てっきぇぁす］及び［毛たび］を作る場合、根子地区と比立内地区では使用する毛皮の部位に相違がある。用具の項で触れる。

製薬の事

一般的に昔は捕った獲物は毛皮や肉ばかりなく、クマでは胆、舌、骨、掌、血、脂身、子宮、雄クマ

の性器などが、他の動物では産子（クマやヤエンの胎児）やヤエンの頭骨などが薬として活用された。

佐藤家では昭和23年に製薬並びに営業の許可証をとり、商標「弘生堂」として正式に配置売薬（置き薬）の仕事を始めている。現在でも「秋田製薬会社」と関係があるそうだ。許可をとって販売した薬は「大正散（胃腸薬）」「牛馬薬」「霊将湯（婦人薬）」の３点である。「大正散（胃腸薬）」にはクマの胆が含まれている。「牛馬薬」には八年袋と言われるクマの腸が含まれている。その２点は「散薬」である。「霊将湯（婦人薬）」は乾燥させたクマの子宮を薄く切ったものが含まれており、［ふりだし］または［寒冷紗袋］という、目の粗い極めて薄い綿布の袋に入れて煎じて飲む薬である。

昭和23年といえば富久栄さんが21歳という働き盛りの年だが、父の富松さんと始めた配置売薬の仕事に、その後40年間携わる事になった。営業許可をとっている場合は売り子さんを雇えるので、その売り子さん達は主に秋田、岩手、宮城、福島の４県へと散らばっていった。お得意さんは４県で１万軒くらいあったとの事である。戦後根子にはそういう仕事に携わっていた家が80軒くらいあったそうだ。

配置売薬を始めるようになってからの一年のサイクルは、12月から３月にかけて「またぎ（狩猟）」を行い、それで得た獲物を処理して乾燥しておき、11月中に人を頼んで製薬する。富久栄さんが配置売薬の仕事に出掛ける場合は、12月から農作業が始まる４月頃までであったが、父の富松さんは５月頃まで仕事を続けた事もあったそうだ。いずれ昭和23年以降の佐藤家では「またぎ（狩猟）」と配置売薬の仕事が時期的に重なっているため、スケージュールをやりくりしながら、売り子さん達と共に忙しい日々を過ごしたに違いない。しかし春から秋にかけては根子に戻って農作業に従事しており、生活の基盤に変化はない。

岩手県の北上高地で狩猟関係の聞き取り調査をした折、「秋田のマタギが師匠だった」という言い方を何人かの方から聞いた。その時の様子は概して好意的だったが、富久栄さんによると師匠と言う事はないが、売り子は「またぎ（狩猟）」の経験者も多く、狩りの技術や罠などの情報を教える事があったかもしれないという事であった。また北上高地の奥地で配置売薬の残骸のようなものを見た事があり、それらが何処から来たものなのか確かめようがなかったが、今回そのルーツに辿り着いたような気がした。

旅またぎ（狩猟）

昔は日光までも「またぎ（狩猟）」をしながら歩いて行ったそうだ。遠い所へ「またぎ（狩猟）」に出掛けた時は、獲物があればそれをお金に換えたり物々交換したりして「またぎ（狩猟）」を続けたそうである。先々の地元の人達に礼儀を尽くして接する事がとても大事だったようだ。心の通いあう交流を深めておかないと、なかなか大変だったらしい。かなり昔の話だが、会津に入ったマタギ達が雪崩に巻き込まれて死んだという知らせが入った。しかしその死因については疑問視する話も伝わっているそうだ。

3　またぎ（狩猟）用具

衣類

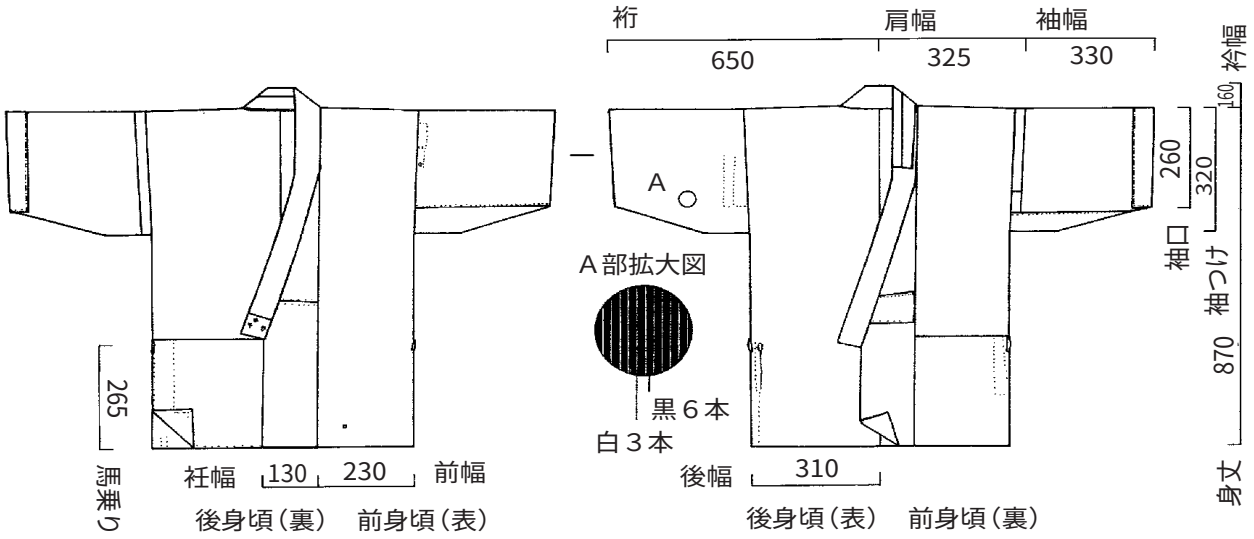
写真番号11　［皮そぎ］と［台］（佐藤富久栄氏所蔵）

現在残っている衣類の素材は綿布が多い。綿布は生地を購入したと思われる。富久栄さんは綿布を［機］で織っているのを見たことがないが、糸を買っていた時代もあるので、木綿も織っていたことがあると思うとの事である。アサについては母カメヨさんの代には禁止になって作らなかったが、祖母サトさんの代までは、家に２坪程度のアサ畑があった。アサは５、６月頃に種を蒔き、途中草取りをする。お盆を過ぎてからアサを刈り取ると、生のうちに皮を剥く。［皮そぎ］と［台］（写真番号11）で表の皮をそいで繊維を取り出す。サトばあさんはその晩のうちに皮をそいでいた。そいだ外側の皮は「うまや」の堆肥に捨てた。アサが乾き過ぎているような場合は、流れ水に２、３日浸けていたように記憶している。蒸かしたりすることはなかった。取り出した繊維は２束を結んで、それを分けるようにして棒にかけて乾燥させた。アサからとった繊維では［麻ばかま］や［蚊帳］を作った。麻布は自宅の［機］で織ったのを覚えている。繊維は藍で染めた。富久栄さんはサトばあさんが「にわ（家の中の作業場である土間）」で染めているのを一度見たことがある。「にわ」には［かまど］があり、［五右衛門釜］がはまっていた。藍染めはその［五右衛門釜］で染めた。アサが作られなくなってからはカラムシを山で採ってきて繊維を採った。母カメヨさんの代はカラムシで衣類や蚊帳を作った。「またぎ（狩猟）」用の衣類は、カメヨさん達が台所で作っていたのを見たことがある。古い衣類では［はらかけ］の紐をカメヨさんが補修していたのを覚えている。「またぎ（狩猟）」の時に着る衣類と普段着の種類は大体同じだが、「またぎ（狩猟）」の時に着るものはより丁寧な作りである。糸は細くて緻密な平織りの生地が使われており軽い。

女物も上衣は「やまいしょ」と言い、男物と同じ形で縞や絣模様のある生地で作った。袖の形は腕の部分が細く脇に襠がついている。岩手県では「鉄砲袖」だが、根子ではそういう呼び方はしないそうだ。

序の所で［もんぺ］の事について触れたが、尻の割れている形態は男物で、富久栄さんの妻千代さんも農作業に穿（は）く［もんぺ］は作った。女物は同様の形態で尻が割れていないものを［すねっこもっぺ］と言い、野良仕事にも普段にも穿いた。見せて頂いたものは、岩手県で［ももひき］と言われるものに似ていた。この辺の［すねっこもっぺ］は脛の部分に紐が付いており、きれいな色の縞模様や絣模様がついている。また昔は前後に腰紐がついている形態だったが、ゴム紐に変わって穿きやすくなったものである。そうした［すねっこもっぺ］も古くなれば田圃に入る時にも穿いたが、田圃に入る時は［たもっぺ］を穿いたそうだ。田に入ると汚れるので、男物（尻が割れている形態）も女物（尻が割れていない形態の［すねっこもっぺ］）も黒色で作り、［たもっぺ］と言った。富久栄さんの［たもっぺ］は田圃にも草刈りにも山仕事にも穿いた。山でアブに刺されないように袷仕立てになっている。

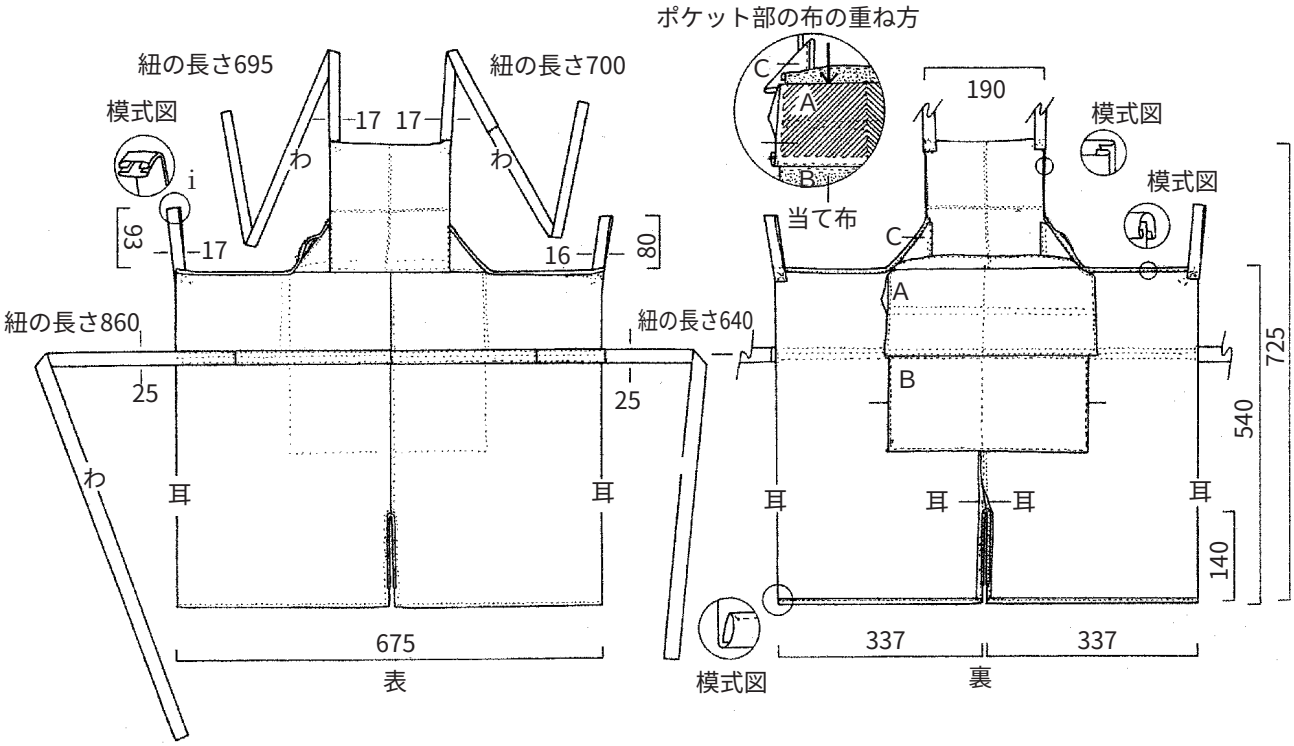
「またぎ（狩猟）」の時には［はばき］を必ず着けた。布製とアオシシ（カモシカ）製のものがある。



実測図１

写真番号 12

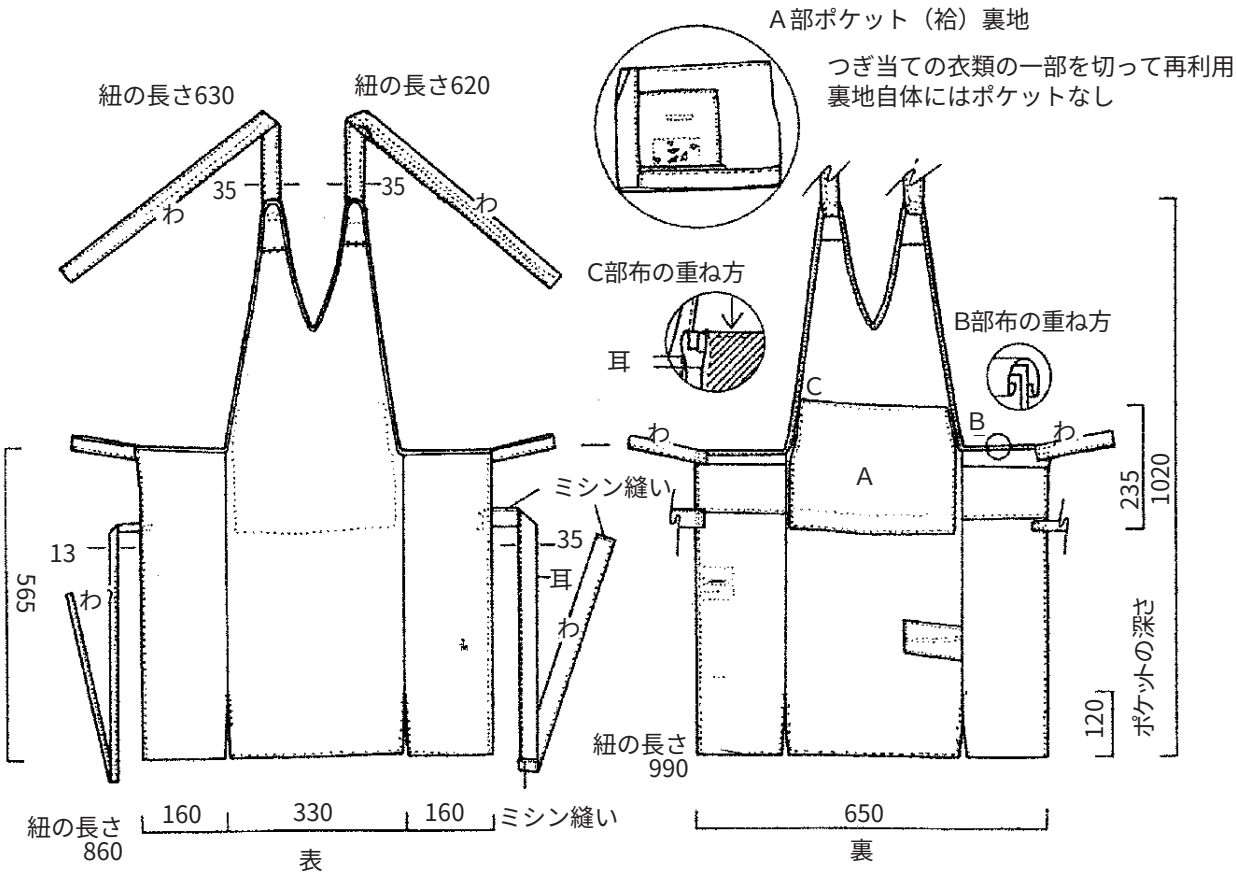
写真番号　12
実測図番号　1
分類名　上衣
資料名（地方）　やまいしょ（山衣装）
よみ　Yama-isho
重量　590 g
材料　表地・衿・裏衽下・裏袖口の生地…綿布・平織り・糸の密度（５㎜四方経糸 12 本×緯糸 10 本）・先染め・黒地に経縞。表袖下の生地…綿布・平織り・糸の度（５㎜四方経糸 15 本×緯糸 12 本）・先染め・黒地に白色の経縞。表衿先の生地…絹布？平織り・糸の密度　（５㎜四方経糸 14 本×緯糸 14 本）・先染め・黒地に茶色の格子縞。裏地…綿布・平織り・糸の密度（５㎜四方経糸７本×緯糸６本）・青色の無地・裏袖下の生地…綿布・平織り・糸の密度（５㎜四方経糸 10 本×緯糸 12 本）・紺色の無地。裏衽中の生地…平織り・糸密度（５㎜四方経糸　15 本×緯糸 15 本）紫色の無地。馬乗り部上…綾織り・糸の密度（５㎜四方経糸 15 本×緯糸 15 本）。縫い糸…黒色の綿糸・白色の絹糸。
材料入手方法　綿布は生地を購入した。綿布を［機］で織っているのは見たことがないが、糸を買っていた時代もあるので、木綿も織っていたことがあると思う。
用途　「またぎ（狩猟）」に行く時に着用する
使用者　祖父福蔵　父富松まで。富久栄は着た事がない。
使用方法　丸襟の木綿のシャツの上に着用して紐で縛る。
収納場所　［ながもち］の中
製作（入手）者　祖母サトと思われる
製作（入手）方法　手縫い　袷仕立て
備考　母カメヨたちが秋頃、台所で作っていたのを見たことがある。
収蔵施設　根子児童館
作図者名　角舘さえ



実測図２

写真番号 13

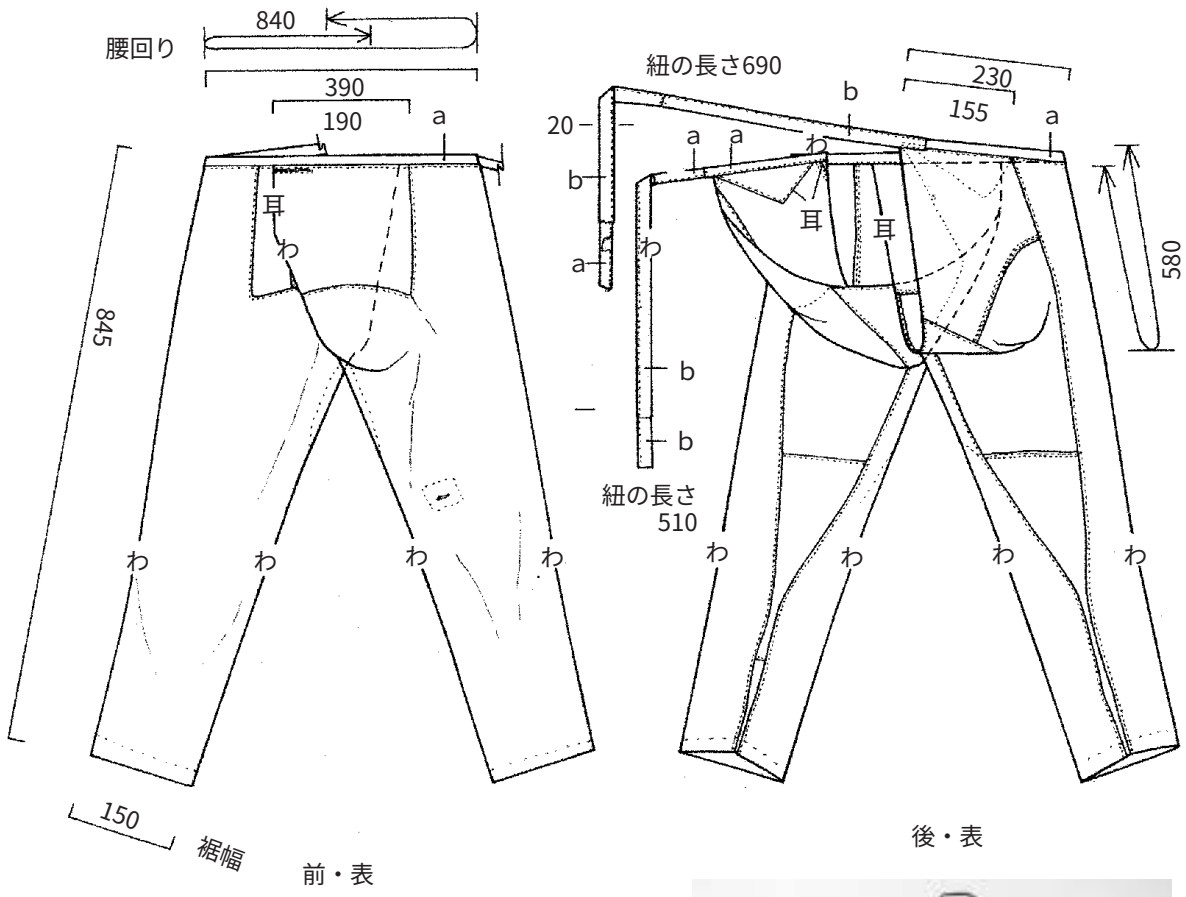
写真番号　13
実測図番号　2
分類名　上衣
資料名（地方）　はらかけ
よみ　Hara-kake
重量　160 g
材料　表地・紐・ポケットＡ・布Ｃ…綿布・平織り･糸の密度（５㎜四方経糸 10 本×緯糸９本）・紺色の無地・後染め。胸部裏地…綿布・平織り･糸の密度（５㎜四方経糸８本×緯糸 10 本）・水色の無地・後染め。当て布…綿布・平織り･糸の密度（５㎜四方経糸 12 本×緯糸 12 本）・薄い紺色の無地・後染め。
材料入手方法　実測図１に同じ
用途　ポケットが沢山ついており、「またぎ（狩猟）」の時に使う小物入れの役目がある。食べ物も入れた。
使用者　父富松の代まで。主に「火縄銃］や［村田銃］を使用した時代に着用した。富久栄は着用した事がない。
使用方法　［やまいしょ（山衣装）」を着た上に着用する。
収納場所　［ながもち］の中
製作（入手）者　祖母サト以前
製作(入手)方法　手縫い
備考　［はらかけ］の紐を母カメヨが補修していたのを見たことがある。「またぎ（狩猟）」に行く時の身支度は、自宅の台所で行っていた。
収蔵施設　根子児童館
作図者名　角舘さえ



実測図３

写真番号 14

写真番号　14
実測図番号　3
分類名　上衣
資料名（地方）　はらかけ
よみ　Hara-kake
重量　245 g
材料　表地…綿布・平織り･糸の密度（５㎜四方経糸14本×緯糸14本）・紺色の無地。裏地…綿布・平織り･糸の密度（５㎜四方経糸10本×緯糸９本）・紺色の無地。ポケット…麻？・平織り･糸の密度（５㎜四方経糸10本×緯糸９本）・紺色の無地。裏脇当て布…綿布・平織り･糸の密度（５㎜四方経糸16本×緯糸17本）・茶色の無地。裏裾当て布…平織り･糸の密度（５㎜四方経糸17本×緯糸14本）・紺地に黄色の経縞（紺は麻糸、黄色は絹糸）。肩紐…平織り･糸の密度（５㎜四方経糸13本×緯糸11本）・紺地に白色の絣。腰紐（右）…平織り･糸の密度（５㎜四方経糸14本×緯糸８本）・紺地に青色、桃色、緑色、青色の経縞。腰紐（左）…ネル・平織り･糸の密度（５㎜四方経糸10本×緯糸８本）・白地に茶灰色の格子柄。縫い糸…黒色、白色の綿糸・黒色の麻糸。
材料入手方法　実測図１に同じ
用途　ポケットが沢山ついており、「またぎ（狩猟）」の時に使う小物入れの役目がある。食べ物も入れた。
使用者　父富松　富久栄
使用方法　［やまいしょ（山衣装）］を着た上に着用する
収納場所　［ながもち］の中
製作（入手）者　祖母サト
製作(入手)年代　手縫い
製作(入手)方法　手縫い　袷仕立て　腰（左）の一部ミシン縫い
備考　［はらかけ］の紐を母カメヨが補修していたのを見たことがある。「またぎ（狩猟）」に行く時の身支度は、自宅の台所で行っていた。
収蔵施設　根子児童館
作図者名　角舘さえ

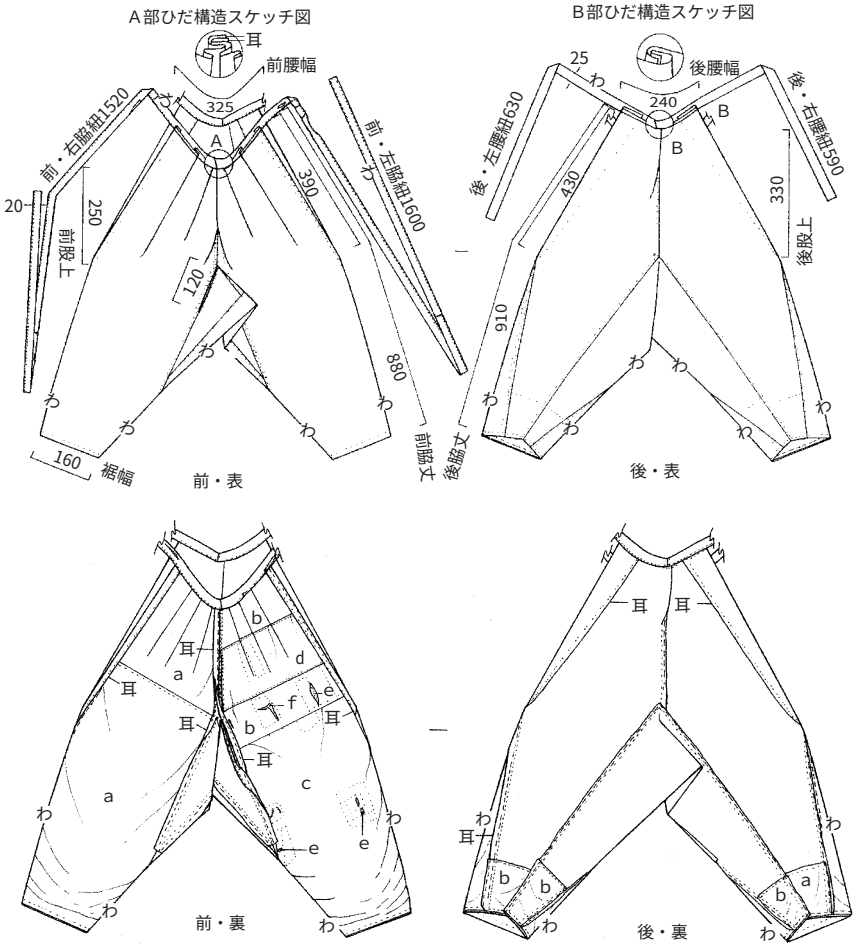


実測図４

写真番号 15

写真番号　15
実測図番号　４
分類名　下衣
資料名（地方）　もんぺ（尻の割れている形態）
よみ　Monpe
重量　180 g
材料　生地…綿布・平織り・糸の密度（５㎜四方経糸10本×緯糸８本）・紺色の無地。紐ａ…麻布・平織り・糸の密度（５㎜四方経糸７本×緯糸９本）・青色の無地。紐ｂ…木綿・平織り・糸の密度（５㎜四方経糸13本×緯糸12本）・紫色の無地。縫い糸…黒色の綿糸。
材料入手方法　実測図１に同じ
用途　「またぎ（狩猟）」の時に着る衣類。
使用者　祖父福蔵　父富松
使用年代　昭和40年頃まで
使用方法　［三尺ふんどし］や［六尺ふんどし］をしてから、［もんぺ（尻の割れている形態）］を穿き、その上に［はかま］を重ねて穿く。
収納場所　［ながもち］の中
製作（入手）者　祖母サト　母カメヨ
製作(入手)方法　手縫い　単衣
収蔵施設　根子児童館
作図者名　角舘さえ

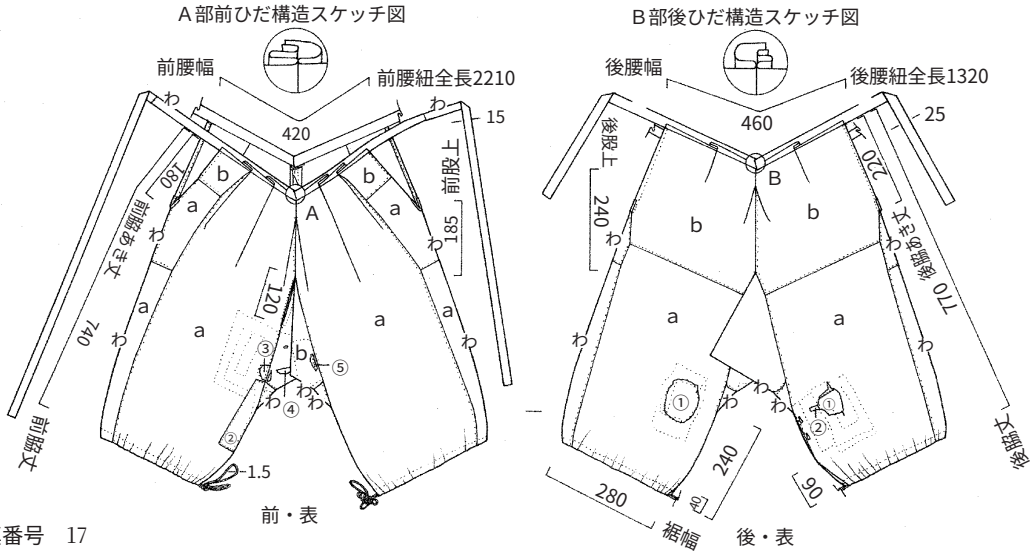
実測図５



写真番号 16

写真番号　16
実測図番号　５
分類名　下衣
資料名（地方）　もんぺ
よみ　Monpe
重量　384 g
材料　生地…綿布・平織り・糸の密度（５㎜四方経糸14本×緯糸12本）・紺色の無地。裏地ａ…綿布・平織り・糸の密度（５㎜四方経糸９本×緯糸９本）・紫色の無地。裏地ｂ…綿布・平織り・糸の密度（５㎜四方経糸11本×緯糸９本）・紺青色の無地。裏地ｃ…綿布・平織り・糸の密度（５㎜四方経糸12本×緯糸11本）・薄紫色の無地。裏地ｄ…絹布・平織り・糸の密度（５㎜四方経糸17本×緯糸14本）・深縹色の無地。裏地ｅ…綿布・平織り・糸の密度（５㎜四方経糸8本×緯糸7本）・青色の無地。裏地ｆ…絹布・綾織り・糸の密度（５㎜四方経糸14本×緯糸13本）・紫色の無地。腰紐…綿布・平織り・糸の密度（５㎜四方経糸９本×緯糸11本）・紺色の無地。糸…黒色の綿糸、一部白色の綿糸。
材料入手法　実測図１に同じ
用途　「またぎ（狩猟）」の時に穿く衣類。
使用者　福蔵
使用年代　昭和40年頃まで
使用方法　雪の少ない時は［三尺ふんどし］や［六尺ふんどし］をしてから、［もんぺ］を穿き、 その上に［はかま］を重ねて穿く。
収納場所　［ながもち］の中
製作（入手）者　祖母サト　母カメヨ
製作(入手)方法　手縫い。前、裾部分のみ裏あり。襠は３枚（同じ布）にて構成し、裏布なし。
収蔵施設　根子児童館
作図者名　角舘さえ

実測図６

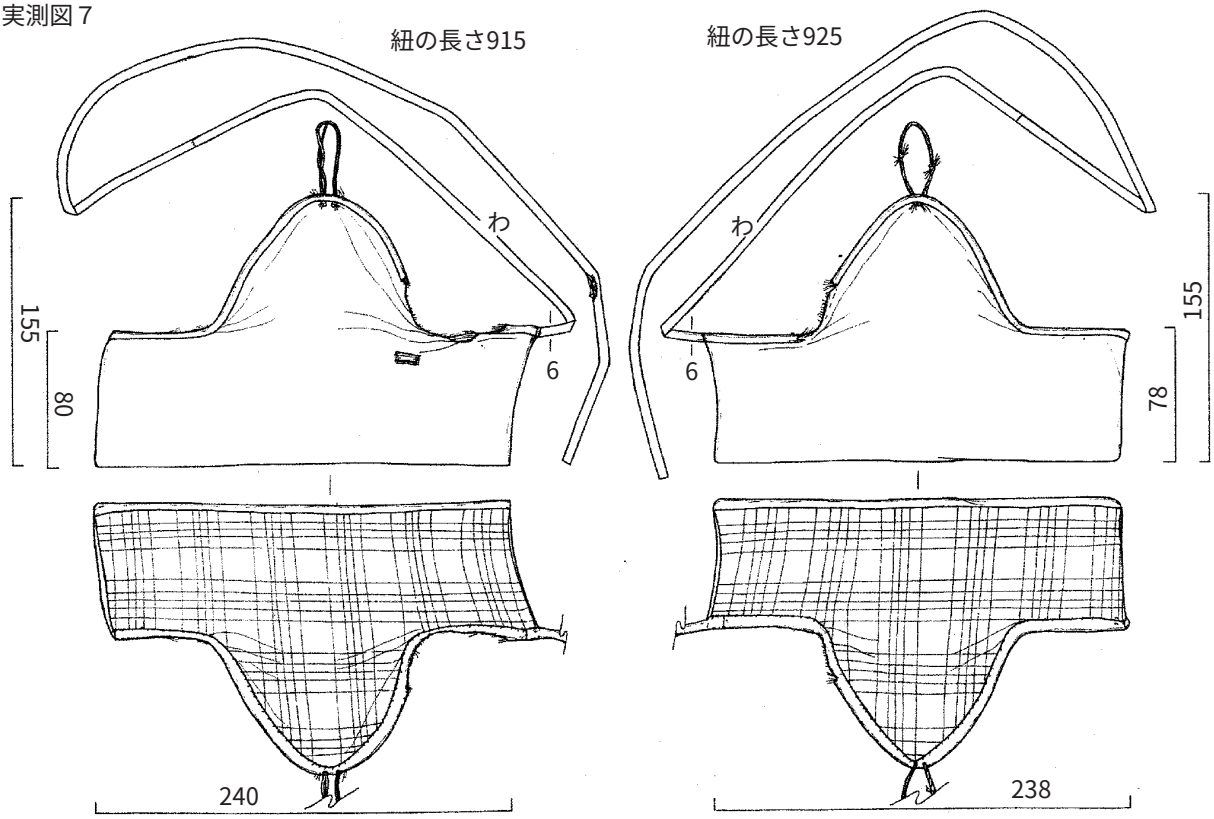


写真番号　17
実測図番号　６
分類名　下衣
資料名（地方）　麻ばかま
よみ　Asa-bakama
重量　350 g
材料　生地ａ…麻布・平織り・糸の密度（５㎜四方経糸８本×緯糸５本）・紺色の無地。生地ｂ…綿布・平織り・糸の密度（５㎜四方経糸９本×緯糸８本）・紺色の無地。前紐…麻布？・平織り・糸の密度（５㎜四方経糸10本×緯糸８本）・紺色の無地。後紐…麻布？・平織り・糸の密度（５㎜四方経糸15本×緯糸９本）・黒色の無地。糸…黒色の綿糸、紺と黒色の麻糸。裾紐…綿布、白色のたこ糸。当て布①…綿布・平織り・糸の密度（５㎜四方経糸11本×緯糸10本）・紺色の無地。当て布②…絹布・平織り・糸の密度（５㎜四方経糸19本×緯糸16本）・黒色の無地。当て布③…絹と麻の混合糸か？・平織り・糸の密度（５㎜四方経糸11本×緯糸11本）・黒地に茶色の経縞。先染め。当て布④…綿布・平織り・糸の密度（５㎜四方経糸10本×緯糸10本）・紺色の無地。当て布⑤…綿布・平織り・糸の密度（５㎜四方経糸12本×緯糸12本）・紺色の無地。

写真番号 17

材料入手法　祖母サトの代には、家に２坪程度のアサ畑があった。母カメヨの代には禁止になり作らなかった。アサは５、６月頃種を蒔く。途中草取りをする。アサを刈り取ると、生のうちに皮を剥き、［皮そぎ］と［台］で表の皮をそいで、繊維を取り出す。サトばあさんはその晩のうちに皮をそいでいた。そいだ外側の皮は「うまや」の堆肥に捨てた。アサが乾き過ぎているような場合は、流れ水に２、３日浸けていたように記憶している。蒸かしたりすることはなかった。取り出した繊維は２束を結んでから、それを分けて棒にかけて乾燥させた。［麻ばかま］や［蚊帳］を作った。麻布は自宅の［機］で織ったのを覚えている。繊維は藍で染めた。富久栄はサトばあさんが「にわ（家の中の作業場である土間）」で染めているのを一度見たことがある。「にわ」には［かまど］があり、［五右衛門釜］がはまっていた。藍染めはその［五右衛門釜］で染めた。
用途　秋から冬にかけて「またぎ（狩猟）」の時に着る衣類。［麻ばかま］は雪が付きにくく、雪がついても凍らないので、一番外側に着用した。
使用者　祖父福蔵　父富松まで、富久栄は穿かなかった。
使用年代　昭和 40 年頃まで
使用場所　狩猟場所
使用方法　雪が多い時は、［三尺ふんどし］や［六尺ふんどし］をしてから、［もんぺ］や［はかま］を重ねた上に［麻ばかま］を穿く。雪が深い所を漕いで歩く様な場合は、木綿製の衣類では凍り付いて固くなるが、この［麻ばかま］は雪が付きにくく、凍らないので、父富松は「またぎ」に行く時は必ず穿いた。裾は膝の下あたりまでくる。裾を絞った紐は片方ずつ２、３回脛にまわしてから一緒にして２、３回捻り、先に２、３回脛にまわした部分の紐に上から下に差し込んで止める。解く時には上にある先端部の紐を引っ張れば簡単にほどく事ができる。この先端部の紐は長いと凍り付くので、あまり長くしない。また結んでしまうと、雪が付いて凍り付きほどけなくなる。
収納場所　［ながもち］の中
製作（入手）者　祖母サト　母カメヨ
製作(入手)方法　手縫い　単衣
備考　アサが作られなくなってからはカラムシを山で採ってきて繊維を採った。カメヨの代はカラムシで衣類や蚊帳を作った。富久栄の代には［羅紗ズボン（乗馬ズボン）］を穿いた。
収蔵施設　根子児童館
作図者名　角舘さえ

実測図７

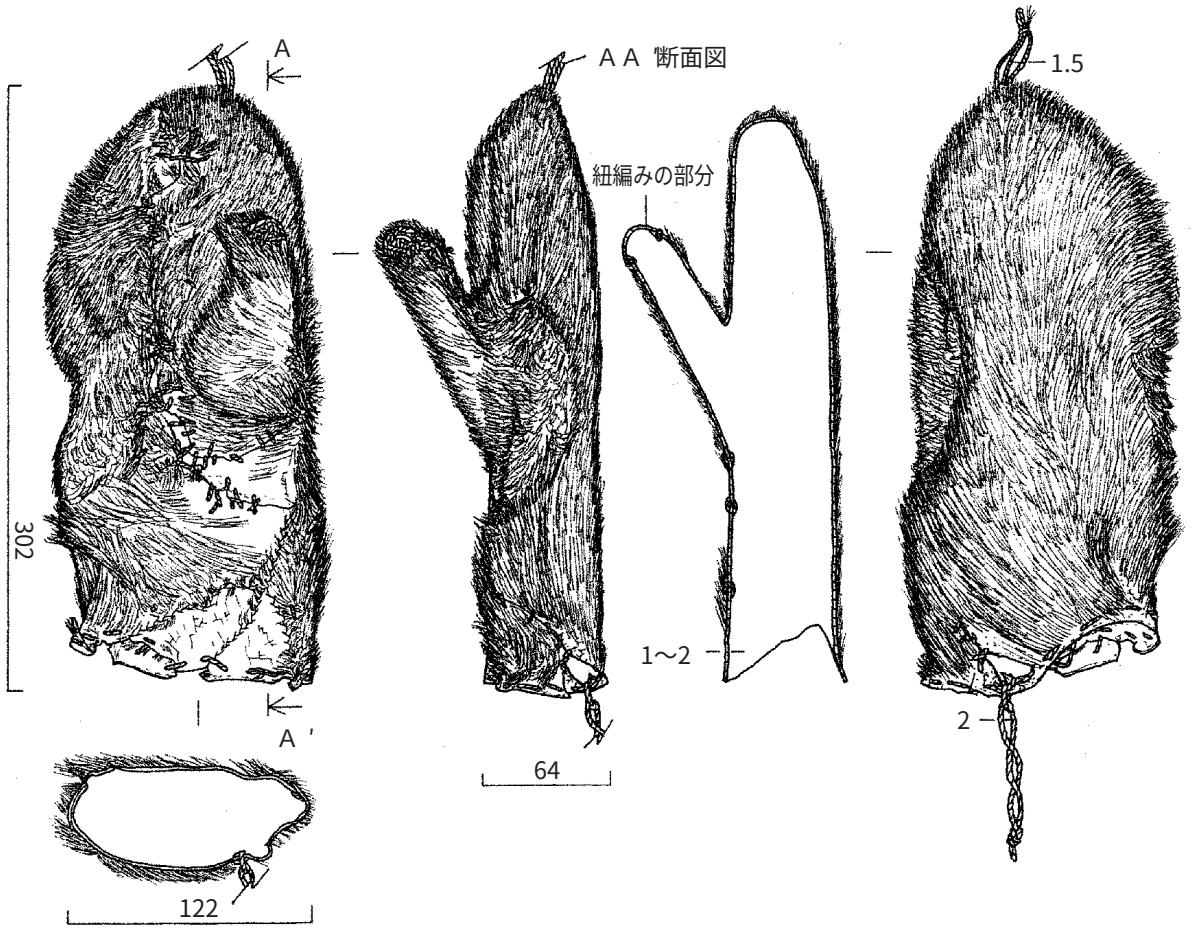


写真番号　18－1・18－2
実測図番号　７（写真番号 18－1）
分類名　手に着けるもの
資料名（地方）　てうえ
よみ　Te-ue
重量　18－1…片方 15ｇ　18－2…両方で 42g
材料　表地、紐…綿布・平織り・糸の密度（５㎜四方経糸 13 本×緯糸 10 本）・紺色の無地。裏地…綿布（起毛仕上げ）・平織り・糸の密度（５㎜四方経糸 10 本×緯糸 11 本）・格子縞（茶色・紺色、地は薄茶）先染め。縫い糸…紺色と白色の綿糸。
材料入手法　綿布は生地を購入した。木綿を［機］で織っているのは見たことがないが、糸を買っていた時代もあるので、木綿も織っていたことがあると思う。
用途　［鉄砲］を撃つ時は［てっきゃぁす］を外す。そのとき［てうえ］を着けていると、指先は自由でなおかつ多少暖かい。また「そらで」の予防になる。「そらで」とは重いものを持ったり力仕事をしたり、あるいは田植えをしたりした時に、関節が腫れる症状のことである。［てうえ］はそうした症状を予防する役割がある。「そらで」の予防には［てうえ］をつけなくても、手首に紐を巻くことでも予防になると言われている。

写真番号 18－1

写真番号 18－2

使用者　マタギ用
使用方法　素手に着ける。輪になっている部分を中指に通し、手の甲に被せて紐を手首に巻き付けて止める。その止め方は［麻ばかま］の裾紐と同じ。
収納場所　［ながもち］の中
製作（入手）者　祖母サト
製作(入手)方法　手縫い
備考　女性も農作業時に着けていた。指先が動きやすいようになっている。
収蔵施設　根子児童館
作図者名　角舘さえ

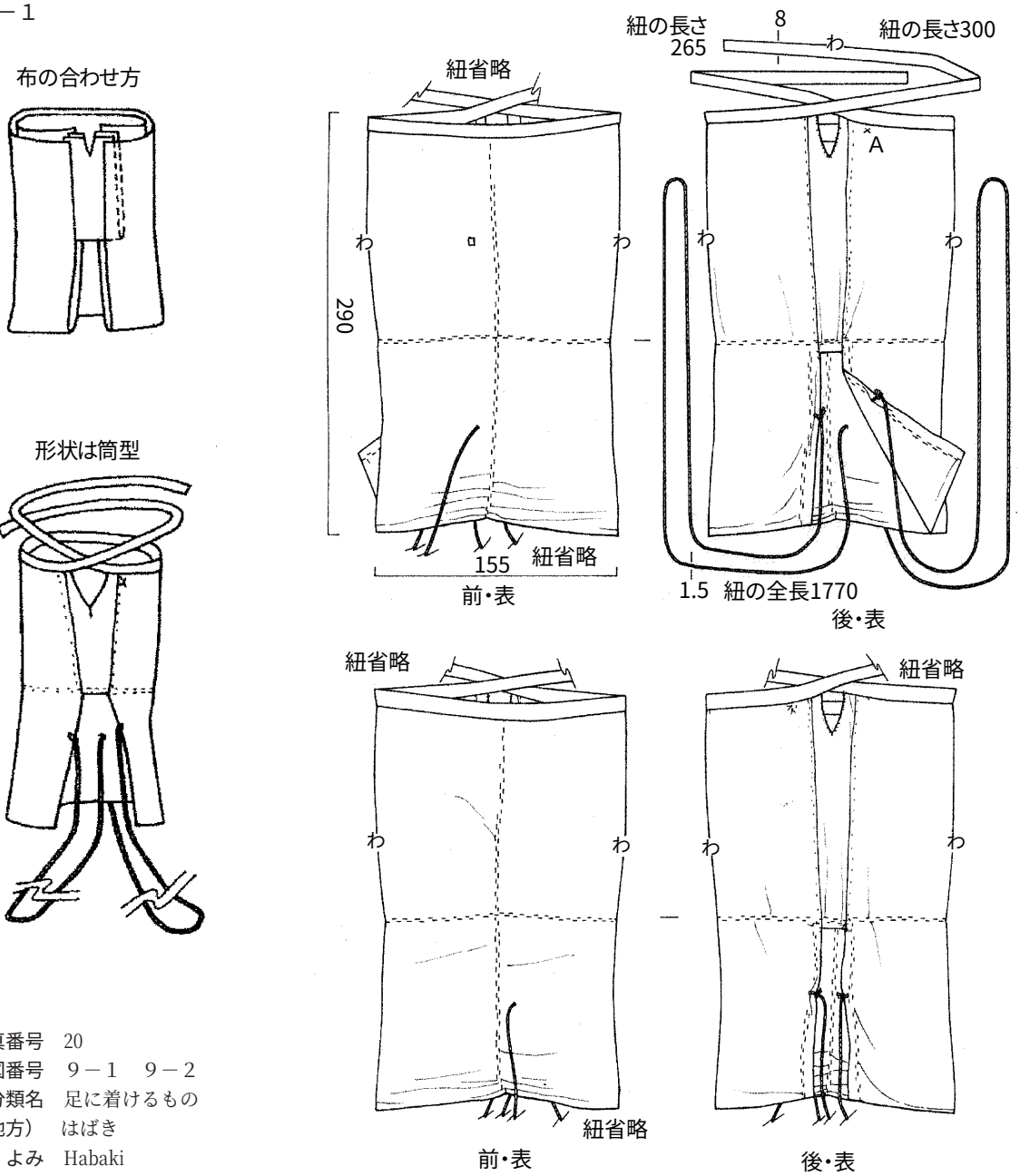


実測図 8

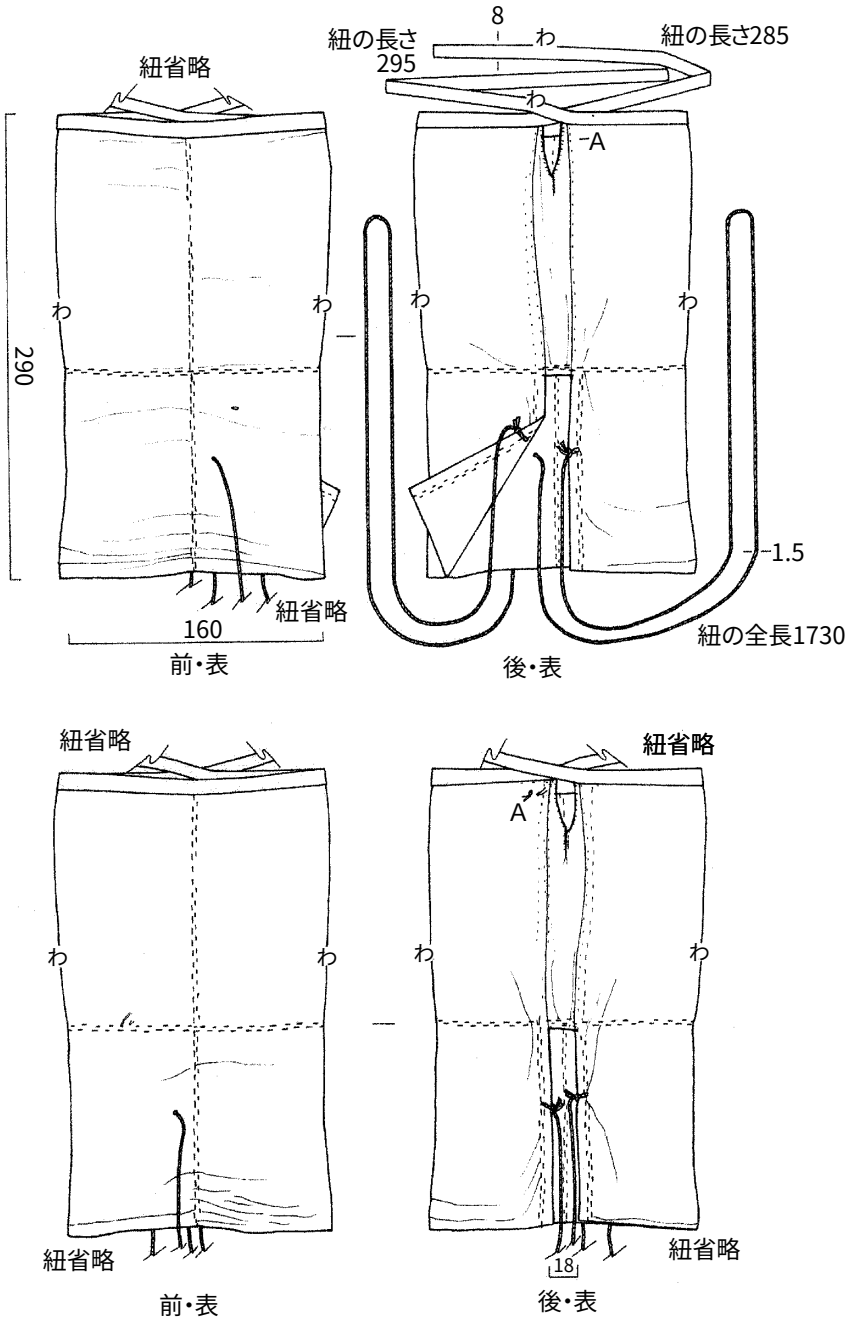
写真番号 19

写真番号　19
実測図番号　8
分類名　手に着けるもの
資料名（地方）　てっきぇぁす
よみ　Tekkyasu
重量　275g
材料　アオシシ（カモシカ）の皮（胸部）
用途　冬山に行く時、防寒用として手にはめる。
使用者　松五郎　曾祖父仁助　祖父福蔵　父富松　富久栄
使用年代　松五郎から富久栄までの代。富久栄は山仕事をする時にも使った。最後に使ったのは富久栄が60歳（平成６年）の頃。
使用方法　移動する時に、寒さから手を守るためにはめる。鉄砲を撃つ時などは素手で行う。
製作（入手）者　松五郎が作ったと聞いている。
製作(入手)場所　他の［てっきぇぁす］は自宅の「にわ」で、秋頃祖父の福蔵が作っているのを見たことがある。
製作(入手)方法　主にマタギが作る。アオシシ（カモシカ）の皮を［またぎ包丁］や［ながさ］で切り取り、先が三角になっている縫い針に［麻糸］を通して縫う。皮を剥いで適当な大きさに切り取った皮は、沢山脂が付いている所を［脂包丁］でそぎおとしたが、アオシシ（カモシカ）の皮はクマの皮をなめす時のように脂をとらない。多少脂が付いていた方が、その脂で温まるものだった。しもやけにもならない。皮に孔をあけて紐を取り付けた。なめした皮は軟らかいが、なめしていないので、古くなると硬くなる。
備考　藁材で作った［てっきぇぁす］もあるが、長持ちしないのでアオシシ（カモシカ）の皮で作る。
収蔵施設　根子児童館
作図者名　角舘さえ

実測図９－１



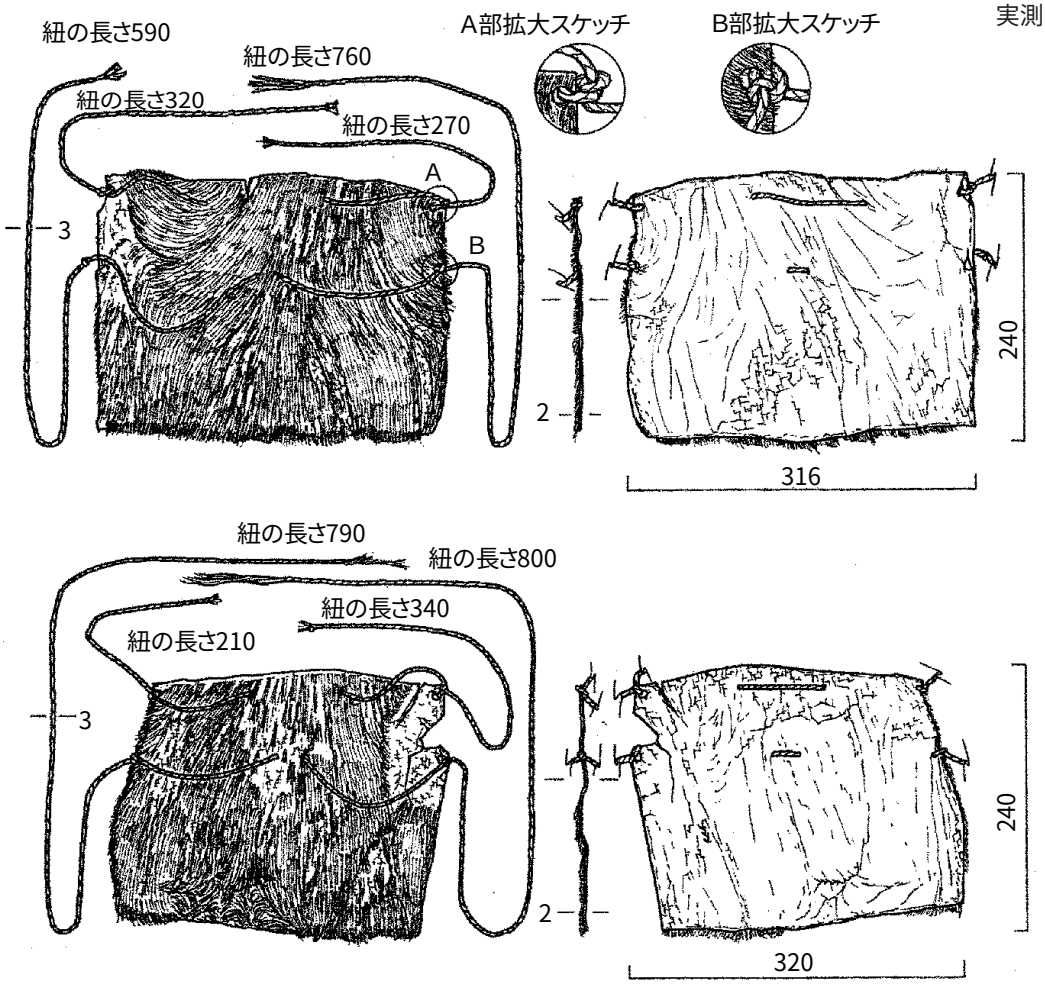
写真番号　20
実測図番号　９－１　９－２
分類名　足に着けるもの
資料名（地方）　はばき
よみ　Habaki
重量　片方 40 g
材料　表地・裏地・紐の生地…綿布・平織り・糸の密度（５㎜四方経糸８本×緯糸９本）・紺色の無地。糸…縫い糸は黒色の綿糸の１本どり、刺し糸は黒色の綿糸の２本どり、A部は白色の綿糸の２本どり。紐…白色のたこ糸か？
材料入手方法　綿布は生地を購入した。木綿を［機］で織っているのは見たことがないが、糸を買っていた時代もあるので、木綿も織っていたことがあると思う。
用途　柴などで脛が傷つかないように保護する。
使用者　祖父福蔵　父富松
使用方法　履き物を履く前、脛に穿く。裾をめくるようにして［こはばき］を「あくど（踵）」に着けて［つまご］を履く。そしてめくった［はばき］の裾を［つまご］の上に下ろして紐で止める。結ぶと凍り付いてとれなくなるので［麻ばかま］の裾の紐と同じような止め方をする。
収納場所　［ながもち］の中
製作（入手）者　祖母サト　母カメヨ
製作(入手)場所　「だいどこ」の「ゆるぎ（炉）」の傍
製作(入手)方法　手縫い。袷仕立て。A部分片方には「メ」の印に糸を刺している。
備考　父富松が「またぎ（狩猟）」に行く時は必ず着けていたが、山を歩くには窮屈で歩きにくい。山に行く時に履く履き物の紐は、雪がつくと凍って取れなくなるので、あまり長くせず、ほどけやすいように工夫していた。［はばき］の紐にはアサの繊維を使用していたが、アサは凍らないし、雪がついても、払うとすぐにとれる。
収蔵施設　根子児童館
作図者名　角舘さえ

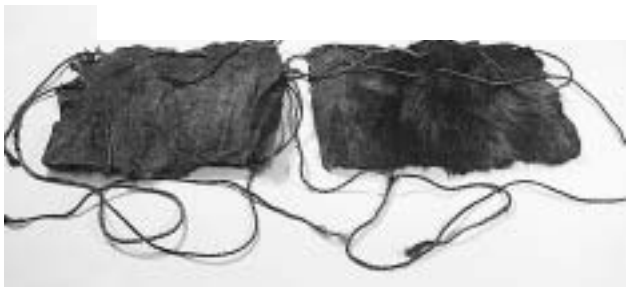


実測図９－２

写真番号 20

実測図 10



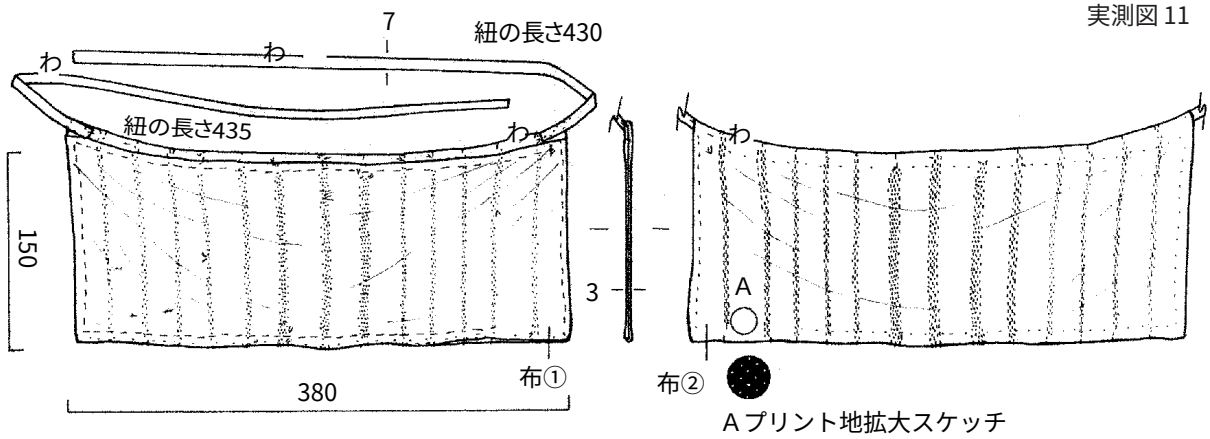


写真番号 21

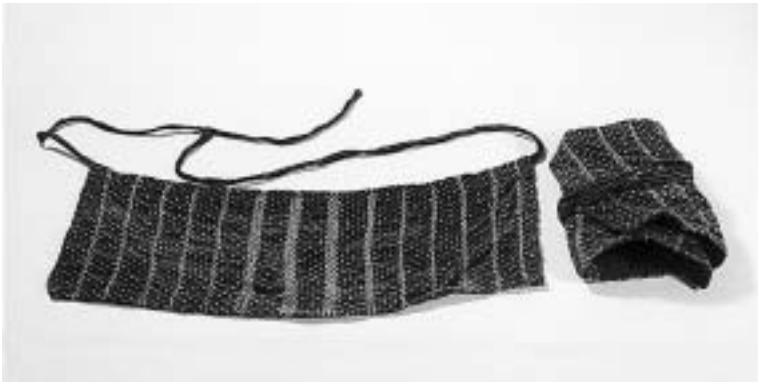
写真番号 22 ［はばき］の紐のとめ方（佐藤富久栄氏）

写真番号　21
実測図番号　10
分類名　足に着けるもの
資料名（地方）　はばき
よみ　Habaki
重量　片方 83 g・88 g
材料　アオシシ（カモシカ）の皮（胸部辺り）　紐…アサで撚った縄
用途　脛の保護
使用者　父富松以前の先祖
使用方法　紐は片方ずつ２、３回脛にまわしてからひとつ結び、次に２本の紐を一緒にして２、３回捻り、先に２、３回脛にまわした部分の紐に上から下に差し込んで止める。解く時には上にある先端部の紐を引っ張れば簡単にほどく事ができる。この先端部の紐は長いと凍り付くので、あまり長くしない。また結んでしまうと雪が付いて凍り付き、ほどけなくなる。
製作（入手）方法　皮を剥いで適当な大きさに切り取った皮は、沢山脂が付いている所を［脂包丁］で削ぎ落としたが、アオシシ（カモシカ）の皮はクマの皮をなめす時のように脂をとらない。多少脂が付いていた方が、その脂で温まるものだった。しもやけにもならない。皮に孔をあけて紐を取り付けた。なめした皮は軟らかいが、この場合はなめしていないので、古くなると硬くなる。［はばき］の紐にはアサの繊維を使用していたが、アサの繊維は凍らないし、雪がついても、払うとすぐにとれる。
備考　父富松が「またぎ（狩猟）」に行く時は必ず着けていた。
収蔵施設　根子児童館
作図者名　角舘さえ

実測図 11



Aプリント地拡大スケッチ



写真番号 23

写真番号　23
実測図番号　11
分類名　足に着けるもの
資料名（地方）　こはんばき
よみ　Ko-hanbaki
重量　片方 29 g
材料　生地①…綿布・平織り・糸の密度（５㎜四方経糸 12 本×緯糸 10 本）・紺地に縞。生地②…綿布・平織り・ネルの生地…糸の密度不明・紺地に白抜き水玉模様。紐…綿布・平織り・糸の密度（５㎜四方経糸 12 本×緯糸８本）・黒地に白色の細い経縞。縫い糸は黒色の綿糸の１本どり、刺し糸は白色の綿糸の２本どり。
材料入手方法　綿布は生地を購入した。木綿を［機］で織っているのは見たことがないが、糸を買っていた時代もあるので、木綿も織っていたことがあると思う。
用途　［毛たび］を履く際に「あくど（踵）」に巻き着けて雪が入らないようにした。［毛たび］の場合は着けない場合もあったが、［つまご］を履く時には必ず着けた。靴下代わりのようなもので、［足袋］よりはずっと薄手に作られている。
使用者　祖父福蔵　父富松　富久栄
収納場所　［ながもち］の中
製作（入手）者　祖母サト　母カメヨ
製作（入手）方法　手縫い。表地と裏地の布を合わせて仕立てる。それから刺し子にする。紐は袋縫い。本体に縫いつけた紐の端は、切ったままで折り返しなし。湾曲しているが、作った時は長方形であった。使っているうちに形がついた。富久栄の妻千代は、野良仕事や山仕事に使う［こはばき］を作った事があるが、「またぎ（狩猟）」用のものは作った事がない。
備考　サトばあさんは昼間は野良仕事があって忙しいので、「だいどこ」の「ゆるぎ（炉）」で夜なべ仕事をしていた。夜なべ仕事は裁縫や「糸お（績）み」である。夜なべ仕事の折はホウの木の皮を裂いて灰に刺し、蝋燭代わりにしていた。長さは１尺余、幅５、６㎝にホウの木の皮を裂くと、乾燥してくるりと丸くなり、蝋燭のようであった。２本くらい点けると結構明るかった。１本は 30 分くらい保った。明かり用として、木の皮の剥げる６、７月頃に細いホウの木の皮を剥いで裂き、天日干しにして作っておいた。ホウの木は育ちやすい事と、燃やすと明るいという事で使った。富久栄が５歳頃に電気が点いたが、富久栄も 15、６歳の頃まで作った事を覚えている。
収蔵施設　根子児童館
作図者名　角舘さえ

履き物

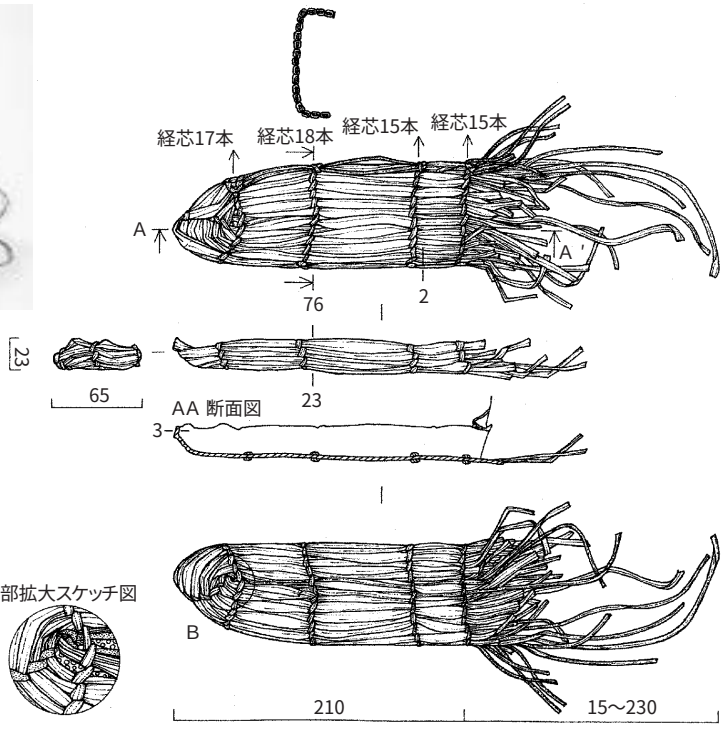
「またぎ（狩猟）」用の履き物としては、［小はんばき］を「あくど（踵）」から足首にかけて巻き付けて［毛たび］を履いた。富松さんの代までは［毛たび］も履いたが、富久栄さんは［毛たび］ではなくあめ色の生ゴム製の［生ぼっこ］を履いた。その［生ぼっこ］は温かくて雪が入らず滑りにくいもので、山仕事をする人達も履いた。昭和の初め頃からあった。戦中戦後は生ゴムが手に入らなくなる時期があり、そういう時は藁製の［つまご］を履いた。［つまご］の後は［長靴］に変わった。［毛たび］を履いていた時代も、皆が皆［毛たび］が手に入る訳ではなく、「またぎ（狩猟）」の時に［つまご］も履いた。

雪の中では軟らかくなり暖かい履き物として珍重された［毛たび］は、アオシシ（カモシカ）１頭の頭部で片足の［毛たび］を作る。よって１足の［毛たび］は２頭のアオシシ（カモシカ）の頭から作る。頭部は角と角の間の寸法が足の甲の幅ぐらいあり、片足の［毛たび］を作るのに丁度良い寸法だった。

また［かんじき］は必ず持って歩いた。雪が深くなってから履くような場合は、［鉄砲］の先に掛けたり、一対の［かんじき］を縄で結んで背負って行き、必要な所で履いた。牛革の紐の間に［毛たび］を履いた足を差し入れ、紐をくるぶしに廻して縛り付けた。［つまご］や［生ぼっこ］の場合でも履いたが、その場合は足を差し入れる部分を［毛たび］の場合より緩くした。「春またぎ（狩猟）」の頃は、雪崩がおきたり、雪が解けて固くなっているため滑りやすい。そこで滑り止めとして［かなかんじき］を付けた。現在のスパイクと同じ役目で、「またぎ（狩猟）」で歩く時のものは爪が長い。ひとり一対を持ち歩き、雪が柔らかい時には［かんじき］を履く。雪崩が起きた場所や傾斜がきつい場所で［かなかんじき］をつけるが、それ以外の所では邪魔なので直ぐに外す。取り外した［かなかんじき］は［獲物袋］に入れて背負って歩いた。

実測図 12

写真番号 24（装着されている）

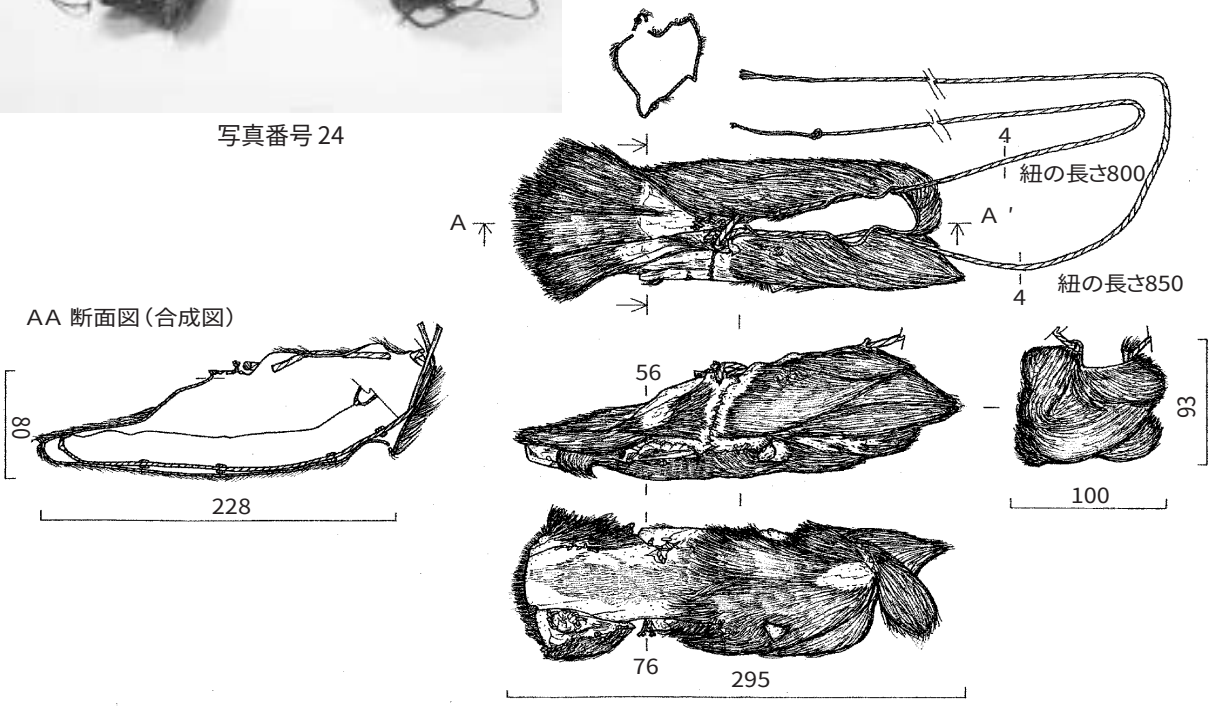


B部拡大スケッチ図

写真番号　24（装着されている）
実測図番号　12
分類名　履き物
資料名（地方）　毛たびの中敷き
よみ　Ke-tabi-no-naka-jiki
重量　片方 17 g
材料　ガマ材
用途　［毛たび］の脂で足が脂やけしないように、素肌を保護するために履いた。［中敷き］を履かない人もいた。
製作（入手）者　祖父福蔵　父富松
備考　足が脂やけすると素肌が傷む
収蔵施設　根子児童館
作図者名　角舘さえ

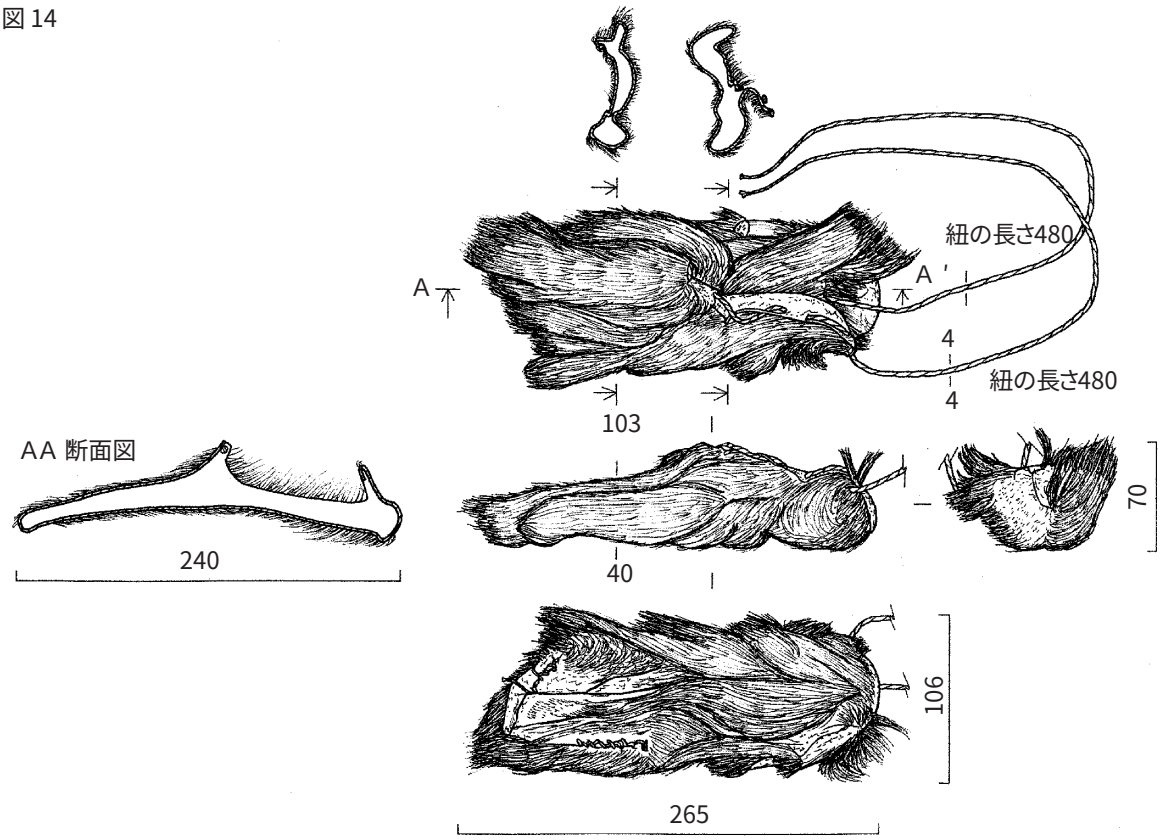
写真番号 24

実測図 13



写真番号　24
実測図番号　13
分類名　履き物
資料名（地方）　毛たび（中敷きあり）
よみ　Ke-tabi
重量　片方 106 g
材料　アオシシ（カモシカ）の毛皮（頭部）　麻糸
材料入手方法　アオシシ（カモシカ）１頭の頭部で片足の［けたび］を作ることができる。よって一足の［けたび］は２頭のアオシシ（カモシカ）の頭から作られる。頭部は角と角の間の寸法が足の甲の幅ぐらいあるため、片足の［毛たび］を作るのに丁度良い寸法である。アオシシ（カモシカ）の毛皮からは背に着る［かわ］も作る。
用途　足に履く
使用者　主には父富松以前の先祖。
使用年代　富久栄も60歳頃まで「またぎ（狩猟）」をしていたが、50 歳頃に履いたのが最後である。
使用場所　冬山
使用方法　素足に履くのではなく、足が痛くないように「あくど（踵）」に［こはばき］を着けてから履く。爪先の方は［中敷き］で保護する。
収納場所　昔は何処に収納していたか分からないが、みつけた時は梁の上にあった。
製作（入手）者　マタギが自分の足に合わせて作る
製作(入手)場所　にわ（作業場）
製作(入手)方法　皮を切る時は［またぎ包丁］や［ながさ］を使って切り、［てっきぇぁす］を作る時に使用した縫い針（先が三角のもの）で縫う。糸は麻糸を使用。底部の毛並みは滑りにくい方向が選択されている。［またぎ包丁］は現在でも使用している。小刀より少し大きい。富久栄は［毛たび］を作っている所は見たことがない。
備考　硬くなった［毛たび］は、ぬるま湯につけると元に戻って軟らかくなる。富久栄は［毛たび］ではなく生ゴム製の［生ぼっこ］というあめ色の靴を履いた。その［生ぼっこ］は、雪が入らず温かく滑りにくくて良いものだった。山仕事をする人達も履いた。記憶では昭和の初め頃からあった。戦中戦後はなかなか生ゴムが手に入らなくなる時期があり、そういう時は山仕事には藁製の［つまご］を履いた。［つまご］の後は［長靴］に変わった。
収蔵施設　根子児童館
作図者名　角舘さえ

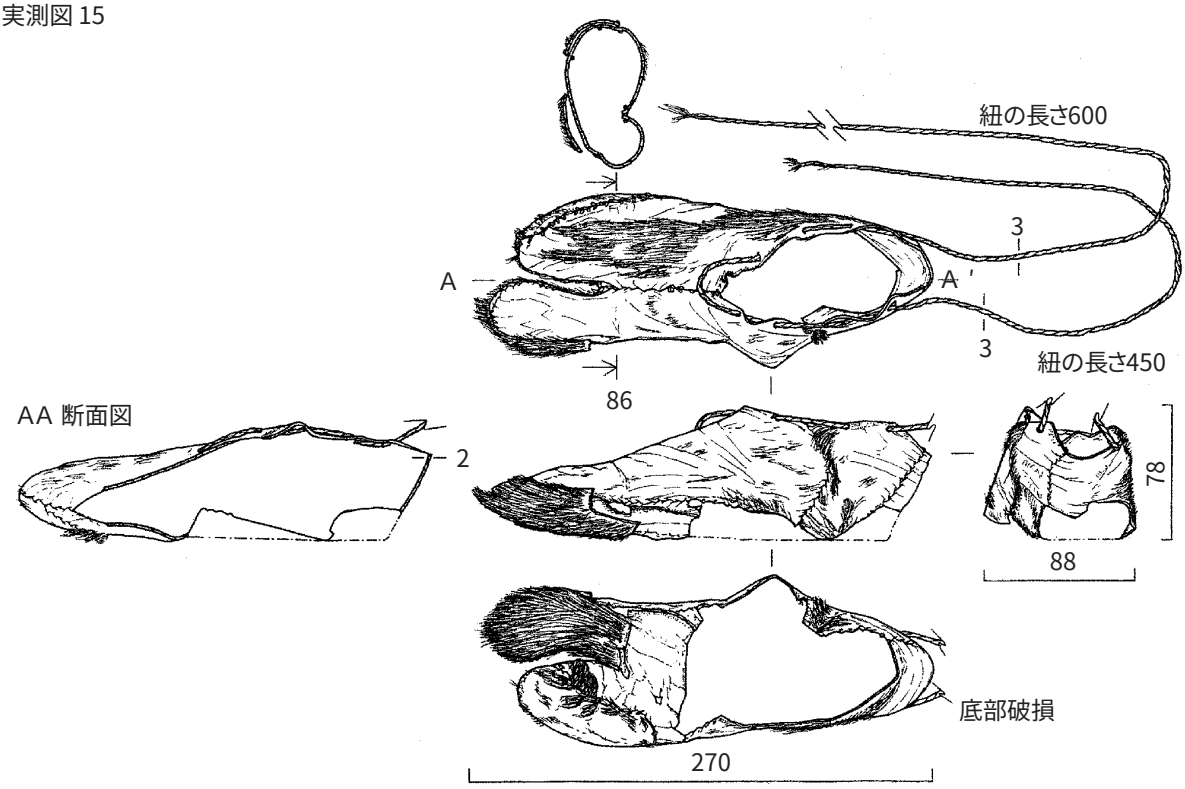
実測図 14



写真番号 25

写真番号　25
実測図番号　14
分類名　履き物
資料名（地方）　けたび
よみ　Ke-tabi
重量　片方…77 g・87 g
材料　アオシシ（カモシカ）の毛皮（頭部）　麻糸
材料入手方法　実測図 13 に同じ
用途　足に履く
使用者　主には父富松以前の先祖。
使用年代　富久栄も60歳頃まで「またぎ（狩猟）」をしていたが、50 歳頃に履いたのが最後である。
使用場所　冬山
使用方法　素足に履くのではなく、「あくど（踵）」に［こはばき］を着けてから履く。
製作（入手）者　マタギが自分の足に合わせて作る
製作(入手)場所　にわ（作業場）
製作(入手)方法　実測図 13 に同じ
備考　実測図 13 に同じ
収蔵施設　根子児童館
作図者名　角舘さえ

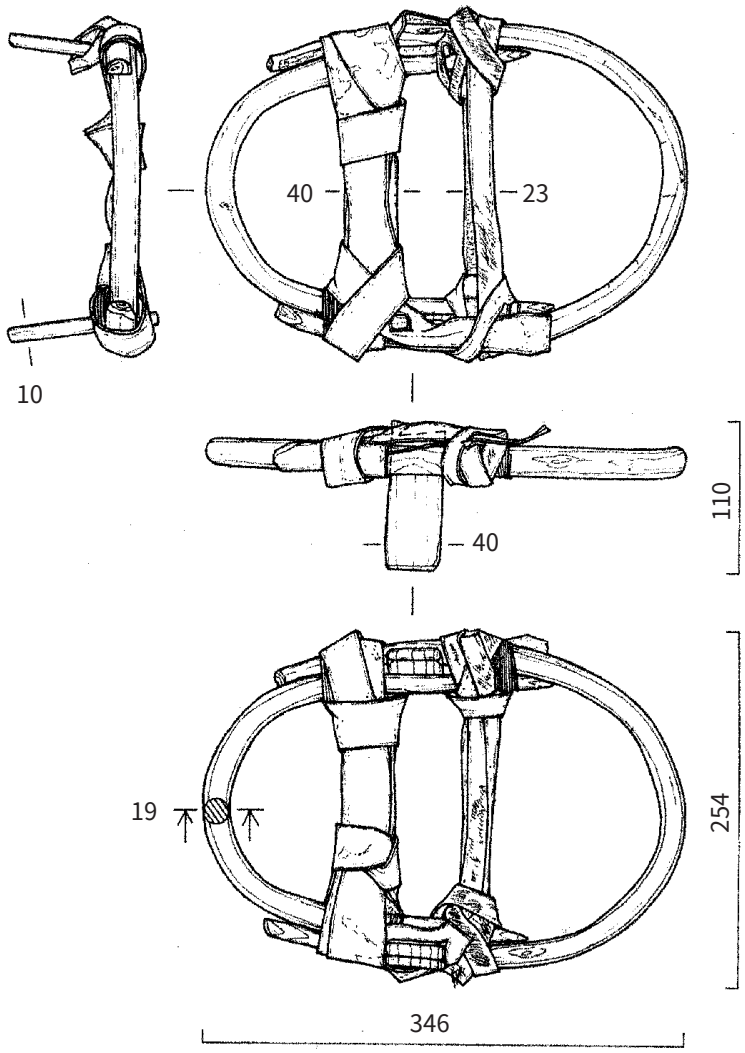
実測図 15



写真番号 26

写真番号　26
実測図番号　15
分類名　履き物
資料名（地方）　毛たび
よみ　ke-tabi
重量　片方 210 g
材料　アオシシ（カモシカ）の毛皮（頭部）　麻糸
材料入手方法　実測図 13 に同じ
用途　足に履く
使用者　主には父富松以前の先祖。
使用年代　久栄も60歳頃まで「またぎ（狩猟）」をしていたが、50 歳頃に履いたのが最後である。
使用場所　冬山
使用方法　素足に履くのではなく、「あくど（踵）」に［こはばき］を付けてから履く。
製作(入手)方法　実測図 13 に同じ
製作(入手)場所　にわ（作業場）
備考　実測図 13 に同じ
収蔵施設　根子児童館
作図者名　角舘さえ

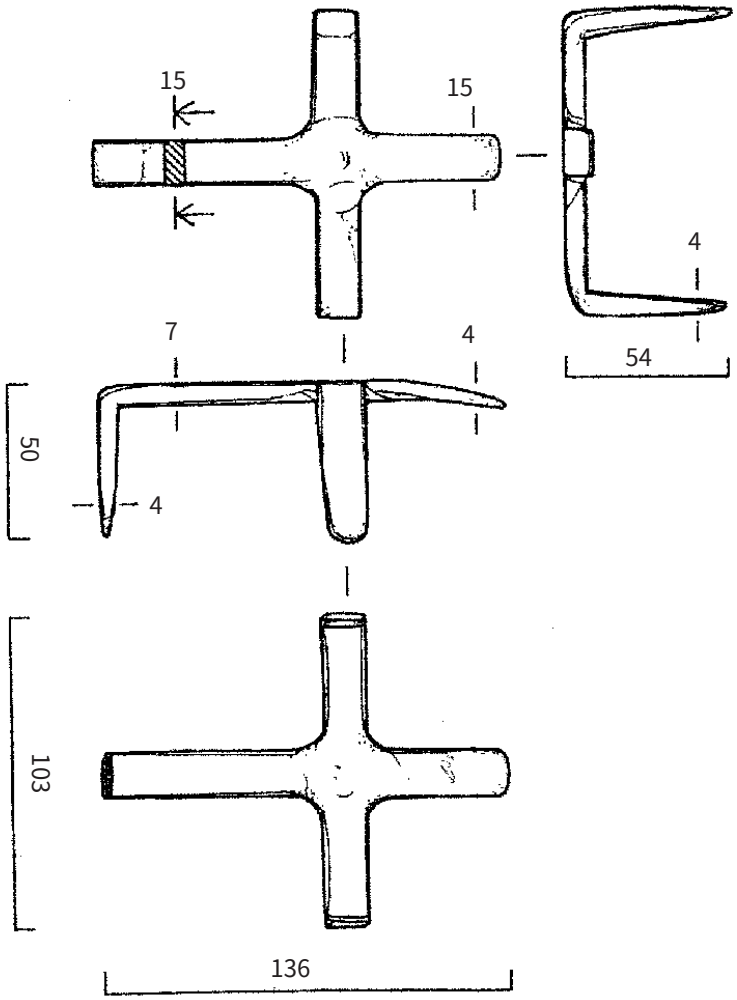
実測図 16



写真番号 27

写真番号　27
実測図番　16
分類名　履き物
資料名（地方）　かんじき
よみ　Kanjiki
重量　片方 470 g
材料　トリキシバ材　爪…イタヤ材　ウシの皮　針金　麻紐
用途　雪の深い時は、足がずぶりと雪の中に入り込んで歩けなくなるので、雪の中に足が沈み込まないように必ず履いた。
使用方法　牛革の紐の間に［毛たび］を履いた足を差し入れ、紐をくるぶしに廻して縛り付けた。［つまご］や［ぼっこぐつ］の時にも履いた。その場合は足を差し入れる部分を［毛たび］の場合より緩くした。
収納場所　「にわ」の隅などに掛けておいた。
製作（入手）者　父富松
製作(入手)方法　トリキシバ材は生のうちは軟らかいが乾燥すると硬くなる。現在［針金］を巻いてある所は、昔はサピタ（マタタビ）の蔓を裂いたもので巻いた。スギの板で作る人もいた。熱いお湯にスギの木を浸けると曲げる事ができる。曲げてから形を整えて縛って乾燥させる。
備考　固い雪の所を歩いたりするので、祖父が作って履いていたものは、すり減って壊れてしまった。一番壊れやすいのは先端部と爪の部分。10 年～ 20 年は保つ。
収蔵施設　根子児童館
作図者名　角舘さえ

実測図 17



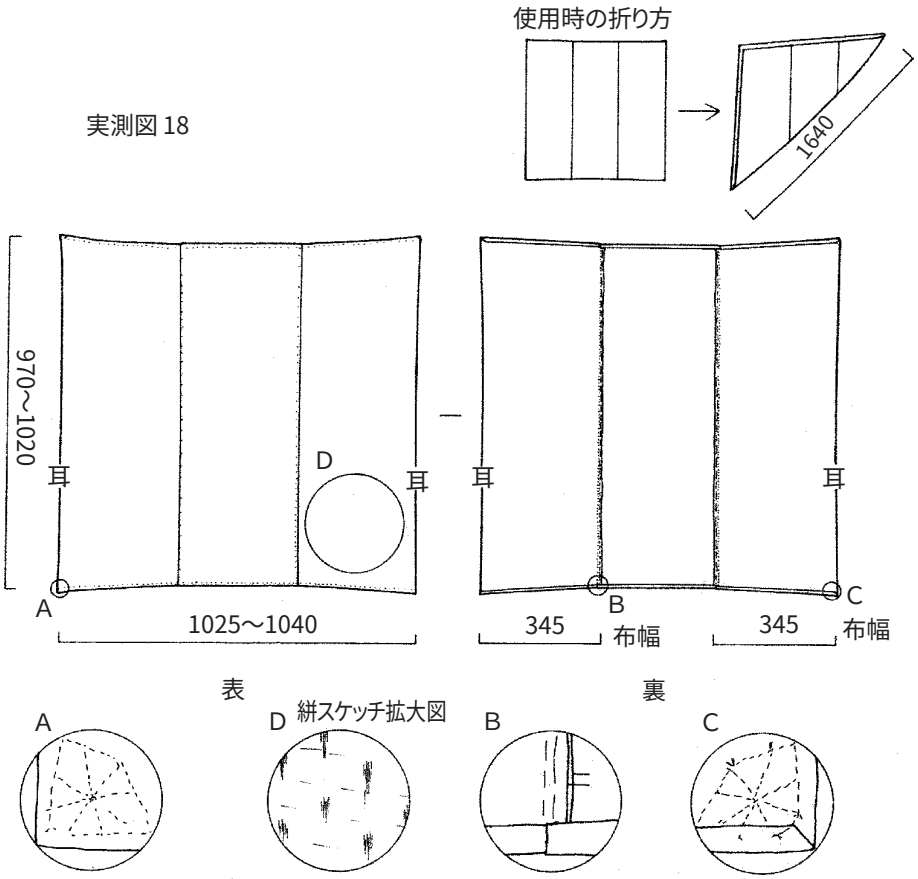
写真番号 28

写真番号　28
実測図番号　17（写真番号 28 －右）
分類名　履き物
資料名（地方）　かなかんじき
よみ　Kana-kanjiki
重量　28 －右…片方 246 g
材料　鉄
用途　「春またぎ（狩猟）」の頃は、雪崩がおきたり、雪が解けて固くなっているため滑りやすい。そこで滑り止めとして履く。現在のスパイクと同じ役目。「またぎ（狩猟）」で歩く時のものは爪が長い。
使用者　富久栄
使用年代　富久栄が 50 歳位まで使用した。その後生ゴム製の［生ぼっこ］を履いたので、付けなかった。［生ぼっこ］は滑りにくかった。
使用方法　［毛たび］の底に、十文字に交叉している短い鉄の部分が前にくるように、別に用意した紐で縛り付ける。紐の結び方は、先ず［かなかんじき］の底の爪より前の部分に紐を渡し、爪の部分に右の紐を前から絡げた場合は、左の紐は後ろから絡げて、［毛たび］を履いた足の甲の上で交差させる。次に左右の紐を底に廻し、その紐を足首で結ぶ。
製作（入手）者　鍛冶屋に作ってもらう。鍛冶屋は荒瀬地区・中村地区にあった。
収蔵施設　根子児童館
作図者名　角舘さえ

被り物

頭部を保護するためには被り物が必要だが、［あまぶた（帽子）］だけでは吹雪の時に耳が痛い。そこで耳をふさいで顔だけを出すように［さんかく］という布で頭を覆う。ほぼ正方形の風呂敷状の布を半分に折り三角にする。耳が隠れるように後頭部を覆って、布の両端を顎の下で交叉させて後ろで結ぶ。その上に［あまぶた］を被る。「またぎ（狩猟）」に出掛ける時は必ず被ったものである。
［あまぶた］は根子特有の形をしており、他地区の山笠型の［あまぶた］と著しく形が相違する。根子の［あまぶた］は携帯に便利で邪魔にならない。

実測図 18

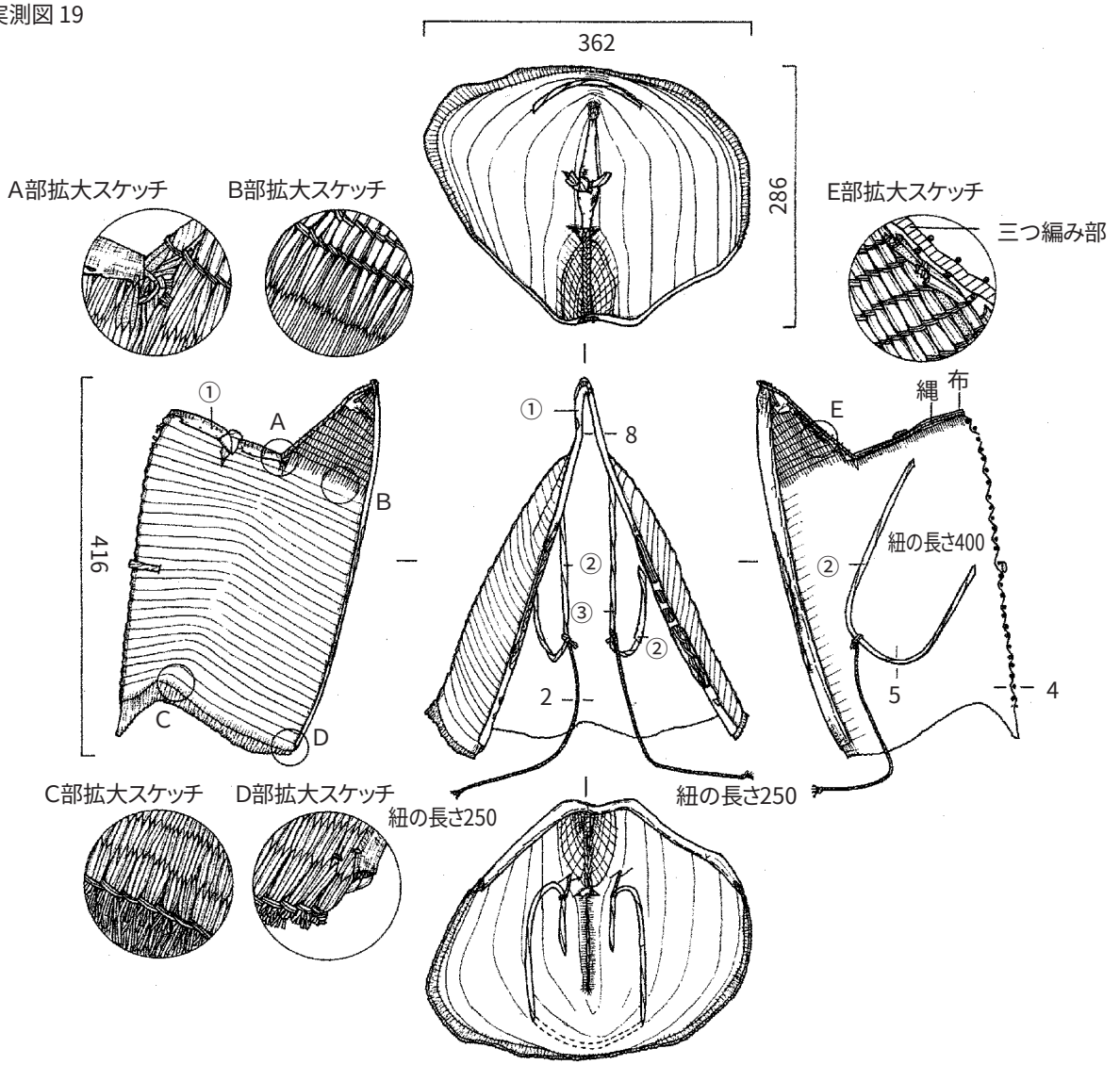


写真番号 29

写真番号　29
実測図番号　18
分類名　被り物
資料名（地方）　さんかく
よみ　Sankaku
重量　124 g
材料　生地…綿布・平織り（糸の度５㎜四方経糸15本×緯糸13本）・紺地に白絣。縫い糸は黒色綿糸の１本どり、刺し糸は白色綿糸の１本どり。藍染め。
材料入手方法　綿布は生地を購入した。木綿を［機］で織っているのは見たことがないが、糸を買っていた時代もあるので、木綿も織っていたことがあると思う。
用途　頭、耳、首の防寒及び風よけ。［あまぶた］だけでは吹雪の時に耳が痛い。
使用者　祖父福蔵　父富松　富久栄（昭和40年頃まで）
使用方法　ほぼ正方形の風呂敷状の布を三角になるように半分に折り、耳をふさいで顔だけを出すような感じで後頭部を覆い、布の両端を顎の下で交叉させて後ろで結ぶ。その上に［あまぶた］を被る。
収納場所　［ながもち］の中
製作（入手）者　祖母サト
製作(入手)方法　手縫い。単衣仕立。３幅でできている。
収蔵施設　根子児童館
作図者名　角舘さえ

写真番号 30、31、32［さんかく］の使い方（佐藤富久栄氏）

実測図 19



写真番号 33－1

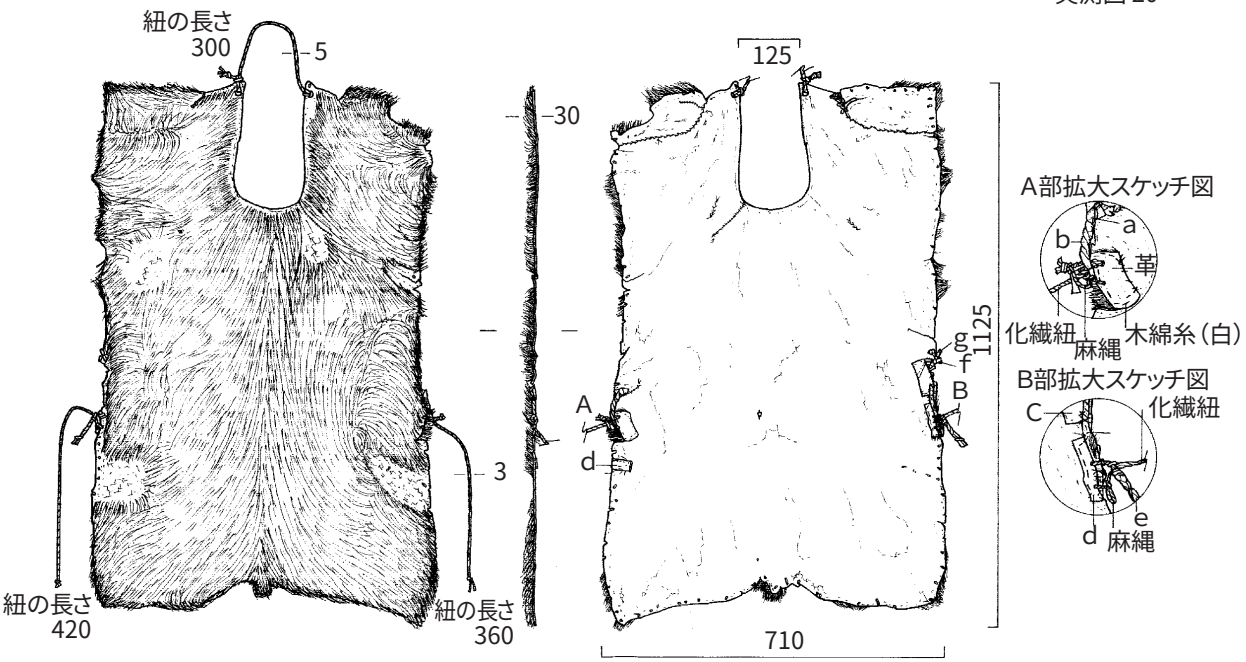
写真番号 33－2

写真番号　33－1・33－2
実測図番号　19（写真番号 33－1）
分類名　被り物
資料名（地方）　あまぶた
よみ　Ama-buta
重量　33－1…208g　33－2…222g
材料　藁みご材。①縁取りの生地…麻布・平織り（糸の密度５㎜四方経糸８本×緯糸11本）・無地・茶色。②紐…麻布・平織り（糸の密度５㎜四方経糸８本×緯糸４本）・紺地に経縞。③紐…植物繊維・平織り（糸の密度５m四方経糸 15 本×緯糸 16 本）・経縞。縫い糸・編み糸…黒色の植物繊維・白色のたこ糸。
用途　雨よけ・雪よけになる。雨や雪が降らなくても被っていた。
使用者　父富松以前。
使用方法　［さんかく］を被ってから［あまぶた］をかぶる。
備考　この形の［あまぶた］は根子のマタギだけが使用し、打当・比立内のマタギは山笠型の［あまぶた］を被った。根子の［あまぶた］は邪魔にならない。［山笠］の場合は広がっているので柴などに当たることがある。作っているのを見た事はない。家を建て替えた時に梁の上にあった。
収蔵施設　根子児童館
作図者名　角舘さえ

防寒具

「またぎ（狩猟）」の時は軽くて薄着を心掛ける必要があるが、山では雨も降るし風も吹く。吹雪にもなるが、そんな時の強い味方がアオシシ（カモシカ）製の［皮けら］である。この皮は雨も寒さも通さない優れもので、「またぎ（狩猟）」の時は必ず着用した。

実測図 20

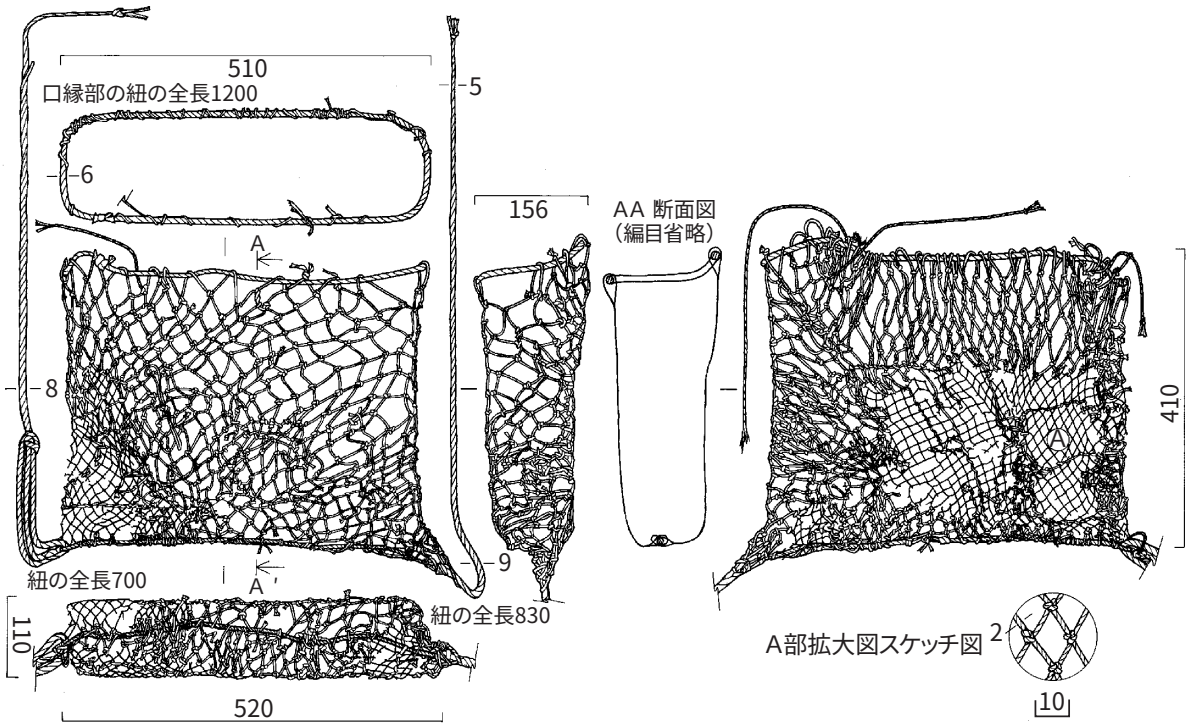


写真番号 34

写真番号　34
実測図番号　20
分類名　防寒具
資料名（地方）　皮けら（皮）
よみ　Kawa-kera（Kawa）
重量　705 g
材料　本体…アオシシ（カモシカ）の皮。紐付け部生地ａ…厚地ウール（茶色）。紐付け部生地ｂ…化繊の平織り（白色）。紐付け部生地ｃ…ウール地・平織り（黒色）。紐付け部生地ｄ…ウール・平織り（黒色・青色）。紐付け部生地ｅ…綿布・平織り（白色）。紐付け部生地ｆ…ウール地・平織り（茶色・白色）。紐付け部生地ｇ…綿布・平織り（白色）。紐…化繊（白色）。糸…綿糸（白色・黒色）・麻糸。
用途　防寒用。雨よけ用。休憩の時の敷物
使用者　曾祖父仁助　祖父福蔵　父富松
使用方法　「またぎ（狩猟）」の時は必ず着用した。［やまいしょ（山衣装）」の上に、毛のある方を外にして着用する。それは雨が降っても水を通さないためである。アオシシ（カモシカ）の皮は他の皮より寒さを通さないので、山仕事をする人達に愛用された。大地にべたっと腰を下ろしても、絶対寒さが通ってこない貴重な毛皮であった。敷き皮として使用する時は毛のある方を上にした。内皮の側が雪に接するが、皮は硬くならなかった。
収納場所　家の中の、北向きの日陰で風通しが良い所。
製作(入手)方法　アオシシ（カモシカ）の毛皮は形が小さい事と自分たちが使うものを作ったので、家でなめした。［てっきぇぁす］や［毛たび］は脂を完全に取り除く事はしなかったが、脂をとった皮は硬くならないので、敷き皮にする場合は脂を取り除いた。剥ぎ取った毛皮は、生の状態の時は木枠に張りつけて乾かす。有る程度乾いたら木枠からはずす。脂を取り除く方法は、［脂とり包丁］で脂を大体取り除く。次に「こぬか（米糠）」を撒いて、砂ごいた藁を束ねた［藁たわし］や、藁で作った縄を折り曲げた［縄たわし］でこすり取ってきれいにする。その後乾燥させる。その場合は木枠に張りつけずに、そのまま［物干し竿］のようなものに掛けて乾燥させる。
収蔵施設　根子児童館
作図者名　角舘さえ

袋物

「またぎ（狩猟）」に出掛けるとなれば、弁当を用意する必要がある。また目的である獲物が捕れればそれらを持ち帰る必要がある。そんな時にはやはり入れ物が必要であり、袋物が活躍する。それらはマタギが自分で作った。［背負い網］は漁師が網を作る時と同じ道具を使って麻糸で編んだ。富久栄さんは修理はできるが作り方は分からないそうだ。道具の修理は暇な時にしておいた。網は作った後にカキ渋に浸けた。虫も食わないし丈夫になるからである。渋を作る方法は、熟さないマメガキをもいできて、袋に入れて絞る。絞った汁を５升くらい入る［瓶］に入れて、「でどこ（台所）」の「みずや（板の間）」の下の土を掘って埋めて置いた。渋は建具に漆を塗る前にも塗った。

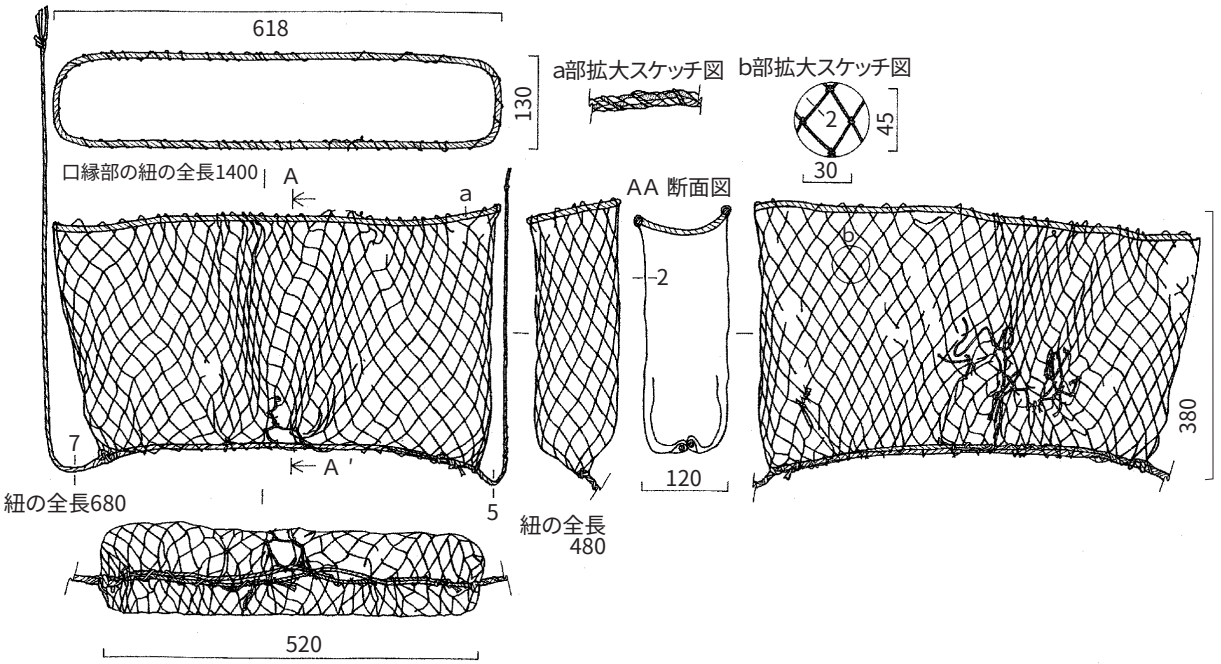


実測図 21

写真番号 35

写真番号　35
実測図番号　21
分類名　袋物
資料名（地方）　背負い網（獲物入れ）
よみ　Syoi-ami(Emono-ire)
重量　600 g
材料　麻糸で撚った縄　カキ渋
用途　マミ（アナグマ）、バンドリ（ムササビ）、テン、ムジナ（タヌキ）、ウサギ、ヤマドリなどの小さい獲物を入れる。
使用者　最初は曾祖父の仁助か？祖父福蔵　父富松　富久栄
使用方法　［皮けら］の上に背負った
収納場所　［かんじき］などと一緒に「にわ」の隅に掛けておいた。
製作（入手）者　父富松が、「だいどこ」の「ゆるぎ」の傍で、破れた部分を麻糸で補修しているのを見たことがある。元々の本体はカキ渋で黒くなっている部分である。
製作(入手)方法　マタギが自分で作った。漁師が網を作る時と同じ道具を使った。カキ渋に浸けたものである。富久栄は修理はできるが、作り方は分からない。道具の修理は暇な時にしておいた。
収蔵施設　根子児童館
作図者名　角舘さえ

実測図 22



写真番号 36

写真番号　36
実測図番号　22
分類名　袋物
資料名（地方）　背負い網（獲物入れ）
よみ　Syoi-ami(Emono-ire)
重量　314 g
材料　麻糸で撚った縄　カキ渋
用途　マミ（アナグマ）、バンドリ（ムササビ）、テン、ムジナ（タヌキ）、ウサギ、ヤマドリなどの小さい獲物を入れる。
使用者　最初は曾祖父の仁助か？祖父福蔵　父富松　富久栄
使用方法　［皮けら］の上に背負った
収納場所　［かんじき］などと一緒に「にわ」の隅に掛けておいた。
製作（入手）者　父富松が、「だいどこ」の「ゆるぎ」の傍で、破れた部分を麻糸で補修しているのを見たことがある。元々の本体はカキ渋で黒くなっている部分。
製作(入手)方法　マタギが自分で作った。漁師が網を作る時と同じ道具を使った。カキ渋に浸けたものである。富久栄は修理はできるが、作り方は分からない。道具の修理は暇な時にしておいた。
収蔵施設　根子児童館
作図者名　角舘さえ

狩猟用具

写真番号37　佐藤家の「中の間」で［元折れ銃］の銃身を掃除している富松（50代）。クマの毛皮を敷いている。［やまいしょ（山衣装）］［もんぺ］［皮けら（かわ）］を着けている。

獲物を捕るために使用したものは、獲物を殺傷する事のできる［銃］や［たて］［ながさ］などの刃物類、また「またぎ（狩猟）」の際の歩行、野宿の時の雪洞やウサギを捕まえるための穴掘りや、アオシシ（カモシカ）に一撃を与えるための役目を担った［またぎべら］の類、さらに小動物を捕獲する［罠］などがある。

［銃］は年代が古い順に、［火縄銃］［村田銃］［元折れ銃］［ライフル銃（戦後）］と変化した。

先祖の松五郎の頃は［火縄銃］を使用していたが、どこから入手したかは不明である。［火縄銃］に火薬を詰める時は、銃の筒先から［詰め棒（金属製又は木製）］で押して詰める。その上に［厚紙］を入れて［弾］を入れ、更に［厚紙］を入れて止める。引き金の場所に火のついた火縄を落とす所があるが、そこから火薬に点火する。なかなか点かない場合は、其処に火薬を少量こぼしておくと火が移りやすい。

松五郎が戊申戦争で［火縄銃］を使った際、佐竹藩の大島大将からお褒めの言葉を頂いたという話が伝わっている。それは［火縄銃］で［弾］を撃つと、その後空になるので、その場で詰め替える必要がある。その際「座って詰め替えていると目立って敵の標的になりやすいので、撃ち終わったら仰向けにひっくり返って、寝た形で［弾］を詰め替え、撃つ時にはまた起きて撃つと良い」と進言したところ、大変褒められたという話である。根子で［火縄］を作ったと言う話はない。松五郎は［村田銃］も使っている。現在［村田銃の筒］のみ資料として遺っているが、最初は松五郎が使ったと言われている。これは公安委員会の手で廃棄処分になった［銃］だが、マタギという専門集団が使用した道具だという事で歴史的な価値が認められ［村田銃の筒］だけ返却された。この［銃］に伴っていたと言われる［ばんど］も残っている。この［ばんど］は長方形の革の部分に反りがあり、他の［弾帯］との相違が顕著である。［ばんど］には6点の［薬莢］が納まっているが、［雷管］を抜いたもの、［発火金］が見えている物、［雷管］を詰めたものと3種類が残されている。［発火金］の所に［雷管］を詰め、［雷管］の先端を突っつく事で発火して火薬に火が点き弾が飛んで行く事になるので、この［ばんど］の中の［薬莢］はその経過が良く分かる。また［つめ器］と［火薬入れ（火薬ざら）］もその［ばんど］に伴っていた。［村田銃］の単発小銃は1880（明治13）年に村田経芳が完成したものであるから、［火縄銃］を使用した松五郎が使った［村田銃］はその経緯から考えて［村田銃］の初期のものだったと考えられる。この［筒］の付属品として遺されている［ばんど］［火薬入れ］［つめ器］もまた入手年代に多少ずれがあるとしても、［ばんど］に残っている［薬莢］の口径と雷管を詰める［つめ器］がぴたりと一致するため、当時から使われていたものではないかと推測されている。

祖父福蔵さんの代に［元折れ銃］を買った。富久栄さんは［村田銃］も［元折れ銃］も使った。［元折れ銃］には5発の自動銃があった。銃の筒の長さは大体同じだが、［ひとつ弾］［散弾］共に銃の筒の口径は大きいものから8番10番12番16番20番24番30番とあり、クマを撃つには24番や30番が適当であった。富久栄さんもクマを撃つ「弾」や［散弾］を作った。［弾］を作るには［七輪］に炭火を熾して［柄ざら］で鉛を溶かす事から始める。溶けた鉛を［鋳型］に流し込む。10分か20分で冷えるので［鋳型］から取り出す。［ひとつ弾］の場合は、周りについた鉛の余分な部分を［あらやすり］や［鉈］で削り取って丸くする。散弾を作る場合も［鋳型］に流すが、根子のものは2枚重ねではなく1枚である。先ず［七輪］の上で［鋳型］に溶けた鉛を流す。まだ温かい時に［みごばき（みご製のほうき）］で型に流した鉛の上を掃くと、［みごばき］は焦げるが、［弾］と［弾］の間が切れると共に［弾］がある程度丸くなる。そのようにしてからあら熱をとり、まだ鉛に温かみが残っている状態で、［鋳型］から［弾］を

外して硬い板の上に広げる。その［弾］の上に硬いイタヤの板を載せてごろごろと軽くこするように動かす。すると［弾］がまん丸くなる。こうしてできた［弾］を［薬莢］に詰め込んで実弾にする。

根子では昭和24、５年頃に新潟から［土窯］の方法が入ってくる。それ以前は石のありそうな雑木山に直径２mほどの［石窯］を作り、そこで「しろずみ（白炭）」を作っていた。「しろずみ（白炭）」は火力が強い。一週間で炭ができた。白炭はナラ材やイタヤ材が原料である。［土窯］になってからはブナ材を炭にすることが多かった。鉛は富久栄さんの頃は電気の工事屋さんから分けてもらった。祖父や父の時代は鉛の鉱山から固まりで分けてもらった。現在富久栄さんの所には、活版印刷用の鉛の版もある。

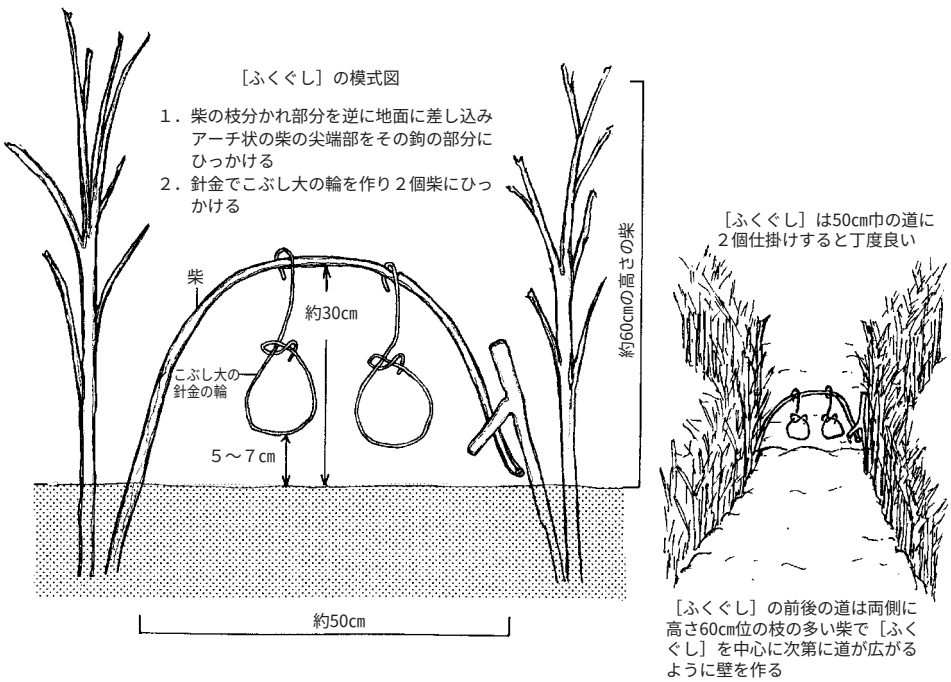
［弾］を実弾として使えるようにするには、［薬莢］に［弾］と共に火薬を詰める必要がある。［薬莢］には［つめ器］で先ず［雷管］を詰め、それから［火薬入れ］で火薬を量って入れ、［詰め器］の円筒状の柄で押す。火薬の上に［厚紙］を入れ、［散弾］を入れて最後に［厚紙］で蓋をする。［ひとつ弾］の場合も、［雷管］を詰めてから火薬を入れ、［厚紙］を入れて［ひとつ弾］を入れ、［厚紙］で蓋をする。火薬の上に［厚紙］を詰めるのは、火薬の爆発力がより増して［弾］を撃つ力が強まるからである。［つめ器］の太い方の柄の先端部はネジ式で外す事ができる。その中に突起部があるので、撃ち終わった［薬莢］から［雷管］を抜く時は、その部分を［薬莢］の中に差し込んで［雷管］を押し出す。［薬莢］は［ばんど］に［雷管］を上にして差し込む。かつて［はらかけ］を着用していた時代は、［銃］に関わる細かな付属品は、［はらかけ］に幾つもついているポケットに分別して収納していた。

鉄砲以前のクマの捕獲には［たて］がなくてはならなかったし、とっさの時は［ながさ］も活躍する。獲物の解体には［またぎ包丁］や［ながさ］や［まきり］を使う。

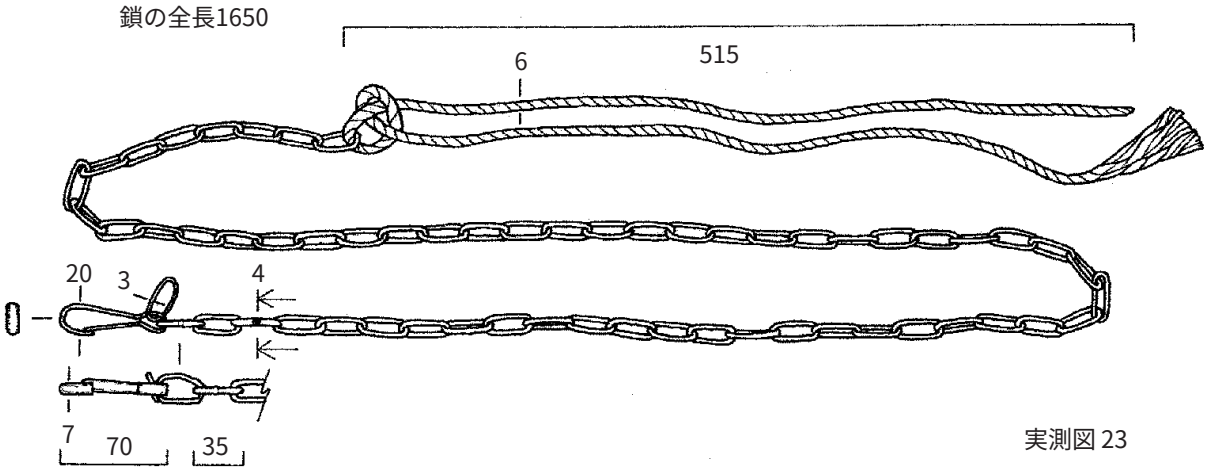
殺傷用具ではないが、「またぎ（狩猟）」の際の必需品に［おなぎぇ］［こなぎぇ］と呼ばれる［またぎべら］がある。山の斜面を歩く時に山側に杖のように突いて歩いたり、傾斜地を登る時に胸まである雪を漕ぐようによけたり、雪洞やウサギが逃げ込んだ穴を掘ったり、アオシシ（カモシカ）を捕る時には急所に一撃を加えるためにも使った。また「春またぎ（狩猟）」の時は、急な斜面を下りる時に［またぎべら］を股に挟んで柄の部分を両手で持って、「ぐぐっ」と滑り止めにしながら下りたものである。

罠には大型獣のクマ、アオシシ（カモシカ）などを捕った（現在は禁止）［とらばさみ］や、テン、キツネ、マミなどを捕った小型の［がばさみ］やイタチを捕る［竹筒］などがある。［ふくぐし（針金の罠）］ではウサギ、ヤマドリ、キツネ、タヌキ、テンなども捕った。

想像復元図　［ふくぐし］（聞き取り調査による作製図）作図者　名久井芳枝



岩手県では、小型の罠に［とらばさみ］と呼ばれているものがある。それと同一のものが阿仁では［がばさみ］と言われている。トラのように大きなものを捕るのが［とらばさみ］だと言う事で、阿仁でうかがった説明には説得力があった。詳細は分からないが、岩手県の場合は、いつの時点かで名称が誤って伝えられ定着した可能性があるのかもしれない。



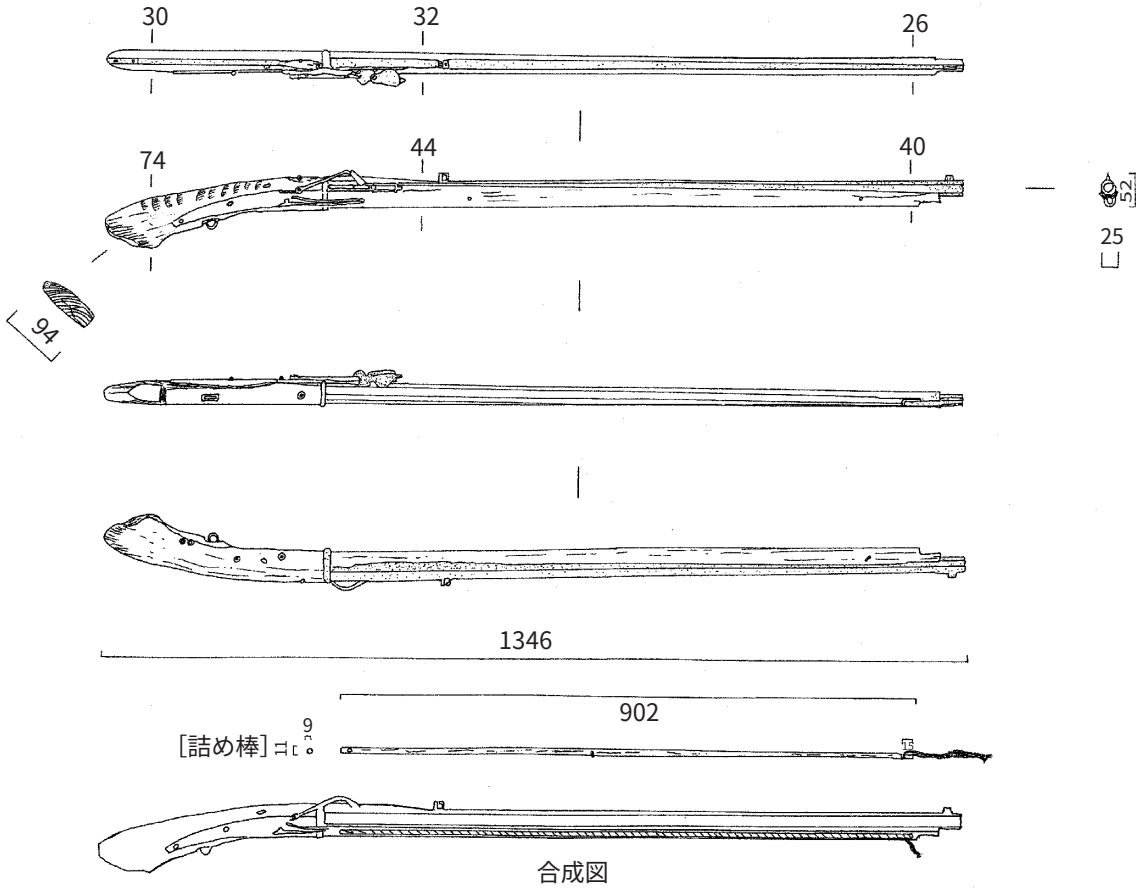
実測図 23

写真番号 38 － 1

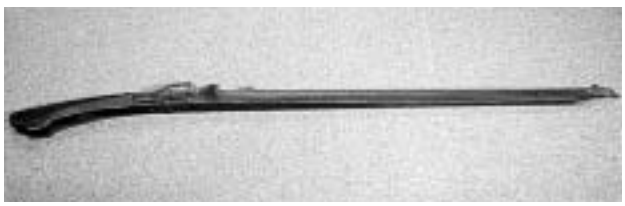
写真番号 38 － 2

写真番号　38 － 1・38 － 2
実測図番号　23（写真番号 38 － 1）
分類名　狩猟用具
資料名（地方）　イヌの鎖
よみ　Inu-no-Kusari
重量　38 － 1 …450 g　38 － 2 …478g
材料　鉄の鎖　麻縄
用途　イヌを縛り付けておく
使用者　父富松　富久栄
使用方法　イヌをつれて行くのは、クマの足跡を探させるため。「またぎ（狩猟）」に行く時は現場まで喜んで後を突いてくるので縛り付けておくことはない。イヌはクマを追い立てる役目の勢子の所にいるので、「このくらめぇさはクマがいるな」という事になると、イヌを放さないで、［鎖］で縛り付けておく。クマが出てきそうな気配になると、イヌも足が早くなるので、興奮させないように縛っておく。その後はクマを追い立てるのは勢子の役目。鎖の所は紐がからまらない用に廻る仕掛けになっている。イヌがいると雪崩が起きるような所は入りたがらないので、危険防止になった。猟犬は秋田犬や柴犬。佐藤家の犬は秋田犬と柴犬を掛け合わせたもの。
収蔵施設　根子児童館
作図者名　角舘さえ

実測図 24



写真番号　39
実測図番号　24
分類名　狩猟用具
資料名（地方）　火縄銃・火薬棒　D－110
よみ　Hi-nawa-jû・Kayaku-bo
重量　銃 3.5 kg・火薬棒 80 g
旧所有者　佐藤国男（根子地区、寄託）
収蔵施設　マタギ資料館（展示室）
作図者名　武田千鳥

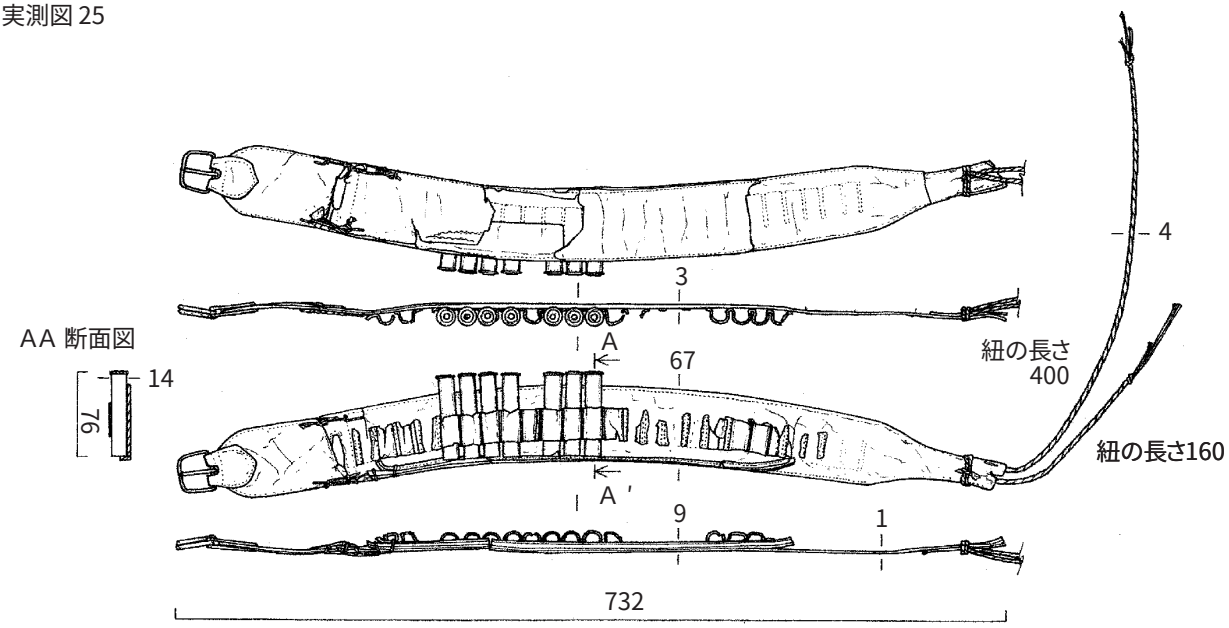


写真番号 39

写真番号 40

写真番号　40
分類名　狩猟用具
資料名（地方）　村田銃の筒（口径 30 番）
よみ　Muratajû-no-tsutsu
重量　1.175kg
用途　［薬莢］の中に、［ひとつ弾］は１つ、［散弾］は 20 ～ 30 個入れて使用する。［散弾］の場合は、７～ 10 m位離れていても獲物を狙うことができる。
使用者　最初は松五郎が使用した。父富松　富久栄
使用年代　富久栄の代まで
備考　この筒は公安委員会の手で廃棄処分になった鉄砲のものであるが、マタギという専門集団が使用した道具だという事で、歴史的な価値が認められ［村田銃の筒］だけ返却された。
収蔵施設　根子児童館

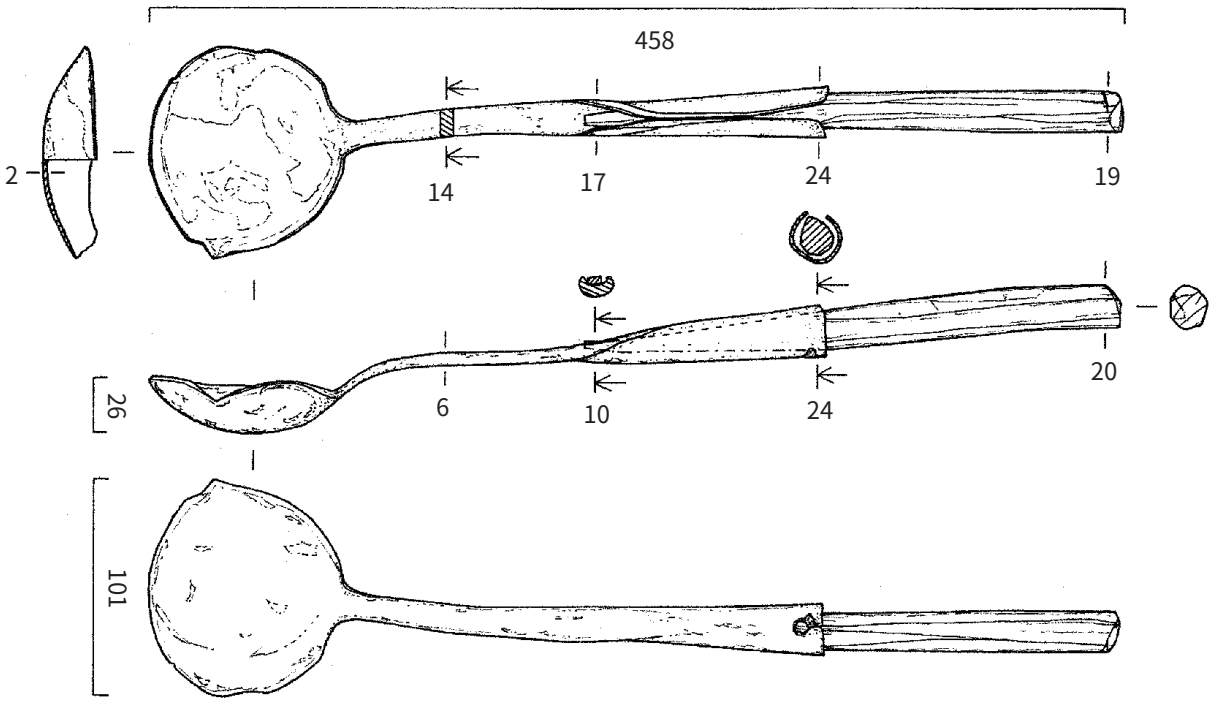
実測図 25



写真番号 41

写真番号　41
実測図番号　25
分類名　狩猟用具
資料名（地方）　ばんど（弾帯）
よみ　Bando(Dan-tai)
重量　270 g
材料　革
用途　［薬莢（実弾）］を入れて持ち歩く用具
使用者　松五郎といわれている。
使用年代　松五郎が使った銃に伴っていたもの。その後に使用した［ばんど］も残っているが、これはとても古いものである。
使用方法　［薬莢］を差し込む時は、［雷管］を上にした。
備考　この［ばんど］は長方形の革の部分に反りがあり、他の［弾帯］との相違が顕著である。［ばんど］には６点の［薬莢］が納まっているが、［雷管］を抜いたもの、［発火金］が見えている物、［雷管］を詰めたものと３種類が残されており貴重なものである。［発火金］の所に［雷管］を詰め、［雷管］の先端を突っつく事で発火して火薬に火が点き弾が飛んで行く事になるので、この［ばんど］の中の［薬莢］はその経過が良く分かる。［薬莢］の中には［ひとつ弾］は１つ、［散弾］は 20 ～ 30 個入れて使用する。［散弾］の場合は、７～ 10 m位離れていても獲物を狙うことができる。
収蔵施設　根子児童館
作図者名　角舘さえ

写真番号 42　［雷管］を抜いたもの、［発火金］が見えている物、［雷管］を詰めたものと３種類の［薬莢］が見られる［ばんど］



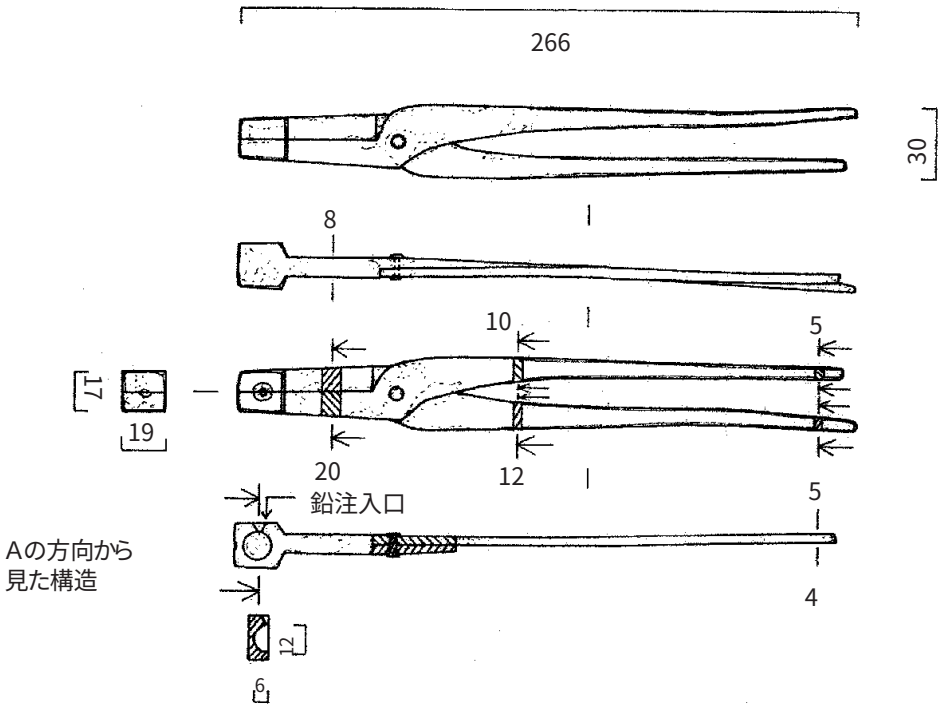
実測図 26

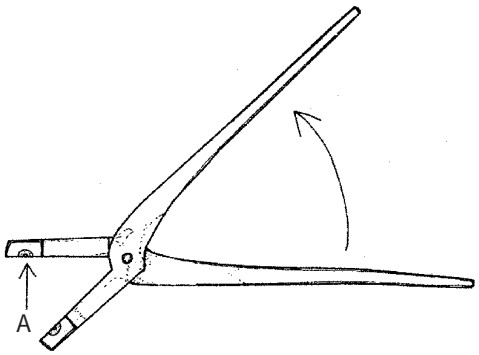
写真番号 43

写真番号　43
実測図番号　26
分類名　狩猟用具
資料名（地方）　柄ざら
よみ　E-zara
重量　330 g
材料　金属部…鉄の鋳物
用途　［村田銃］の［弾］を作る時に鉛を溶かす道具
使用者　先祖代々
使用場所　先祖代々、富久栄氏の代まで
製作(入手)場所　にわ（作業場）
製作(入手)方法　［七輪］に炭を熾し［柄ざら］を温めて鉛を溶かし、［鋳型］に流し込んで［弾］を作る。「ゆるぎ（炉）」の火より［七輪］の炭の方が火力が強い。
収蔵施設　根子児童館
作図者名　角舘さえ

写真番号 44　［発火金］［雷管］［鉛］
（佐藤富久栄氏所蔵）

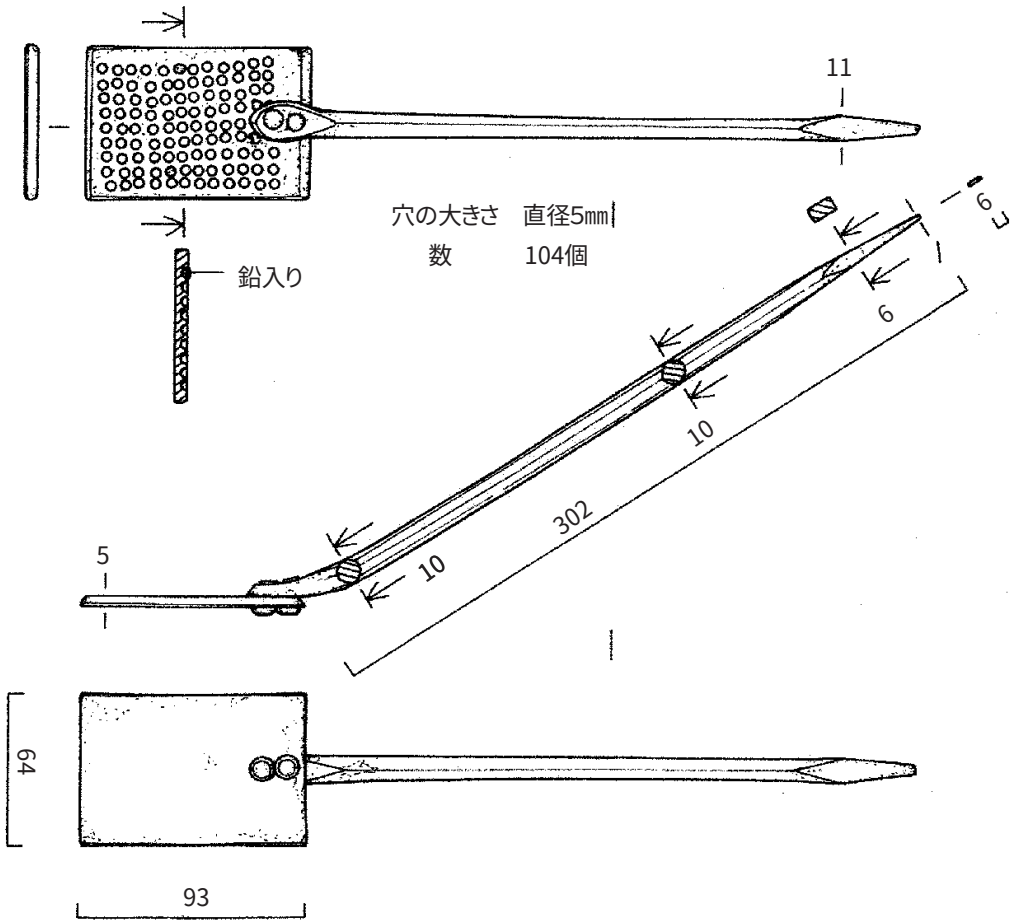
実測図 27





写真番号 45

写真番号　45
実測図番号　27
分類名　狩猟用具
資料名（地方）　鋳型（ひとつ弾用）
よみ　I-gata(Hitotsu-dama-yô)
重量　190 g
材料　鉄の鋳物
用途　［村田銃］用の［ひとつ弾］製作具
製作(入手)場所　にわ（作業場）
製作(入手)方法　［七輪］に炭火を熾して［柄ざら］で鉛を溶かす。［鋳型］に溶けた鉛を流し込む。10分か20分で冷えるので［鋳型］から取り出して、［弾］の周りについた鉛の余分な部分を［あらやすり］や［鉈］で削り取って丸くする。
備考　［ひとつ弾］はクマ撃ち、［薬莢］や火薬は米内沢の銃砲店で買った。
収蔵施設　根子児童館
作図者名　角舘さえ

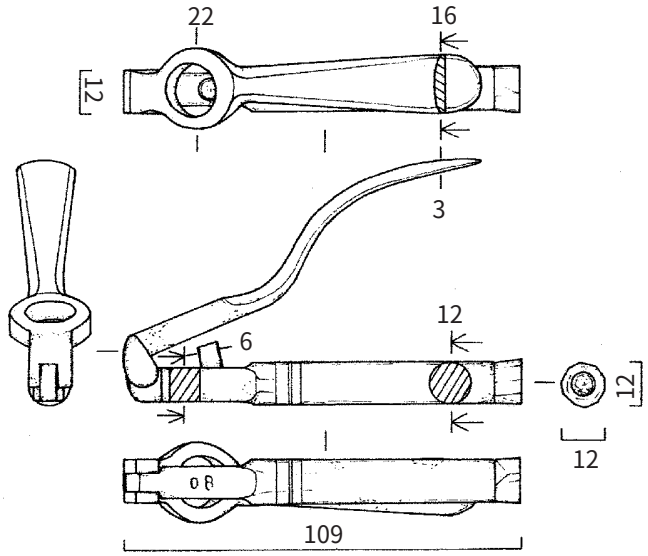


実測図 28

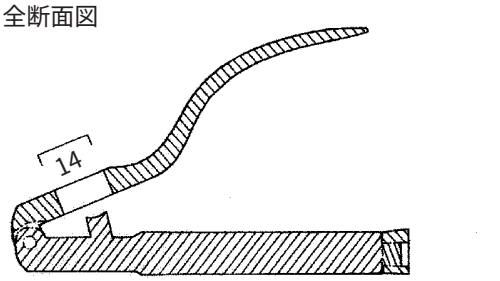
写真番号 46

写真番号　46
実測図番号　28
分類名　狩猟用具
資料名（地方）　鋳型（散弾用）
よみ　I-gata(San-dan-yo)
重量　340 g
材料　鉄の鋳物
用途　［村田銃］用の［散弾］製作具
製作(入手)場所　にわ（作業場）
製作(入手)方法　根子の［鋳型］は二枚重ね合わせる形式ではない。先ず［七輪］の上で［鋳型］に溶けた鉛を流す、まだ温かい時に［みごばき（みご製のほうき）］で型に流した鉛の上を掃くようにすると、［みごばき］は焦げるが、［弾］と［弾］の間が切れると共に［弾］がある程度丸くなる。そのようにして冷えるのを待ち、［鋳型］から［弾］を外して、硬い板の上に［弾］を広げて置く。その［弾］の上に硬いイタヤの板を載せて、ごろごろと軽く［弾］をこするように動かす。すると［弾］がまん丸くなる。
備考　［散弾］では７、８mから10ｍくらい離れた獲物をねらって撃った。
収蔵施設　根子児童館
作図者名　角舘さえ

実測図 29



全断面図



接合部観察不可　　接合部観察不可

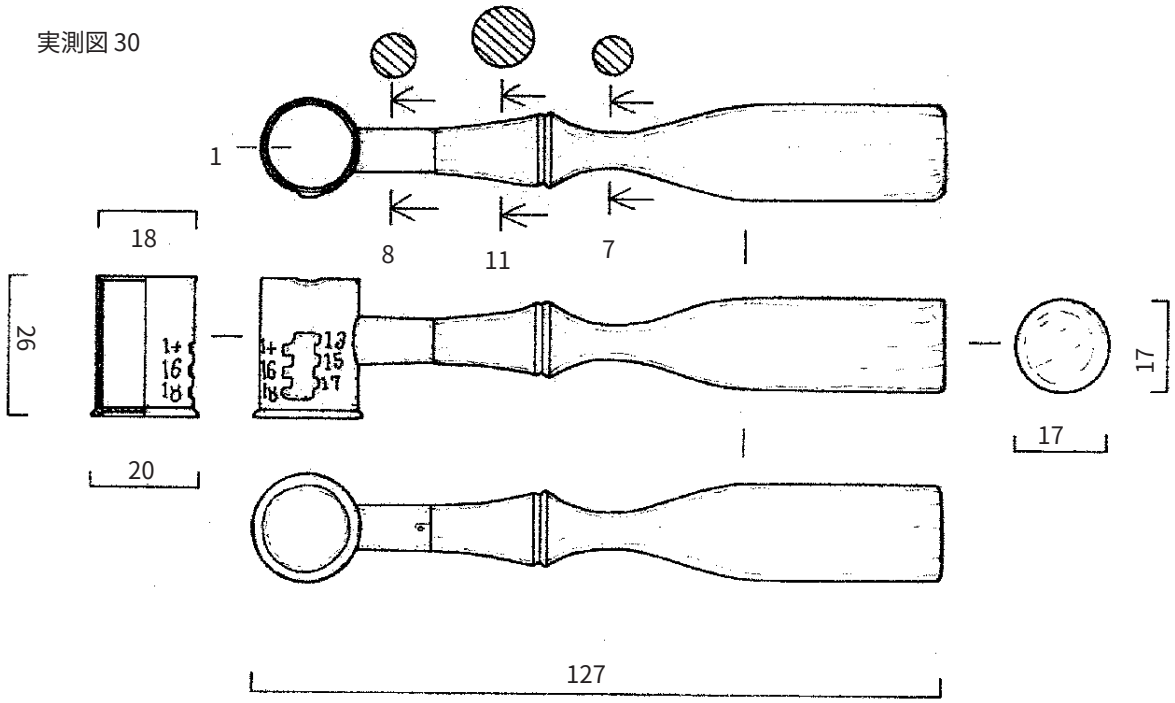
写真番号 47

写真番号　47
実測図番号　29
分類名　狩猟用具
資料名（地方）　つめ器
よみ　Tsume-ki
重量　128 g
材料　鉄材
用途　［薬莢］に［雷管］を詰めたり抜いたりする時、また火薬や［銃弾］を詰める時に使用
使用場所　にわ（作業場）
使用方法　［薬莢］には［つめ器］で先ず［発火金］と［雷管］を詰め、それから［火薬入れ］で火薬を量って入れて、［詰め器］の円筒状の柄で押す。その上に［厚紙］を入れ、［散弾］を入れて最後に［厚紙］で蓋をする。［ひとつ弾］の場合も、［雷管］を詰めてから火薬を入れ、［厚紙］を入れて［ひとつ弾］を入れ、［厚紙］で蓋をする。火薬の上に［厚紙］を詰めるのは、火薬の爆発力がより増し、［弾］を撃つ力が強まるからである。［厚紙］は、［銃］の番数によって決まっており、銃砲店で売っている。撃ち終わった［薬莢］から［雷管］を抜く時は、［つめ器］の太い方の柄の先端部がネジになっており、外す事ができるので、その中の突起部を［薬莢］の中に差し込んで［雷管］を押し出す。
備考　松五郎が使用した［ばんど］に伴っていた。
収蔵施設　根子児童館
作図者名　角舘さえ

写真番号 48 － 1…［つめ器］と［薬莢］

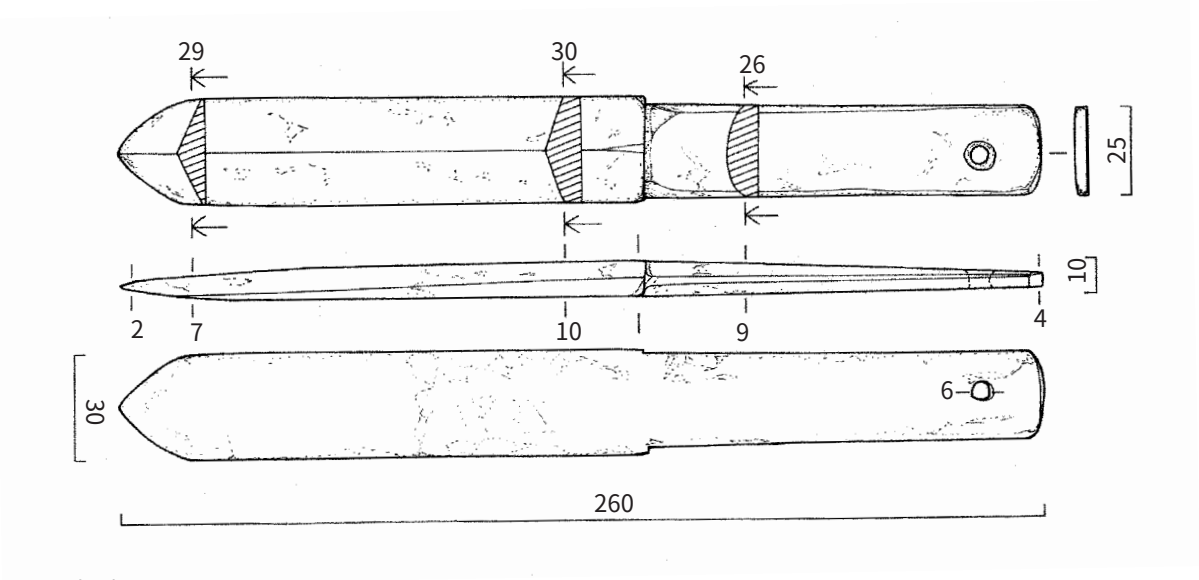
写真番号 48 － 2…［ひとつ弾］と［散弾］

実測図 30



写真番号 49

写真番号　49
実測図番号　30
分類名　狩猟用具
資料名（地方）　火薬入れ（火薬ざら）
よみ　Kayaku-ire(Kayaku-zara)
重量　19 g
用途　［薬莢］に入れる火薬や［散弾］を量る
備考　ベテランのまたぎは、勘で大体量を判断することができる。松五郎が使用した［ばんど］に伴っていた。
収蔵施設　根子児童館
作図者名　角舘さえ

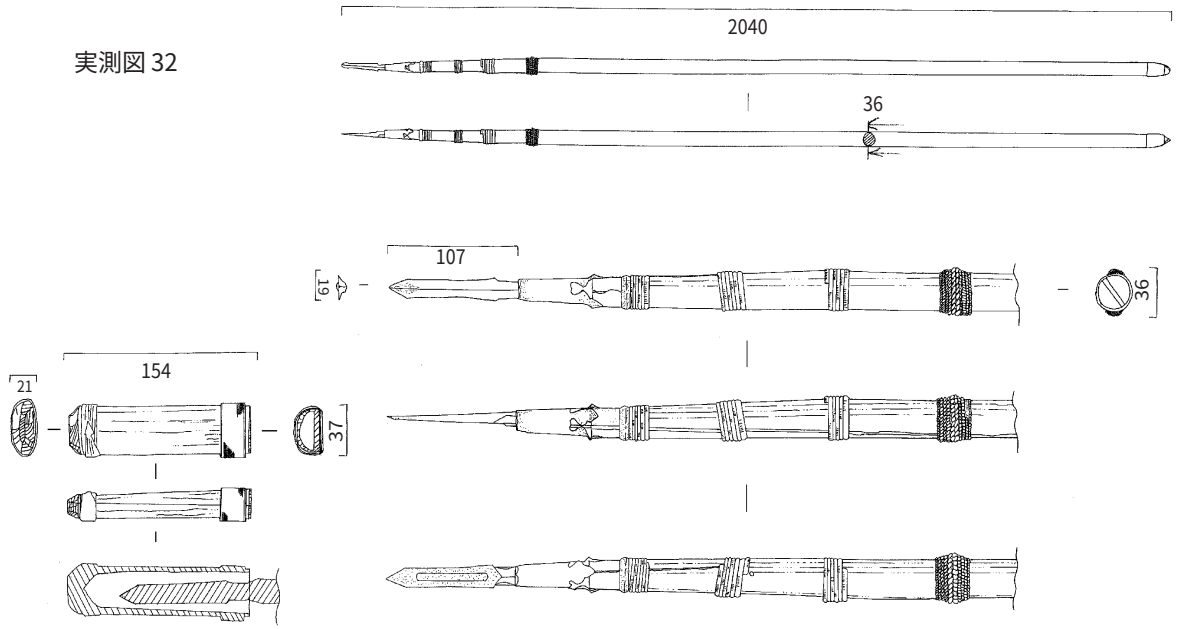


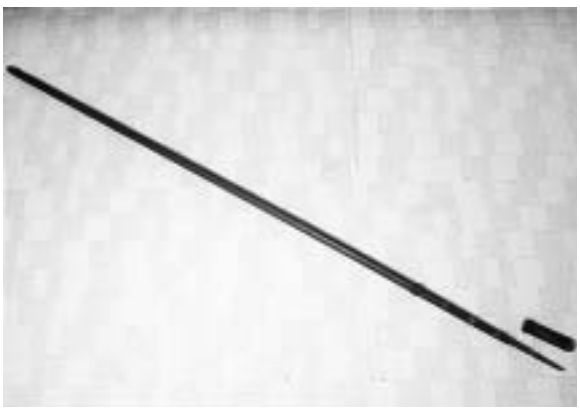
実測図 31

写真番号 50

写真番号　50
実測図番号　31
分類名　狩猟用具
資料名（地方）　たて（やり型）
よみ　Tate(Yari-gata)
重量　332 g
材料　身…鉄材
用途　［鉄砲］のない時代は［たて］だけでクマを捕った。クマを突くために使用。
使用者　「たちめぇ（たちまえ）」の人が持っていた。
使用方法　「まきがり」の時、勢子に追われたクマが「たちめぇ（たちまえ）」がいるなと思うと先に立ち上がる。立ち上がった時に［たて］で突くだけでなく押し倒す。するとクマは必ずその［たて］の柄を掴んで自分の方に引っ張る癖があるため、その力を利用してクマを押し倒す。［たて］が刺さっているので、クマはだんだんに弱っていく。それを待つ。
備考　身だけ持って歩くという事はない。これは柄が腐ってしまったので、身の部分だけ保管しておいた。刃を研ぐ場合は先端の方を念入りに研ぐ。
旧所有者　佐藤謹治（根子地区）
収蔵施設　根子児童館
作図者名　角舘さえ

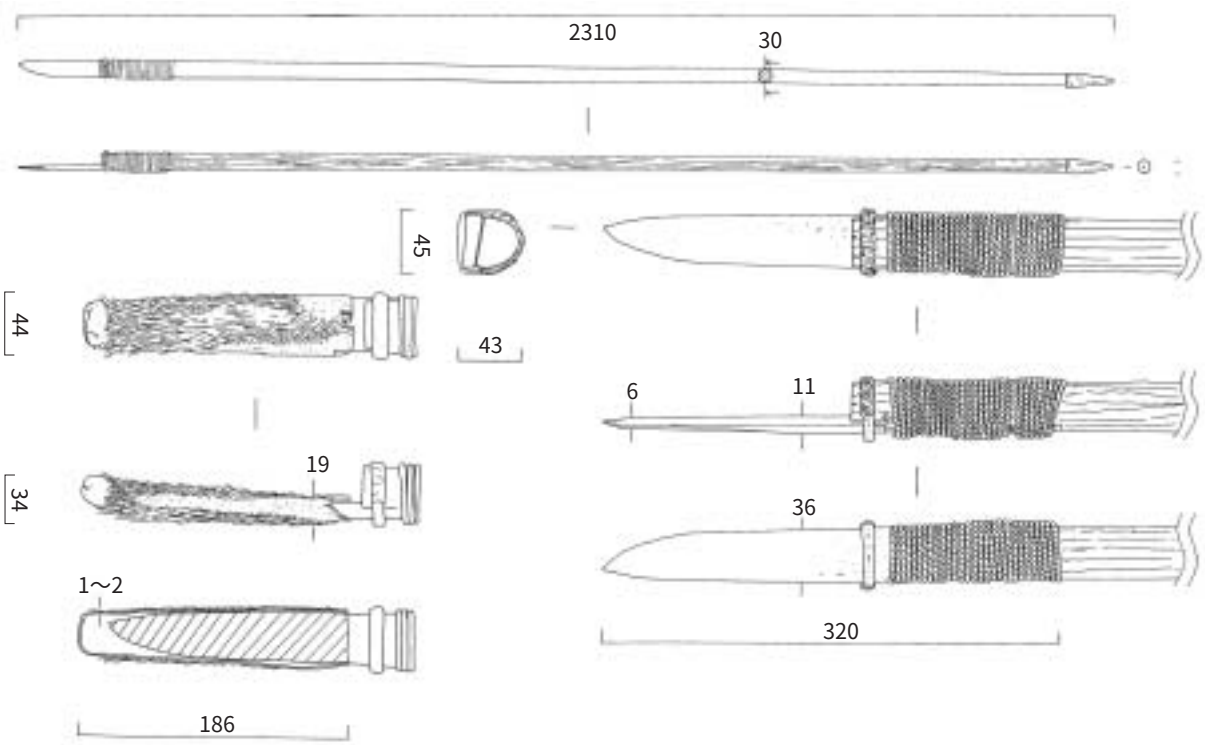
実測図 32



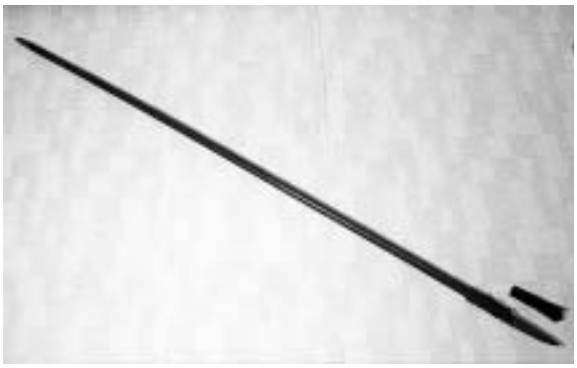


写真番号 51

写真番号　51
実測図番号　32
分類名　狩猟用具
資料名（地方）　たて（やり型）・さや
よみ　Tate(Yari-gata)・Saya
重量　1.33kg
材料　身…鉄材　柄…カシ材　さや…元はクマの手の部分の毛皮（現在はホウの木とサクラ樺）。柄と身の部分をサピタ（マタタビ）で巻いている。麻紐で巻いている所はカキ渋が塗ってある。
用途　［鉄砲］のない時代は［たて］だけでクマを捕った。クマを突くために使用。
使用者　「たちめぇ（たちまえ）」の人が持っていた。
使用方法　実測図 31 に同じ。
製作（入手）者　鍛冶屋で作ってもらう
製作(入手)方法　柄と槍の部分をサピタ（マタタビ）と呼ばれるもので巻いて合体している。紐が巻いてあってカキ渋で固めてあり、上端部分までカキ渋が塗ってある。
収蔵施設　根子児童館
作図者名　武田千鳥

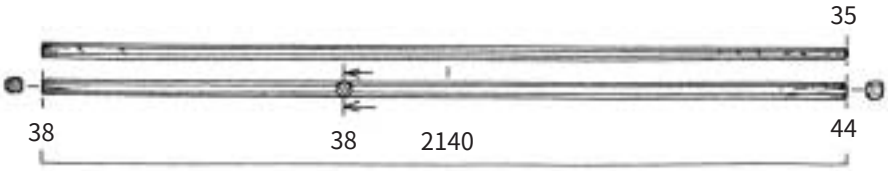


実測図 33

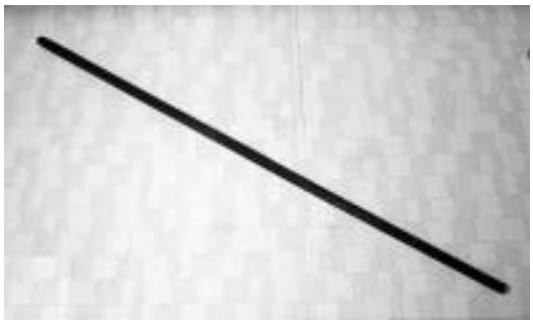


写真番号 52

写真番号　52
実測図番号　33
分類名　狩猟用具
資料名（地方）　たて（ながさ型）・さや
よみ　Tate(Nagasa-gata)・Saya
重量　2.3kg
材料　身…鉄材　柄…カシ材　さや…クマの手の部分の毛皮　マダ紐
用途　［鉄砲］のない時代は［たて］だけでクマを捕った。クマを突くために使用。
使用者　たちめぇ（たちまえ）の人が持っていた。
使用方法　実測図 31 に同じであるが、この［ながさ型たて］の場合は、たとえば山でクマを捕ってさばいたり料理したりする場合などに、柄から取り外して［包丁］代わりに使った。
収蔵施設　根子児童館
作図者名　田崎美紀子

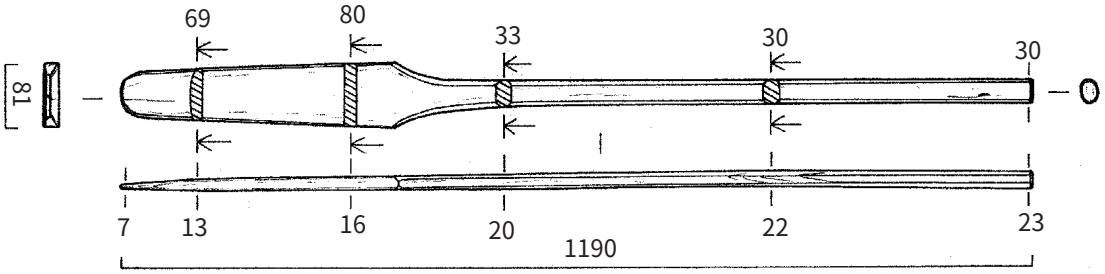


実測図 34



写真番号 53

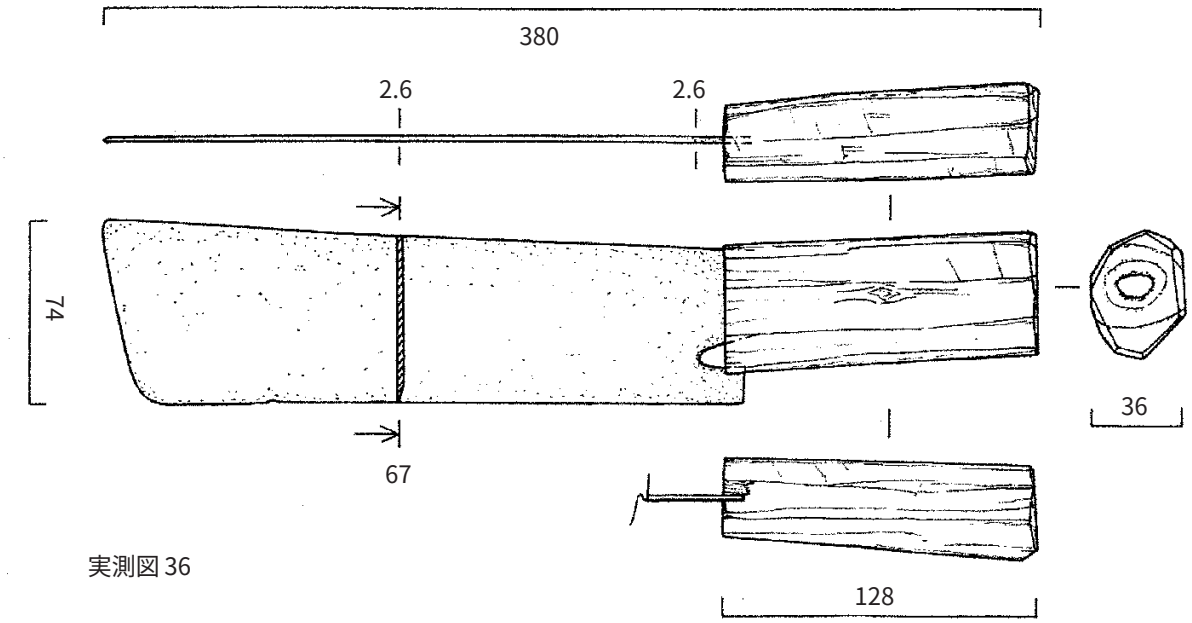
写真番号　53
実測図番号　34
分類名　狩猟用具
資料名（地方）　たて棒
よみ　Tate-bo
重量　1.696kg
材料　イタヤ材
材料入手方法　イタヤ材は木がまだ休んでいる春先に伐る。適当に割った木を陰干しにして、ひびが入らないように徐々に乾かした。「ゆるぎ（炉）」の上の［火棚］で乾かす事もあった。
用途　［たて］を使う訓練に使用した
使用年代　富久栄の時代は銃を使用したので、あまり使わなかった。
使用場所　山神様（さんじんさま）
製作(入手)方法　イタヤ材を［鉈］で削ったもの。
収蔵施設　根子児童館
作図者名　武田千鳥



実測図 35

写真番号 54

写真番号　54
実測図番号　35
分類名　狩猟用具
資料名（地方）　こなぎぇ（小ながえ）＝またぎべら
よみ　Konagye(Ko-nagae)=Matagi-bera
重量　530g
材料　イタヤ材
材料入手方法　イタヤ材は木がまだ休んでいる春先に伐る。適当に割った木を陰干しにして、ひびが入らないように徐々に乾かした。「ゆるぎ」の上の［火棚］で乾かす事もあった。
用途　山の斜面を歩く時、山側に杖のように突いて歩いたり、傾斜地を登る時に胸まである雪を漕ぐようによけたり、雪洞を掘ったり、ウサギが逃げ込んだ穴を掘ったり、アオシシ（カモシカ）などを捕まえた時、獲物の急所を叩いて殺したりする時に使った。また「春またぎ（狩猟）」の時には、急な斜面を下りる時に、［またぎべら］を股に挟んで柄の部分を両手で持って「ぐぐっ」とブレーキをかけながら滑り下りたりした。
使用者　最後に使ったのは昭和 30 年頃まで
製作(入手)方法　イタヤ材を割って荒削りし、最後の仕上げは瀬戸物のかけらで削って仕上げた。瀬戸物のかけらは［鉞］の柄の最後の仕上げにも使った。
収蔵施設　根子児童館
作図者名　角舘さえ



実測図 36

写真番号 55

写真番号　55
実測図番号　36
分類名　脂とり用具
資料名（地方）　脂とり包丁
よみ　Abura-tori-bocho
重量　288 g
材料　身…鉄材　柄…キリ材
用途　クマの皮をなめして、脂をとる時に使用する。
使用者　富久栄
使用年代　富久栄が 60 歳位まで使用。
製作（入手）者　柄の部分はマタギ自身が作る。身は鍛冶屋に頼む。
製作(入手)方法　［焼け火箸］を柄の部分に何度も入れて、その穴に身を少しずつ差し込んだ。
収蔵施設　根子児童館
作図者名　角舘さえ

製薬用具

写真番号　56
分類名　製薬用具
資料名（地方）　薬研（らげん）
よみ　Ragen
重量　器の部分…2.12kg
材料　ケヤキ材
用途　胃腸薬となるクマの胆、牛馬薬となる「八年袋」と呼ばれるクマの腸、産子を乾燥したもの、あるいは頭骨などを磨り潰す。
製作(入手)方法　一木作りである。車状の部分は残念ながら失われている。
備考　婦人薬の時には［薬研］を使わない。婦人薬はクマの内臓（子宮）を乾燥して薄く切ったものを、［ふりだし］または［寒冷紗袋（かんれいしゃぶくろ）］という目の粗い極めて薄い綿布の袋に入れて煎じて飲む。木製の［薬研］は製薬許可をとる前からあった。
収蔵施設　佐藤富久栄家

写真番号 56

写真番号　57
分類名　製薬用具
資料名（地方）　薬研（らげん）
よみ　Ragen
重量　全体…８kg
材料　鉄
用途　胃腸薬となるクマの胆、牛馬薬となる「八年袋」と呼ばれるクマの腸、産子を乾燥したもの、あるいは頭骨などを磨り潰す。
備考　婦人薬の時には［薬研］を使わない。婦人薬はクマの内臓（子宮）を乾燥して薄く切ったものを、［ふりだし］または［寒冷紗袋（かんれいしゃぶくろ）］という目の粗い極めて薄い綿布の袋に入れて煎じて飲む。
収蔵施設　佐藤富久栄家

写真番号 57

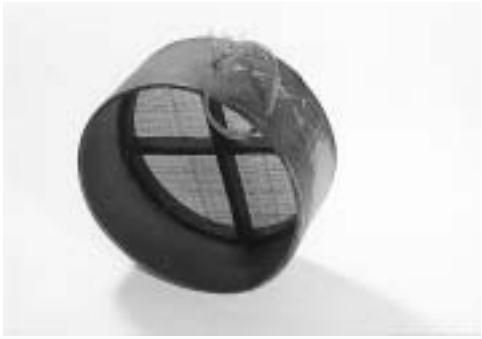
写真番号　58
分類名　製薬用具
資料名（地方）　ころす
よみ　Korosu
重量　95g
用途　胃腸薬の「大正散」用。散薬を作る時に粉をふるい分けて選別する。
備考　墨書…大正散用　４７７１４　拾弐月拾五　日求代金四拾銭
収蔵施設　佐藤富久栄家

写真番号 58

写真番号　59
分類名　製薬用具
資料名（地方）　ころす
よみ　Korosu
重量　109g
用途　胃腸薬の「大正散」用。散薬を作る時に粉をふるい分けて選別する。
備考　墨書…昭和三年拾弐月拾五日　求　代金四拾五銭也　大正散用
収蔵施設　佐藤富久栄家

写真番号 59

写真番号　60
分類名　製薬用具
資料名（地方）　ころす
よみ　Korosu
重量　125g
用途　牛馬薬用。散薬を作る時に粉をふるい分けて選別する。
備考　墨書…牛馬薬用
収蔵施設　佐藤富久栄家



写真番号 60

写真番号　61
分類名　製薬用具
資料名（地方）　薬包紙
よみ　Yaku-hoshi
重量　２束…98g
用途　散薬を包む紙
備考　富山の薬屋さんから仕入れた。
収蔵施設　佐藤富久栄家

写真番号 61

写真番号　62
分類名　製薬用具
資料名（地方）　胆のし板
よみ　I-noshi-ita
重量　190g
旧所有者　佐藤国男（根子地区、寄託）
収蔵施設　マタギ資料館（展示室）

写真番号 62

写真番号　63
分類名　薬の素材
資料名（地方）　クマの雄の性器
よみ　Kuma-no-osu-no-seiki
重量　50g
旧所有者　佐藤国男（根子地区、寄託）
収蔵施設　マタギ資料館（展示室）

写真番号 63

信仰・慣習

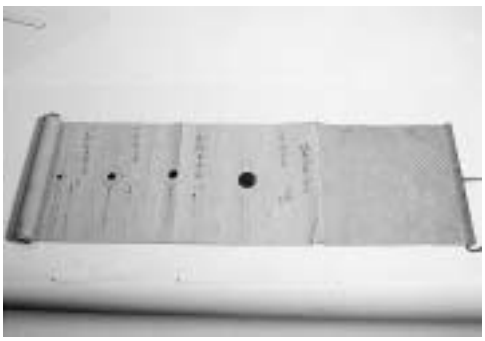
実測図として［巻物入れ］を作製したが、この巻物は「しかり」以外は、家の者であっても見ることができないものだった。富久栄さんは「しかり」になった時に初めて中身を見る事ができたそうで、感慨深いものがあったとの事である。

写真番号　64－1　山達由来　64－2　山立根本巻
64－3　山立根本巻　64－4　坂本流真之目付
64－5　巻物入れ
実測図番号　37（写真番号64－5）
分類名　信仰・慣習
資料名（地方）　巻物入れ
よみ　Makimono-ire
重量　35ｇ
材料　表地ａ…平織り・糸の密度（５㎜四方経糸13本×緯糸12本）・プリント。裏地ｂ…平織り・糸の密度（５㎜四方経糸８本×緯糸９本）・無地・生成。裏地ｃ…平織り・糸の密度（５㎜四方経糸７本×緯糸６本）・後染め・紺地に模様。紐付け部…平織り・糸の密度（５㎜四方経糸６本×緯糸18本）・先染め・紺地に赤色、白色、茶色の格子柄。縫い糸…黒色綿糸の１本どり。紐…麻布？紺色と白色の紐を組んだ組み紐。
製作(入手)方法　手縫い　袷仕立て
作図者名　角舘さえ
収蔵施設　根子児童館

写真番号64－1　山達由来

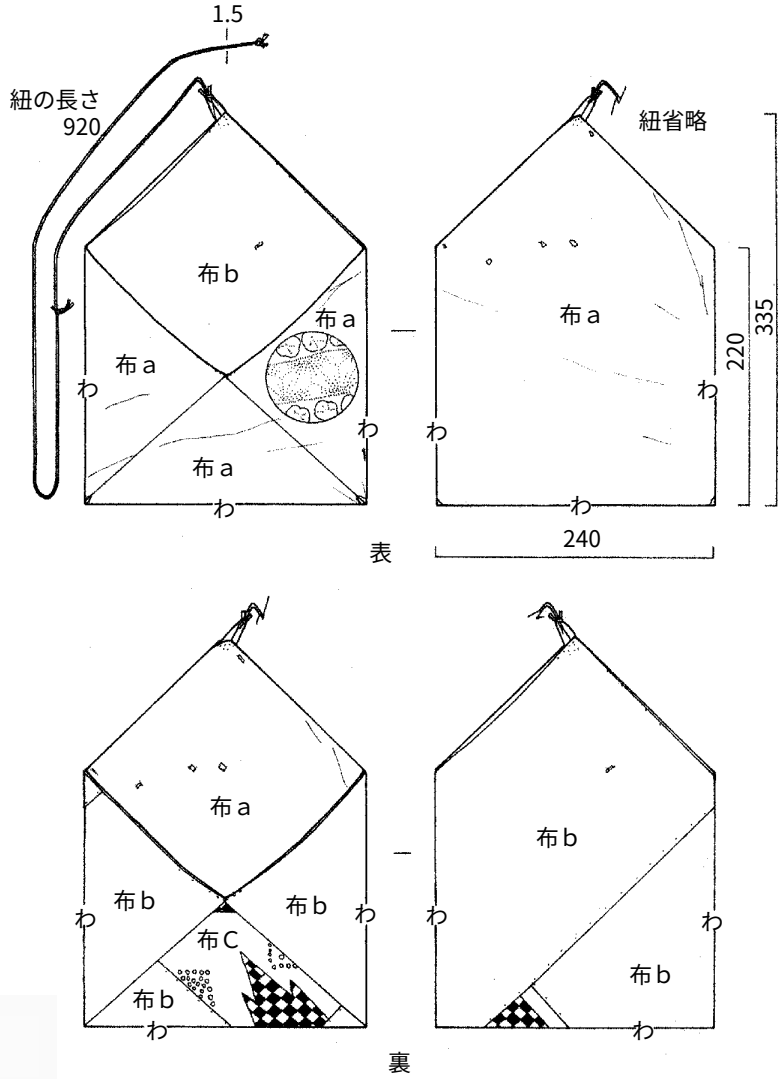
写真番号64－2　山立根本巻

写真番号64－3　山立根本巻



写真番号64－4　坂本流真之目付

実測図 37



写真番号 64 － 5　巻物入れ

写真番号 65

写真番号　65
分類名　信仰・慣習
資料名（地方）　おこぜ
よみ　Okoze
重量　30g
材料　魚（オコゼ）
材料入手方法　魚屋に取り寄せてもらう
用途　山の神様（女性）にお供えする（山の神様が「おこぜ」を好んでいた）。
使用方法　「またぎ（狩猟）」に出る時は、生のオコゼを「しかり」が用意して、山神様に一尾供える。「しかり」の家に持ち帰ったものは神棚や床の間にあげておいた。家の中にも［山神様］を祀っているので、そこにおいた。
製作(入手)方法　生のオコゼがない時には薫製（焚き火の煙で燻したもの）にした。焚き火の煙で燻しても虫が付いた。
収蔵施設　根子児童館